

●山本 剛（やまもと つよし）
8月7日茨城県生まれ。気鋭のゲームデザイナー集団F.E.A.R.に所属。TRPGのデザインやライティングを中心に活躍中。主なゲームに『創聖記エルジェネシス』（ゲーム・フィールド）がある。趣味はスポーツをすること。特に好きなのが、アメリカンフットボールと格闘技。

カバーイラスト/壱
カバーデザイン/小林博明（K Plus artworks）



56-5
536
新☆魔導物語2 ルルーと愛の日々
山本 剛
角川スニーカー文庫

ISBN4-04-415605-0
C0193 P536E
定価536円（本体520円）

「サタン様、ルルーはあなたを世界中の誰よりも愛しておりますわ……★」
今夜はサタンとの会食だ。朝、ルルーは幸せな夢のなか。でも起きてみると、ちっちゃな子供に戻ってた!?　すぐに吸血伯爵の仕業と判明。伯爵の城へと乗り込んだルルーだけど、彼の意外な告白に動揺する。だがそれはルルーの愛の聖戦の、ほんの序章にすぎなかった……！　ちょっとワガママだけど、ほんとはかわいい（？）女の子、ルルーの大冒険!!

角川スニーカー文庫
山本　剛作品集

魔　導　物　語
ぷよぷよ大魔王の降臨っ!
魔　導　物　語　2
ぷよぷよ大明神の復活っ!
魔　導　物　語　3
ぷよぷよ大司教の陰謀っ!
新☆魔導物語1
アルルとおとぎの国
新☆魔導物語2
ルルーと愛の日々

カバー　暁印刷

新★魔導物語2

ルルーと愛の日々

山本剛

角川文庫 10317

新★魔導物語2 ルルーと愛の日々
山本剛
角川文庫
10317


『ルルー、オレはいまこそはっきりと悟(さと)った。
本当は、誰(だれ)を愛すべきなのかを……！』
「サタン様……」
サタンの衝撃的(しょうげきてき)な告白で、ルルーの胸の中の乙女心が大きくゆれている。





　びっ！　とキメるドラゴンケンタウロスの後ろには、女性モンスターがたくさん。
「で？　サタン様のファンクラブと、あたくしのファンクラブが集まって、どうしようというの？　親睦会（しんぼくかい）でも開くの？」
　とてもそんなフンイキじゃないとは思いつつ、ヒニクまじりでルルーはいった。

「アルル！　しっかりしなさい!!　アルル!!」
「ちょっち、イタイかも……」
「あなたってコは……！」
　カーバンクルといっしょに、ルルーはアルルをやさしく抱きかかえた。思わず、また涙があふれそうになる。



新★魔導物語2

ルルーと愛の日々

山本剛

角川文庫 10317

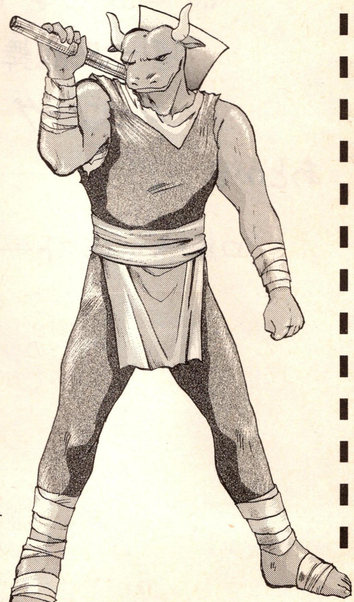
目次

口絵・本文イラスト——壱



ルルー

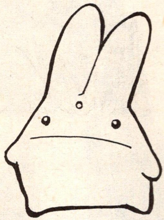
超ド級の鉄腕を誇る、
格闘お嬢サマ。
サタン様ラブラブ★　けど、
その恋の大作戦は
いつも失敗ばかり……。



ミノタウロス

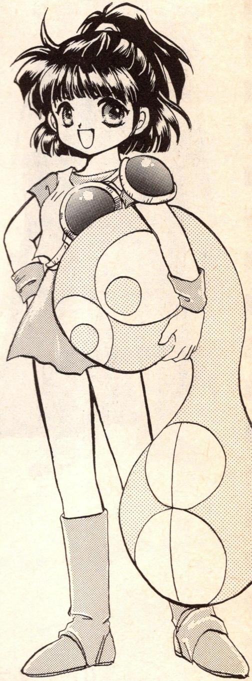
どんな仕打ちにもめげず、
黙々とルルーに仕える従者。
最近、いろいろカクサクして
いるというウワサが……。

登場人物



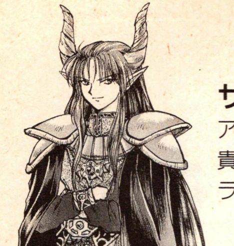
カーバンクル

もとはサタン様のペット。
いまはアルルにくっついて、
食っちゃ寝、食っちゃ寝の
自由気ままな生活を歩んでいる。



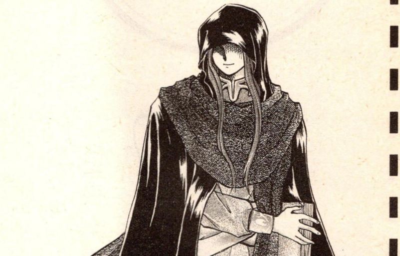
アルル・ナジャ

超一流の魔導師を目指して修業中の女のコ。
今回は主役をルルーに取られてしまって、あまり出番がなーい。



サタン様

アルルを妃にとたくらんでいる魔界の貴公子。実はカーバンクルちゃんラブラブ★ というウワサ。類似品に注意。



ルシファー先生

ルルーが以前にお世話になった先生。いまはアルルのお師匠サマをしている。実はサタン様の双子の弟。

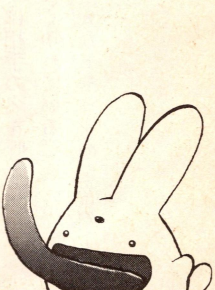
プロローグ

じっ。

と男は、かたちのよい切れ長の眼で、腕の中の女性を見つめた。漆黒の水晶のような輝きを放つふたつの瞳に、レディというにはまだ少々早そうな、心持ち幼さの残る美しい顔がうつる。いっぽう、少女のうるんだ大きな眼には、神がかり的な美しさを持つ男の顔がある。サラサラとしたエメラルド色の長髪から突き出しているのは、〝人間〟にはない気高さと荒々しさを表す2本のツノ。男は、人間ではなかった。

ふたりの様子はまるで、地の底からやってきた〝魔界の貴公子〟が、切れ味の鋭いその美貌で良家のお嬢様をかどわかし、生き血をすすろうとしているかのように見える。

しかし、実際にふたりを取り巻くその雰囲気は、決してそのような魔的なものではなく、明らかな〝愛〟の波動。まわりにはなにもなく、いま世界中に存在しているのは、この美男と美少女のふたりだけ。



たおやかなピアノとバイオリンのアンサンブルが聞こえてきそうな世界の中で、まるで合わせ鏡のように互いの姿を瞳にうつして、ふたりはみつめあっていた。

『ルルー……』

まるでセレナーデを唄うかのように、男は少女の名をつぶやいた。彼女をささえる手は、決して強すぎず弱すぎず、繊細で触れただけで壊れそうな乙女心をそっと抱くように優しい。

『ルルー、オレはいまこそハッキリと悟った』

男はいった。

『本当は、誰を愛すべきなのかを……！』

氷の迷宮に響くような冷たい声の中に、その氷を溶かすほどの熱情が秘められている。

もちろん〝誰〟というのは、眼の前の少女のコト。

「サタン様……」

驚きと歓喜がいりまじった複雑な表情で、なんとかルルーは相手の名を呼んだ。

サタンの衝撃的な告白で、ルルーの胸の中の乙女心が大きくゆれている。

心臓は、まるで〝灼熱のファイヤーダンス〟で踊り狂う巨大なドラゴンの足音のように、大きく、激しく脈打ち、いまにも破裂しそう。

もしかして、これは夢……？

それとも、なにかの冗談……？

それとも、ホントにホントの現実……？
夢でもいい、ずっと覚めないでいてくれたら……。
このままずっと、永遠に、サタン様に抱かれていたい……。
「………」
いろんな想いが頭の中をかけめぐり、どんな顔をしたらいいのかわからない。どんなコトを話したらいいのかわからない。サタン様が振り向いてくれたら、アレをいおうとか、コレをいおうとか、日記や詩集にしたためたりして、毎日のように考えていたはずなのに……。
「………」
バカバカ！　なにぼーっとしてんの!?　あなたが夢にまでみてた光景でしょうが！　ボゲボゲしてないで、もっとシャキッとしなさい！　シャキッと！　サタン様におバカだと思われちゃうじゃないの！
と、心の中の強気な自分が、一生懸命にハッパをかける。だけど、夢が現実になったとたんにもうルルーの頭の中は真っ白になってしまって、ナニをどうしたらいいのやら。
「………」
サタンがルルーをそっと抱き、愛の告白をつぶやく……。
それはまさに、ルルーが毎日のように思い描いていた光景だった。ひとめあったその日から。吸血伯爵の城から助け出してくれたそのときから……。

他人からみれば、それはヒトメボレというやつかもしれない。サタンからみれば、ペットの〝カーバンクル〟を探している途中に小娘ひとりを助けてやったにすぎないのかもしれない。だけどルルーからみれば、それは〝運命の出会い〟だった。生涯の愛を注ぎこんでも、まだまだゼンゼン足りないほどの。

そしていま、夢は現実となった。夢を、サタンを追い続けてひたむきに努力してきたかいがあったというもの。ただ、それがあまりにも突然にやってきたのでなければ、いまほど胸がドキドキ、頭がパニックにならずにすんだかもしれないのに……。

『ふっ……』

かたまったままで次の言葉が出てこないルルーに向かって、サタンは優しく微笑んだ。もちろん、ぼーぜんとしっぱなしの小娘にあきれたワケではない。

『冗談ではないぞ、ルルー。オレは本気だ。マジでお前を愛してるんだ……』

サタンのいうとおり、ルルーのうつる彼の瞳の奥には、一片のくもりもない。

「で、でも……」

ようやくルルーは再び声を発した。サタンの言葉を疑っているワケではないが、この状況を素直に受け止められない要素が、ルルーの心にわだかまっている。

『アルルのコトだな？』

「………」

サタンがいうと、ルルーはこくりと小さくうなずいた。

アルル・ナジャ――。

それは、ルルーにとっては恋敵の名前だった。いっぽうのサタンにとっては、自分の妃にともくろんでいた娘のコトである。

魔法の実力はともかく、顔も、プロポーションも、頭の回転も、格闘技のウデも、はっきりいって自分のほうがはるかに上だとルルーは思っている――このアルルを妃にすべく、サタンはあの手この手を使って迫っていた。そしてその後ろで、ルルーはサタンに振り向いてもらえるよう、日夜努力をしてきたのだった。心に決めた相手がサタンにいると知っていながら……。

そのかいあってか、サタンの気まぐれか、いまふたりはこうして向き合っている。けっして報われることはないだろうとなかばあきらめながら、逆に絶対に報われると信じ続けて努力した結果が、ついに花開いたのだ……！

『お前が気にする必要はない。これは、オレの意思の問題だ』

そんなルルーの乙女心を握り潰すかのように、サタンはいい放った。〝魔界の貴公子〟たる、本物の悪魔の鋭い冷たさをもって。

「そ、そんないい方、アルルにあまりにも失礼ではありませんか……？　あたくしを愛してくださるのは嬉しいけど……」

恋敵とはいえ、ルルーとアルルはともに旅をし、ともに魔法学校で学んだ仲。そんな、オッ

チョコチョイだけど友達思いの、妹のようなアルルをないがしろにできるような冷たさは、ルルーにはない。

『優しいのだな、ルルーは……』

兄や父のようなあたたかさと、悪魔のような冷たさをないまぜにして、サタンは微笑んだ。

この複雑な笑みが、ルルーの心をとろけさせる。ルルーがサタンを好きになったのは、単に二枚目だからというだけではない。触れたら斬れそうな悪魔の顔の奥にある、父、兄、恋人としての――男性の持つすべての優しさと、人間よりも人間味あふれるところ。サタンがそれを持っていることを知っているのは自分だけ、とルルーは自負している。

サタンは、貴族としての地位も名声もかなぐりすてたかのように、ひたむきに、ときにはこっけいにアルルのハートをものにしようと努力し続けてきた。〝魔界の貴公子〟と呼ばれるほどの実力者ならば、魔力でアルルを従わせ、ムリヤリ妃にできたはずなのに。

そんな、奇妙な不完全さというべきものを持っているからこそ、ルルーはサタンを好きになったのだ。二枚目だから、魔界の貴族だからというだけで魅了されるほど、あたくしは尻軽じゃあないわ。サタン様のお力になりたいと誰よりも強く思っていて、実際にそれができるのはあたくししかいないのよ……！

『心配はいらん』

あらためてサタンへの想いをめぐらすルルーに向かって、〝魔界の貴公子〟はいった。

『アルルとて、優しく聡明な娘だ。真実をすべて話せば、きっとわかってくれるさ』

ぐぐっ。

と、話しながらルルーに顔を近づける。もう、鼻と鼻、唇と唇が触れそうなほど。

『もう、自分の心にウソはつけない。確かに次期魔界の王として、強大な魔力を秘めたアルルはぜひとも欲しい。できれば、カーバンクルちゃんも……』

サタンが口を開くたびに、吐息がルルーの頬をそっとなでていく。

『だが、それは本当の〝愛〟か？　いやちがう。本当の〝愛〟は、いまオレの目の前にある。懸命にオレを想い続けてくれたお前がな……』

「サタン様……」

『オレとて木石にあらず。お前がどれほどオレを慕ってくれていたか、オレを振り向かせるために努力してきたか、すべて知っているつもりだ』

「………」

ルルーの心は、もはや爆発寸前。胸のドキドキがサタンに気づかれやしないかと思うと、またドキドキする。うるうるした眼には、倒れそうな自分を優しくささえてくれるサタンの顔しかうつっていない。

『オレが困ったとき、いつもとなりにはお前がいた。いまこそ、その礼をいわせてもらおう。ルルー、ありがとう……』

「そ、そんな……」

もう、頭の中は沸騰しまくっていて、その熱で身体はドロドロにとろけそう。

ああ、このまま死んでもいい……。

とも思うケド、ホントに死んでしまったら想いがとげられないので、ここで死ぬワケにはいかない。これだけを頼りに、ルルーは崩れそうになる自分を懸命にささえ続けた。

『さあ、誓いのくちづけを……。そして、魔界に戻って盛大なウエディングだ』

「は、はい……★」

ああ、この言葉をどれだけ待ち続けたことか……！　サタン様、ルルーはきっとあなたを幸せにしてみせます……！

そんな想いを胸にルルーは眼を閉じた。それでも、サタンのくちびるが、ゆっくり、ゆっくりと近づいてくるのがわかる。想い人の気配が、どんどんどん、ルルーを包みこむかのように大きくなっていく……。

ルルーの想いがとげられるまで、あと数センチ、いや数ミリ……！

ぐぐっと、

ぐぐぐっと、

ぐぐ――――っと……!!

〝大・破岩掌〟な朝の章

「……さま……」

ゆさゆさ。

「……ルー様……！」

ゆさゆさ。

「……ルルー様……！」

ゆさゆさ。

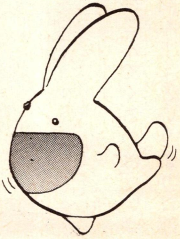
誰かが、一生懸命に起こしている。だけどベッドの上のルルーは、いっこうに夢の世界から戻ってこようとする気配はない。

「ルルー様ってば……！」

ゆさゆさ。

「う……うん……。むにゃむにゃ……」

おっきな手でゆさゆさされるのって、ゆりかごの中にいるみたいで、なんだかイイ気持ち。



昔を思い出すわねぇ。まだちっちゃい頃、もうちょっと若くてバリバリ現役だった〝じい〟に、こうして毎日ゆさゆさされて起こされたっけ……。

「ルルー様、起きてください！」

ゆさゆさ。

そういえば——たぶん、起こしてくれてるのはミノタウロスだと思うケド——アイツの手って、こんなに大きかったかしら……？　いつもより大きな手に感じるのは気のせい……？

「ルルー様ってば、タイヘンっス！　起きてください！」

ゆっさゆっさ。

「うぅ～～～～～～～～ん……」

ゆさゆさのあまりのシツコさに、ルルーはそれを払いのけるように毛布をかぶりなおした。

なによぉ、ジャマしないでよ。せぇっかく、もう少しでサタン様と誓いのくちづけを交わすところだったのにぃ。夢くらいゆっくり見させてほしいわ、まったく……。

って……。

「……!?」

夢——!?

ルルーははたと気がつき、パチッと眼を開けた。すると眼の中に飛びこんでくるのは、いつもと変わらない横だおしになった自分の部屋の風景。心なしか天井が高く——というよりは部

屋全体が広く感じられる。壁(かべ)にかけたサタンの肖像画(しょうぞうが)が遠い……。
——ってコトは……。
と、まだちょっち寝(ね)ぼけてる頭をフル回転させて、ルルーは考えた。
いままでのは全部夢……？
サタン様が「ルルーを愛してる」といってくれたのも、誓いのくちづけも、魔界(まかい)でのウェディングも、みんなみんないつもの夢だったってワケ……？
そう、サタンに恋(こい)こがれてずっと追い続けていたルルーは、彼と結ばれるときのコトを、まさに毎晩のように夢に見ていたのだった。今回も、例によって例のごとしというワケ。
いつもよりはミョーにリアルだったから、今度こそはホントにホントのホントだと思ってたのに……。
とは思うものの、世の中そうそうアマくはないのは、身にしみてわかっている。カンタンに願いがかなうのなら、いまごろルルーはサタンのお妃(きさき)のハズ。
「はぁ〜あ……」
とタメ息をつく代わりに、ルルーはいつものようにむっくりと起き上がった。サタンと結ばれる夢の途中(とちゅう)で従者(じゅうしゃ)のミノタウロスにたたき起こされるのは、日常(にちじょう)チャメシゴト——いや、茶飯事(さはんじ)。いつもいつも落ちこんでちゃキリがないし、逆に、ゼッタイに夢を現実にしてみせるもんね！　とゲンキがわいてくるというもの。やっぱ、人生は前向きでなきゃ★

それにしても……、とルルーは思う。

あの誓いのくちづけはおしかったなぁ……。いつもよりリアルだっただけに、いつもよりよけいにもったいなかったわ。あともう少し、ミノタウロスが起こしに来るのが遅かったら……。

「………」

じろっ。

と、ルルーはベッドの脇に立っている牛頭人身のモンスター——ミノタウロスをにらんだ。

彼は、いつからかルルーに付き従い、執事のじいといっしょに身の回りの世話やボディガードをしてくれる、気は優しくて力持ちの魔物。

「あ……、ルルー様、お、おはようございます」

ルルーの、いつもよりちょっちハクリョクのあるニラミにおびえながらも、ミノタウロスは朝のあいさつをした。いつもよりも大きくなったようにルルーには見えるケド、いまのルルーにはそんなコトを気にしてる余裕なんてない。

ミノタウロスのおびえたあいさつから、

「どうしてもっと遅く起こしてくれなかったの!? まったく気がきかないんだから……」

とルルーのヤツアタリ的な文句につながるのが、いつもの日課。さすがのミノタウロスも夢の中まで気をまわすコトなんてできないケド、もう慣れてしまった。強気でワガママなお嬢サマだけど、実はとっても優しくて繊細で、人情に厚いルルーの性格をよく知っているからこそ、

ヤツアタリ的な文句にだって耐えられるというもの。ホントにワガママなだけのお嬢サマだったら、ゴツくてオソロシゲな、腕力だけが自慢のミノタウロスなんて、お側におかせてくれやしないはず。

「ミノタウロしゅったら、どうちて……！」

というわけでいつものように、せいいっぱいのヤツアタリと、せいいっぱいの親愛の情をこめて文句をいおうとルルーは立ち上がろうと……した瞬間、

ぐいっ。

「……!?」

ねまきのスソを踏んづけてバランスを崩し、

「きゃあっ！」

頭から床にまっさかさま！

「ああっ！　ルルー様！」

ミノタウロスが助けようと手をのばすケド、気づいたときにはもう遅い。

ゴンッ！

ルルーは、床に思いっきり顔を打ちつけた。

「痛ったぁ〜い……！」

「ルルー様、大丈夫っスか!?」

　ナミダ眼で真っ赤になった鼻をおさえるルルーを、ミノタウロスは筋肉隆々のおっきな身体を思い切り折り曲げて助け起こす。

「あ、あれぇ……!?」

　そのとき初めて、ルルーは世界がタイヘンなコトになっているのに気がついた。鼻はまだちょっちイタイけど、そんなコトを気にしてるバアイじゃあない。

「な、なにコレぇ……!?」

　お部屋のなにもかもが、昨日寝る前に見たときよりも、ずっとずっと大きくなってる……!!

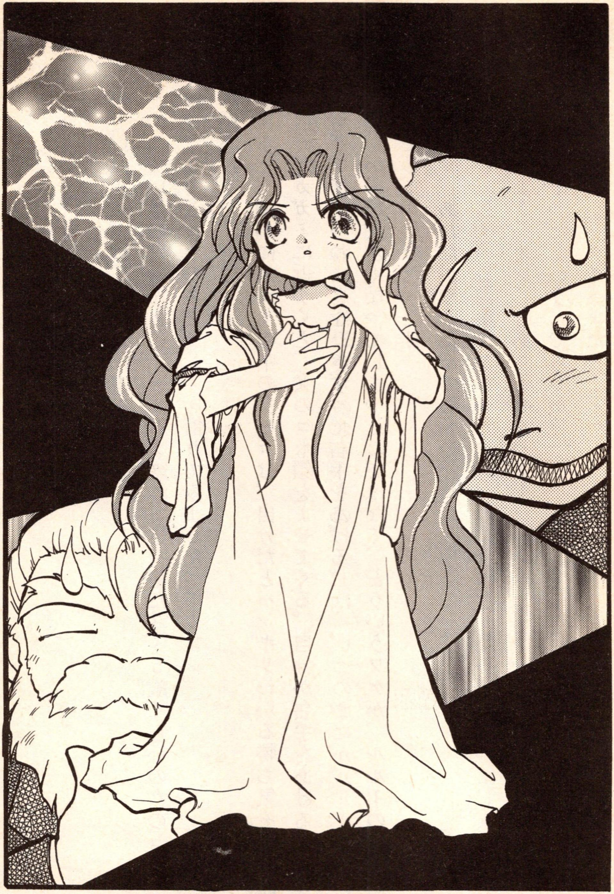
　机も、タンスも、朝のお陽サマをのぞかせる窓も、部屋そのものまでも……！　壁にかけたサタンの肖像画やベッドのサイドテーブルにおいたサタン様ぬいぐるみは、いつもより遠く、上のほうにあるし、昨日届いたばっかりのおニューのベッドは、いつのまにかルルーの眼の高さとおんなじくらい。ミノタウロスまで、ルルーの頭がようやくひざの上にくるくらいに大きくなってるし……！

　なんだか、部屋全体が生き物になって、ルルーを食べようと大きく口を開けてるような、そんなカンジ。

「み、ミノタウロしゅ、こ、これはいったい……!?」

「ぶも」

　思い切り見上げてルルーがいうと、ミノタウロスは大きな姿見を取り出してルルーの前に置



いた。

「ええ――――――っ!?」

姿見をのぞいたルルーは、またまた大ショック!

そこにうつっているのはなんと! ダブダブのねまきを着た3~5歳くらいの女のコ! ちょっち背伸びをして、ママのネグリジェを借りてみましたってカンジ。

「こ、これがあたくち……!?」

よくよく見ると、確かにカガミの中の女のコは、自分だとハッキリわかる勝ち気そうな面影があるし、自分がカガミに近づくと、女のコも顔をよせてくる。自分が右手をあげると、カガミの女の子もダブダブのねまきをひきずって右手をあげる。

世界のなにもかもが大きくなってしまったのではなく、どういうワケか、ルルーのほうがちっちゃくなってしまったのだった!!

「ミノタウロしゅ、あなたがやったんでちゅの!?」

よくよく聞くと、しゃべる言葉までちっちゃいコのように舌ったらずになってしまっている。

「ち、ちがいまスよ! オレじゃありませんっス!」

「じゃあ、ダレがやったというんでちゅか!?」

「さ、さあ……。だからタイヘンだと……」

「タイヘンなのはもうわかってるから、このタイヘンをなんとかちないと……！　夜にはサタンしゃまがいらっちゃるのよ！」

実は今晩、ルルーはサタンを夕食にまねいているのだった。正確には、サタンのほうからやってくるのだけれど。

ルルーのもとに、あこがれのサタンから手紙が届いたのは、ちょうど3日前。それにはこう書いてあった。

〝ルシファーの作るカレーはもうあきた。たまにはルルーの料理が食べたいな。

というワケで、3日後の夜にそちらにお邪魔させてもらうので、なにか用意して待っていてくれたまえ。

——サタン〟

ルシファーとは、以前ルルーが魔導学校にいた頃に教えてもらっていた先生で、なんと、サタンの双子の弟！　サタンはいま、大魔導師ルシファー先生の家に住んでいる。というコトは、あのアルル・ナジャもいっしょにいる。なぜならアルルは、魔導学校を卒業したいまも、魔法を勉強するためにルシファー先生のところに弟子入りしているから。

アルルがサタンとひとつ屋根の下で暮らしていることを考えると、くやしくてうらやましくて、いてもたってもいられない——といいつつ、サタンの顔見たさになんどもルシファー先生の家に遊びに行ってるケド。

でもまぁ、それはともかくとして、サタンが遊びに来てくれるのは、ルルーにとって大ラッ

キーなコト。手紙を読んだ瞬間から、ルルーは燃えた。そばに控えていたミノタウロスとじいが、ヤケドしてしまいそうなほどに。

サタン様を振り向かせる、またとない大チャ————ンス！　だわ。

そりゃあ、あたくしもまだカレーくらいしか自分で料理ができないけれど、あたくしには、誰にも負けない〝愛〟という最高の調味料があるわ！　それに手紙が届いた日から、おいしいカレーの作り方を一生懸命ベンキョーしてきたし……。

そんなあたくしの愛がたっぷりつまったカレーを、サタン様がひとくち食べた瞬間……！

『おおっ！　なんて美味いカレーなんだ！　ルシファーのなんかメじゃないぞ！』

といってサタン様はあたくしをそっと抱き、

『ルルー、オレはいまこそ気がついた。本当は誰を愛すべきなのかを……！』

そして……。

そしてっ……！

キャ————ッ★

……と想像しただけで赤面するような夢を、ルルーはなんど見てきたことか。

だけど現実は……。

「………」

ルルーは、姿見にうつった自分を見つめた。そこには自分によく似たちっちゃな女のコがいて、タイヘンなコトが起こっていて、サタンを招待するどころの騒ぎじゃないと無言でいっている。なんでかわからないけれど、自分でもホコリに思っていたナイスバディは、いまやあのアルルよりもチンチクリンになってしまっていて、言葉も幼稚園児みたいに舌ったらず。これじゃあ、サタンに合わせる顔がない。

「ううっ……」

じわわっ。

そんな考えを巡らしているうちに、ルルーの眼にはいっぱいの涙がたまってきた。

どうして……。

どうして、いつもこうなるの……？　チャンスが巡ってきたと思ったら、失敗したり、チャンスがつぶれちゃったり……。

サタン様に食べてもらおうと思って初めて作ったカレーライスは、とってもマズくて食べられたものじゃなかったし……。そりゃぁ、あたくしが勉強不足だったってのは認めるケド……。

なぞぷよを極めればサタン様に振り向いてもらえると思いこんでたときは、もっとヒドかったわ……。なぞぷよの修業しようと思って山にこもったら、いつのまにか格闘技の修業になってたし、魔女の塔をクリアすれば〝なぞぷよマスター〟になれるっていうハナシは、ウィッチの真っ赤なウソだったし……。まあそのときは、新必殺技〝対空女王乱舞〟でウィッチをボコ

にしたから気が晴れたケド……。

魔導学校にいた頃なんか、アルルよりも強い魔力を身につけようと召喚魔法の練習をしてたら、おっきな〝すけとうだら〟を呼び出して大騒ぎにしちゃうし……。

サタン様に振り向いてもらおうと努力すればするほど、いっつもカラまわりばかり……。

だから……、だから今度こそはと思ってはりきってたのに……。

「…………」

ちらっ、とルルーはまた姿見をみた。涙でくもってよくわからないけど、カガミの向こうのちっちゃなルルーも、同じように涙をいっぱいにためているのがわかる。

こんな幼稚園児みたいな格好じゃ、サタン様の前に出られないわ……！　もし前に出られたとしても、サタン様はあたくしだってわかってくれるかどうか……。

ねえ神様……。あなたはどうして、あたくしがチャンスだと思ったときに限ってジャマをするの……？

そりゃああたくしだって、夕食に招待したからといって、スグにサタン様が振り向いてくださるとは思わないわ。だけど、夢を現実にするキッカケくらいくださったっていいじゃない！

それともあたくしには、サタン様に愛される資格はないというの……？

けっして振り向いてはくださらないサタン様の背中を、ずっとずっと追いかけなきゃいけないの……？　まるでメビウスの輪の中にいるみたいに……。

あたくしには、サタン様と結ばれる夢を見ることしかできないの……？
お願い神様、答えて……！
と心の中で必死に叫んでみても、神様は答えるはずもない。逆に、このキビシイ現実が、ダウンなルルーの気持ちを、ますます落ちこませるだけ。
チャンスを活かしきれない、みすみすチャンスをつぶしてしまうというのは、もちろん自分がいたらないからでもある。それは、ルルーもよくわかっている。だけど、せめて神様のせいにでもしなきゃ、とてもやりきれやしない。
そんな、ふがいなさを神様のせいにしてしまう自分が、努力するほどカラまわりしてしまう自分が情けなくて、くやしくて、それでもサタンをあきらめるコトなんかできなくて、むしろサタンへの想いは大きくなるばかりで、せつなくて、胸が痛くて……。
「あ、あの……、ルルー様……？」
首をガックリと落としてふるえているルルーの肩に、ミノタウロスがなぐさめるために手をかけようとした瞬間……！
「うわぁ――――――――んっ!?」
ルルーはいきなり、大声をあげて泣き出した。
「うわぁ――――んあんあん……!!」

その泣き声の大きさは、まさしく幼稚園児そのもので、眼からこぼれる——というか吹き出す大粒の涙は、まるで滝か噴水のよう。
「あわわわわ……！　る、ルルー様……！」
「わぁ————————んっ!!」
慌ててミノタウロスがなぐさめようとするケド、ルルーの大泣きはいっこうに止まらない。
むしろ、泣き声がどんどん大きくなる。
「あわわわわわわわわ……！」
オロオロオロ……。
あたふたあたふた……。
ミノタウロスはどうしていいかわからず、ただただオロオロするばかり。
ルルーを慕い、ずっとつき従っているミノタウロスは、サタンへの想いに涙するルルーの姿を何度も見ている。人に隠れてそっと涙を流すルルーに対して、ミノタウロスは、ただその後ろ姿を見守るコトしかできない。だけどミノタウロスは、それでいいと思っている。自分のようなブコツ者がカッコよくキメてなぐさめようとしても始まらない——いや、主人を笑わせるにはいいかもしれない。ミノタウロス自身は大マジだケド——し、弱いところを従者に見せまいとルルーのほうが努力しているのだから、こっちも知らないフリをするしかない。また元気になったときに、力になってあげればいいのだ。

と、これはいつものハナシ。だけど、今回は状況がゼンゼン違う。

「あ――――んあんあんあん……！」

イキナリ身体が小さくなってしまったルルーが、まるで心まで子供に戻ってしまったかのように大泣きしてるもんだからさあタイヘン。どうやってなぐさめたらいいかわからないし、かといって、いつものように隠れて見守るワケにもいかない。バアイによっては、なぐさめようとミノタウロスのウシ頭を見せでもしたら、小さなルルーがおびえて、もっと激しく泣いてしまうかもしれない。

さしものミノタウロスも、中身がルルーとはいえ小さな女のコの扱いにはなれてなく、

「あわわわわわ……！」

とあたふたするしかなかった。

「あ――――んあんあんあん……！」

「あわわわわわ……！」

オロオロオロオロ……。

「あ――――んあんあんあん……！」

「あうあうあう……！」

あたふたあたふた……。

こんな状態が陽が暮れるまで続くと思いきや……！

「お嬢サマ」

ニュッ。

とルルーの前に現れたのは、全身ヒゲもじゃのオバケ！

「きゃあっ！」

ヒゲもじゃオバケの、あまりにトッゼンの出現に、ルルーは泣くのも忘れて思わず跳び上がった。その拍子(ひょうし)にしりもちをつきそうになるけれど、そこはミノタウロスがうまくキャッチ。

「じいの存じ上げているお嬢サマは、けっして泣かない強いコのはずですぞ」

ヒゲもじゃオバケはそういいながら、ルルーに真っ白なハンカチを差し出した。

「じい……」

よくよく見ると、それはヒゲのオバケなんかじゃなくて、執事(しつじ)の〝じい〟。ルルーがホントにちっちゃい頃(ころ)から、身の回りの世話をしてくれているヒトだ。

「ささ、ハンカチで涙(なみだ)をおふきなされ。愛らしいお顔がダイナシですぞ」

「う、うん……」

涙でぐしょぐしょになった顔でルルーがハンカチを受け取ると、じいはニッコリと微笑(ほほえ)んでうなずいた。……正確には、微笑んだように真っ白でふさふさのヒゲとマユが動いた。

じいは、そう呼ばれるだけあって、もうかなりトシを取っている。そのおかげでちょっちク

セのある髪も、もじゃもじゃのヒゲも、マユ毛も綿かなにかみたいに真っ白。そんな顔がいきなりドアップで現れたものだから、ルルーはヒゲもじゃオバケだと思ってしまったというワケ。
「お嬢サマ、泣いてばかりではストーリーが——そう、お嬢サマの人生という壮大な物語はいっこうに進みませんぞ」
「で、でも……」
じいのいうコトがもっともなのはルルーもわかっているけれど、せっかくサタンが遊びに来てくれるという日にイキナリ身体がちっちゃくなるという事件が起きたとなれば、そりゃあ悲しくて涙も出るというもの。
「ご安心くだされ」
そんなルルーの心を読み取ったかのように、じいはいった。
「このじい、お嬢サマのお身体が小さくなった原因を、すでにつきとめてありますぞ」
「ほ、ホント!?」
「ホントですとも」
うんうん、と、じいは首を上下にゆっくりと動かしてうなずく。じいのいつものクセだ。
じいは、昔はスゴ腕のニンジャだったとか世紀の金庫破りだとかいわれていて、トシのワリに行動はものすごくすばやい。ルルーがなんか欲しいなと思ったときにはいつも、じいがすでにルルーの欲しいものを用意してくれている。

そんなじいと、力仕事も細かい仕事もなんでもできるミノタウロスがそばにいてくれているおかげで、仕事でいそがしいパパやママがいなくても、ルルーはゲンキにやっていけているのだった。もちろんルルーはそのふたりにとっても感謝していて、誕生日やバレンタインデーのプレゼントはゼッタイに忘れない。サタンへのプレゼントよりはだいぶみおとりするケド……。

「じいが独自に調査し、推理したところによりますと、お嬢サマのお身体が小さくなってしまったその原因は……」

ごしごし。ぐっすん。

ハンカチで涙をふいたり、ハナをすすったりしながら、ルルーはじいのハナシに耳をかたむけた。

「どうやら、その〝魔法のベッド〟にあるようですぞ」

じいは、さっきまでルルーが寝ていた豪華そうなベッドを指差していう。

「まほーのベッド……？」

「そうですぞ。この事件が昨夜トッゼンに起きたものだと仮定すれば、その前日、つまり昨日にその要因があったに違いありませんぞ。そして、昨日にあったいつもと変わったコトは、このベッドが届いたことだけですぞ」

「そういえば……」

さっきまであんなに大泣きしていたルルーは、もうすっかりゲンキを取り戻して、いつもの

強気なルルーになっている。身体はちっちゃいままだケド。
だいぶ落ち着いた頭の中で、ルルーは昨日のコトを思いかえした。
じいのいうとおり、このベッドは昨日〝ももも通販〟から届いたものだったわ。でもあたくしはそんなの注文してないし、じいやミノタウロスも知らないっていってた。差出人不明だし、ふたりが内緒であたくしにプレゼントしようとしてるのかな？　って思ったケド、誕生日とかにはまだ早いし……。
どこかで美しくてナイスバディのあたくしをみそめた誰かが送ってきたのかと思って、そのまま使っちゃったのよね。豪華でフカフカだったし、ちょうどあたくしのベッドもちょっと古くなってきた頃だったし……。
でもまさか、このベッドに原因があったなんて……！　確かにそう考えればツジツマがあうけれど……。
「で、じい、あたくちの身体は、どうすればもとに戻るんでちゅか？」
「さあ……、そこまではさすがのじいも調べがついておりませぬぞ」
「誰がこれをあたくちに送ったのかとかは？」
「申し訳ありませぬが、それもまだわかっておりませぬぞ」
む～う、と考えこむように、じいはいった。
「う～……」

ルルーの心の中に、今度は怒りがふつふつとわいてきた。

誰だか知らないケド、もしワザとこんな妙なベッドを送ってきたんだとすれば、マジで許せないわ……！

サタン様から「遊びに来る」という手紙が届いたのがちょうど3日前で、ベッドが届いたのが昨日。誰かがサタン様とあたくしの愛のお食事をジャマしようとしてるなら、時期的にツジツマがあうわね……。ってコトは、それをねたんだ者の犯行という可能性が高いわ。

も、もしかしてアルルが……？ いや、まさか。アルルはチンチクリンのボゲボゲ娘だけど、こんな卑怯なやりかたをするコじゃないわ。ってコトはドラコケンタウロス……？ そういえばあのコ、今度〝サタン様ファンクラブ〟を作るとかいってたわね……。

まあどちらにしても、犯人をみつけたらタダじゃおかないわ！ 必殺技フルコースで、ソッコー病院送りね！

ルルーは、魔法のウデはからきしだけど、格闘家としては超一流だった。彼女の細い鉄腕から繰り出される〝破岩掌〟〝女王乱舞〟などの必殺技は、魔導師の攻撃呪文にけっしておとらない。魔導力に似た〝気〟の力で、ちょっとくらいのキズなら治すコトだってできる。でも、ちっちゃい頃から格闘技をやっていたせいか、ほんのちょっち体育会系な考えかたがシミついてるケド……。

それにしても……。

「…………」

ルルーは、部屋の中にでーんと横たわる大きなベッドを見つめた。まるでお姫様のベッドみたいに豪華に飾られていて、シルクみたいにサラサラでキラキラのシーツや、ふかふかの毛布、羽毛入りかなにかのふわふわのマクラがとってもキモチよさそう。実際、とってもキモチよかったし。

でもまさか、そこにワナがあったなんて……！　とルルーは思った。差出人不明のベッドを、なんの疑問もなく使うほうにもモンダイは大アリだけれど……。

こんなワナにまんまとひっかかったあたくし自身も許せないケド、こんなのを送った犯人はもっと許せない！　それよりもとりあえずは、このベッドも許せない！　ここでイッパツ〝オシオキ〟のひとつでもしとかないと、腹のムシがおさまらないわ！

「はあああああああっ……！」

トッゼン、ルルーは気合いをこめた。身体がちっちゃくなっても中身はそのままのようで、気力、体力ともに充実しきっている。

これならば、いつもと同じイリョクの技をくりだせるはず……！

「ルルー様、な、なにを……？」

とミノタウロス。いっぽうのじいは、なににナットクしてるのかわからないけれど、いつも

のようにうんうんとうなずいている。
そんなふたりをよそに、ルルーは気合いをこめ続けた。
「はあああああああああああああっ……!!」
やがて〝気〟の力はルルーのまわりの空気をもゆるがしはじめ、その空気の流れは風となってルルーのダブダブのねまきやサラサラした水晶色のロングヘアをはためかせる。
「はあああああああああああああああああああ……っ!!」
気合い充分！　準備完了っ!!
「大・破岩掌っ!!」
ゴオッ!!
ルルーの小さな掌底づきからくりだされた衝撃波が、イッキにベッドに襲いかかる！
ドッゴォン！
あわれなベッドは、もののみごとにフンサイされた。もちろん、壁のサタンの肖像画や、サイドテーブルのサタン様ぬいぐるみにはなんの影響もない。「格闘家たるもの、目的以外のモノにはいっさいの影響も与えず、目標だけをキッチリ倒さなければ」とは、以前にルルーに格闘技の稽古をつけてくれた〝格闘機械魔導師〟のコトバ。
「あー、スッキリちた」

とりあえず怒りを運動で発散させて、ルルーはようやく、いつもの朝のようなキモチよさを感じた。必殺技はいつもどおり使えるみたいだし、とりあえずはひと安心。まだまだモンダイは山づみだけど、もう泣いたりなんかしないで、はりきってモンダイ解決に取り組めそう。

「ミノタウロしゅ、ベッドを片づけて。それからじいは朝食の用意と、新ちいベッドの手配をちて」

「ぶもー」

「わかりましたぞ」

ミノタウロスがベッドの破片を片づけて、ふたりが部屋を出たところで、ルルーはようやく着替えタイム。

「サイじゅのちっちゃいドレスって、まだあったかちら……?」

とタンスやクローゼットの奥をあさってみたら、あったあった。さすがに5歳くらいの頃のドレスじゃないけれど、あんまり着ないうちにだいぶ小さくなったヤツが。いつものドレスと同じ水晶色だけど、露出度はゼンゼンない。まあ、幼稚園児みたいな身体を、いつもの露出度の高いドレスでつつんでもしょうがないので、それはそれでよし。

とりあえず着てみたら、やっぱりダブダブだけれど、ねまきよりはだいぶマシってカンジ。なんとかスソを踏んづけたりしないで歩けそう。

「それにしても……」

と、着替えながらルルーは考えた。

ベッドを送ったのは誰なのかしら……？　ももも通販に問い合わせればわかるかな？　それで犯人をつきとめて、どうしてこんなことをしたのか白状させて、バアイによってはオシオキして、それからもとに戻る方法を探して、もとに戻ったら夕食の準備か……。だとすると、なんとかお昼頃までにはもとに戻れないとキケンだわね。いそがしくなりそうだけど、がんばんなきゃ！　せっかくのチャンスを、今度はゼッタイにムダにしないわ……！

なんてコトを考えてるまに着替えも終わり、そろそろ朝食の時間。屋敷の2階の自室から階段を降りて食堂にいくと、もうすっかり朝食の準備はできていた。真っ白なテーブルクロスをかけた長いテーブルには、サラダやグレープフルーツジュースを基本にした、いつもと同じサッパリ系の料理が並べられている。もちろん、いつものイスじゃいまのルルーはテーブルに届かないので、ちっちゃい頃につかっていた子供用のイスをじいが用意してある。

「じいは考えたのですが……」

ルルーとミノタウロスとじいの3人で朝食をとっている最中、ふと、じいはいった。

「あのベッドの差出人は、ももも通販に問い合わせればわかるかもしれませんぞ」

「うん、あたくしもそう思ってたトコ」

「しかし、先方も仕事ゆえ、そう簡単には教えてくれぬでしょうが」

「たちか最近、テイカテイカ村にも配送所ができたのよね」

「そうですぞ」

「ゴハンを食べたら、とりあえずミノタウロしゅと行ってみるちゅもり」

「ぶも？」

トッゼン、ミノタウロスがすっとんきょうな声をあげた。まるで、ルルーとふたりで出かけるコトを予期していなかったのように。

もちろん、いつもならこんなコトはない。主人のルルーが出かけるといえば、ミノタウロスもいっしょなのはあたりまえ。たまーにお留守番のコトもあるけれど、ミノタウロスにすれば、むしろそっちのほうがイヤなカンジだ。

「どうちたの？」

「い、いいえ、別に……」

だけど、今日のミノタウロスはどこかがヘン。朝食が始まってからこっち、なんだかミョーにソワソワしている。

「あ、あの……」

デッカイ身体に似合わない、おずおずとした声でミノタウロスはいった。

「お、オレ、今日は留守番してまス。じい殿もいろんなコトを調べに出かけるでしょうし」

「うむ、お嬢サマのお身体をもとに戻す方法を調べねばならんと思っていましたぞ」

「どうちたの？　ミノタウロしゅ。なんかヘンよ？　熱でもあるの？」

「な、なんでもないっス……！」
「まちゃか、あなたが犯人だっていうんじゃぁ……!?」
じろっ。
とルルーがにらむと、ミノタウロスは大きなウシ頭をブンブンと振った。
「ち、ちがうっス！　それだけはゼッタイにないっス！」
「ホント————に……!?」
「ほ、ホントっス！　命かけてもいいっス！」
「ならいいわ。ミノタウロしゅがいっしょじゃないほうが、あたくちがこんなになっちゃったコトがバレにくいだろうし」
ルルーがそういうと、ミノタウロスはホッとしたようにタメ息をついて、山盛りのサラダをまた食べはじめた。
ほんのちょっち気マズイ雰囲気の中、やがて朝食は終了。
エネルギーの補充も終わって、次はいよいよ事件の解決、そしてサタンとの夕食に向かって突き進む時間！
ルルーは、玄関の大きな扉を開けて、外に出た。すると、サワヤカな秋風がすぅっとルルーのほほをなでていく。

そろそろ、枯れ葉ちる季節。そして、サタンが恋しくて、せつなくなってくる季節……。なんとかサタンを夕食に招いて、晩夏の夜を華やかにしとかないと、今年の秋はいつもよりせつなくなって、毎日泣くことになるかも……。

さああぁ……っ。

また、風がルルーのほほと水晶色の髪を優しくなでていった。まるで、「ガンバレよ、神様はまだ見捨てちゃいないから」といっているみたいに。

そうよね……。ちょっとの失敗がなんだというの？　愛は障害があればあるほど燃えるものだし、あたくしにはどんな障害にも耐えて、乗り越えてみせることができる力があるはずよ！

「よしっ！」

気合いをいれて、ルルーはちっちゃな足で大地を踏みしめた。その頭上を、気の早い渡り鳥たちが南に飛んでいく。

ちょっとした高台にあるルルーの屋敷は、かなり大きい。小さな国のお城くらいはある。そこに住んでいるのは、基本的にはルルーとミノタウロスとじいの3人だけ。パパとママはお仕事がいそがしくてめったに帰ってこないし、あとはお掃除屋のキキーモラがたまにやってくるぐらい。

そんな屋敷の玄関から延びる小道は、すぐそばの村に続いている。それがテイカテイカ村、正確には辺境伯テイカテイカ卿の村。

もうずいぶん昔にテイカテイカ卿が村を興して、ゾンビになったテイカテイカ卿がいまでも村を治めている。ルルーの屋敷から見えるその村はワリと人が多くてニギヤカ。村というよりは町に近い。

ほかには〝魔女イル・シュ・アの塔〟や〝リヴァイアサンの沼〟〝腹いっぱい山〟なんてのがあって、ルルーの屋敷やテイカテイカ村といっしょに小さな島に収まっている。この島の北には魔導学校やルシファー先生の家なんかがある大陸があって、丘にのぼれば港が見えるほどに島と大陸の距離は近い。

今晩、あの大陸からサタン様がやってくるのね。あたくしのために……。

なんてコトを考えながら林に囲まれた小道を歩いていると、ほどなくしてテイカテイカ村に到着。

まだまだこれから発展するところってカンジだけれど、〝ぷよまん本舗〟や時の女神様を奉る〝聖サイ・ザーンス教会〟なんかもあるし、村はとっても活気にあふれている。最近ではももも通販の配送所もできたし、今度は、全日本ぷよぷよ協会――ＡＪＰＡの支部ができるとかできないとか……。

ルルーは村の近くに住んでるし、なにかと目立つので、テイカテイカ村だけでなく島全体に知り合いがいっぱいいる。現に、村の入り口ではキキーモラがお掃除してるし、広場ではテイカテイカ卿の息子のミニゾンビが、ドロだか腐った自分の身体だかをまきちらしながら遊んで

いる。

だけど、誰もちっちゃなルルーに気がついたようすはない。身体が小さいコトと、ミノタウロスがいっしょでないコトが幸いしているようだ。

別に悪いことをしているワケではないのだから、どうどうと歩いていてもいいんだけれど、どうしてもちょっちコソコソぎみになってしまう。いつもは元気で強気でプライドの高いお嬢サマとしては、いつもと違う姿を見られるのはやはり気恥ずかしいというもの。

でもまあ、誰もルルーだとわかっていないようなので、もうちょっとはどうどうとして自分の目的を果たすコトに決定。

「ドコだったかちらねえ、ももも通販……」

ルルーはももも通販の配送所を探して、あたりをキョロキョロする。が……！

「あっ……!!」

と叫びたくなるのをなんとかこらえて、ルルーは思わず近くの植えこみに隠れた。その植えこみからのぞくルルーの視線の先にいるのは、たくさんの箱をかかえてぷよまん本舗テイカテイカ村支店から出てくる、亜麻色の髪をちょこんと結んだ女のコ。

その髪の色、ゲンキいっぱいに輝いている大きな眼、ブルーのシャツの上にゆったりしたタンクトップをかぶり、さらに軽装型の装甲魔導スーツに身を包んだその姿を、ルルーは忘れる

ハズもない。

魔導学校の同窓生で、まるで妹のようで、そしてゼッタイの恋敵――アルル・ナジャ！

ど、どうしてアルルがこの島に……!?

ルルーは驚きの中でいぶかしんだ。本来ならばいま頃は、大陸のほうで、ルシファーのもとで魔法の勉強をしているハズ。そんなアルルが、どうしてこんな辺境の島にあるぷよまん本舗から、箱をかかえて出てくるのか、まったくわからない。箱の大きさからすると、アレはおそらくぷよまんとカーバンクル饅頭の〝なかよしセット〟。……いや、それはともかく。

ま、まさか……、ホントにアルルが事件の犯人……!?

と思ってみるけど、アルルがそんなコトをするコじゃないのは、いままでのつきあいで充分にわかっている。おそらくは、ルシファーの指示でこの島に修業に来ているんだろう。そういえばルルーが〝なぞぷよ〟の修業をしてた頃もそうだった。この島は冬でもそんなに寒くならず、修業にはもってこいの場所だから……。

「………」

心ではそうわかっていても、やっぱりアルルに見つからないようにルルーは息をひそめてしまう。見つかってもルルーだとバレないかもしれないし、バレたからといって笑ったりイジワルするようなコじゃないってコトはわかってる。だけど、ワリとおせっかいやきだから、タイヘンなコトになっているルルーを助けようとして、よけいに事態を大きくしてしまうかもしれ

ない。ルシファーを呼んだりとか、サタンを呼んだりとか……。
「………」
じ―――――――――――――――っ。
ルルーは息を殺しながらアルルをみつめ、彼女がいなくなるのを待った。だけどアルルはあたりをキョロキョロするばかりで、いっこうに村から去る気配はない。
ンもう、ナニやってんのよ！ じれったいわねぇ。あいかわらずボゲボゲなんだから。
植えこみから出てそうツッコミたくなるのを、ルルーは必死でおさえた。思いっきり隠れておいて、いまさら顔を出すワケにはいかない。
「………」
そういえば、カーバンクルがいないわね。
ふと、ルルーは気づいた。いつもアルルにくっついている黄色い〝ふしぎなどうぶつ〟カーバンクルがいない。どうやらアルルは、カーバンクルを探(さが)しているらしい。
「む〜……！」
ナニがくやしいって、ルルーにとって、アルルがカーバンクルといっしょというのがくやしくてたまらない。冗談(じょうだん)じゃないわ！ まったく……！
カーバンクルは、もともとサタンのペットで、サタンが婚約(こんやく)の証(あか)しとして相手に送ろうと決めていたもの。それがどうしてアルルといっしょなのか、それは永遠のナゾ。

どうしてあたくしにじゃなくて、あんなボゲボゲ娘のアルルに……!?

ルルーは、何度そう思ったことか。初めてそのことを知ったときには、怒りのあまりにミノタウロスをけしかけてアルルを倒そうとしたこともあった。それがどういうワケか、ルルーとアルルのふたりは、いまは仲がいいんだか悪いんだかの関係になっている。

そりゃあ、アルルはいいコだってわかってはいるんだけどさ……。

憎い恋敵を、完全に憎みきれないところが、ルルーの優しさだったりする。

「はっ……！　いまはそんな感傷にふけってるバアイじゃないわ！」

ルルーは我にかえり、じっとアルルがいなくなるのを待った。とにかくいまは、アルルがさっさとこの場から消えてくれるのを待つのみ！

「…………」

じ――――――っ。

とルルーが植えこみの中で息をひそめてアルルを観察していると……、

とんとん。

誰かがルルーの背中を叩いた。

「ナニよ!?　いまいそがちいんだからアトにちて！」

じっとアルルを見つめたまま、ルルーはヒソヒソ声でいうけれど……、

とんとん。

後ろの誰かは背中叩きをやめない。
とんとん。
「ンもう、アトにちてっていってるでちょ！　あたくちは、いまいそがちいの！」
とんとん。
「ぐー」
と、どこかで聞いたような声。
「ぐー……？　ま、まちゃか……！」
ルルーは、おそるおそる後ろを見た。そこにいるのは、ねんど細工（ざいく）みたいな黄色い身体（からだ）に、ウサギさんみたいな耳、まめツブみたいな眼（め）に身体の半分ほどもあるおっきな口、そして額に輝（かがや）く真っ赤（まっか）な宝石。
「ぐー！」
おいっす！　ってカンジで右手をあげてルルーにあいさつしたのは……！
「か、カーバンクル!?」
ガササッ！
ルルーは驚（おどろ）きのあまり、思わず植えこみから飛び出した。
「あ、カーくん」

アルルはその物音を聞きつけ、まっすぐルルーたちのほうにやってくる。ちっちゃいルルー、絶体絶命の大ピ――――ンチ！

ま、まずいわ……！　なんとか気づかれないウチに逃げちゃわないと……！

「もー、カーくん、ひとりでふらふらしてちゃダメだっていつもいってるでしょ？」

「ぐー」

「まったくもう」

なんてふたりがやってるあいだに、ルルーはアルルたちに背を向け、そろりそろりと歩きはじめた。そのまま逃げ切れるかとおもいきや……！

「あれ？　ねえねえ、キミキミ」

とアルル。

「……!!」

見つかっちゃった……!!

ルルーはまるで、イタズラがバレた子供のように縮こまった。

こ、こうなったら、あたくしはルルーじゃないってセンで押すしかないわ……！

「な、なんでちゅかぁ？」

せいいっぱいの――ひきつった――笑みをうかべて、ルルーは振り返った。

「む〜ぅ……」

そんなルルーを、アルルは眉間にシワをよせて観察。
「キミって、もしかしてルルーの妹さん？」
「る、ルルー？　だ、誰でちゅかそれは……？」
いつバレやしないかと、ルルーの心臓はドッキンドッキンいっている。声も思いっきり上ずっていて、出てくるコトバも妙に早口。
「キミ知らないの？　この辺に住んでるお嬢サマなんだケド」
「う、うん……。あたくちは今日ここに越ちてきたばかりだから……」
「だけどよく似てるなぁ……。一瞬、本物のルルーかと思っちゃった」
ボケボケに見えて、アルルは結構カンが鋭い。その鋭さが、いまのルルーにとってはかなりキケンな状態。
「ほ、ホントにあたくちはルルーなんてヒト知らないでちゅよ……！」
「ふ〜ん……」
ルルーの必死のゴマカシにもかかわらず、アルルはまだムツカシイ顔をしている。
「そういえばキミ、カーくんのコトを知ってるみたいだケド？」
「ぱ、パパのご本で見たコトがありまちて……」
「キミのパパって、魔導師かなにかなの？」
「ま、まあ、そんなようなものでちゅ……」

「へぇ～、そうなんだ」

「………」

もういいじゃないのよ！　さっさと行きなさいよ！

ルルーの心の叫びが通じたのか、アルルのムッカシイ顔がだんだん薄れてきた。

「じゃあさ、いまから3人で遊ぼうか」

「……!!」

アルルのコトバにルルーは愕然とした。

じょ、冗談じゃないわ！　あなたと遊んでるヒマなんかないのよ！　タダでさえいつバレるかヒヤヒヤものなのに、いっしょに遊んでたらすぐにボロが出ちゃうわ！

「キミのパパのことが聞きたいな。ボク、いま魔導師の修業をしてて、いろんな魔導師のハナシを聞きたいんだ。ちょうどぷよまんをたくさん買ったところだから、3人で食べようよ」

とアルルは話し続けているけれど、「いっしょに遊ぼう」というコトバがまだ頭の中でぐるんぐるんしてるルルーには聞こえていない。

「ど、どうしたの？」

そのコトバで、ようやくルルーは我にかえった。

「え……？　あ、あの……、あたくち、いまおつかいの途中でちゅから……」

「そっかぁ、それじゃあダメだね。じゃあさ、また今度遊ぼうね」

「う、うん……」
「行こ、カーくん。早く帰ってぷよまん食べよ」
いいながらアルルは、ようやくルルーに背を向けた。
「ぐー！」
食べ物につられたカーバンクルが、ぴょーんと肩に乗ったところで、アルルはそのまま歩き出す。
「はぁ～～～～～～～～～～……」
アルルの後ろ姿を見送りながら、ルルーはどぉぉっとタメ息をついた。なんだか、この世の疲れが一気に襲ってきたってカンジ。
つ、疲れた……。でもまあ、どうやらバレてないみたいだわ。もう一度アルルに会う前に、なんとかもとに戻っておかないと……！
「あ、そうそう」
ふと、アルルは立ち止まった。
「ねえルルー……？」
「なあに……？」
はっっっっっ……!!

ピシィッ!!

ルルーとアルルのあいだの空間に、まるでイナヅマのようなヒビが思いっきりはいった。そしてふたりは、顔を見合わせて硬直！

アルルのほうとしては、眼の前のちっちゃなコがあまりにルルーに似てるもんだから、思わず本物のルルーだとカン違いして声をかけてしまっただけ。バレてるとかそういうモンダイではなく、ただ単に――それが大きなモンダイではあるけれど――アルル持ち前の大ボケが出てしまっただけだった。

それに対して、なんとかバレなかったと安心して気の緩んでいたルルーは、あろうことか思わずそれに答えてしまった……!!

つまり、自分が小さくなってしまったコトを隠そう隠そうとしていたルルーの努力は、波打ち際に造った砂のお城のように、アッサリと流れてしまった。

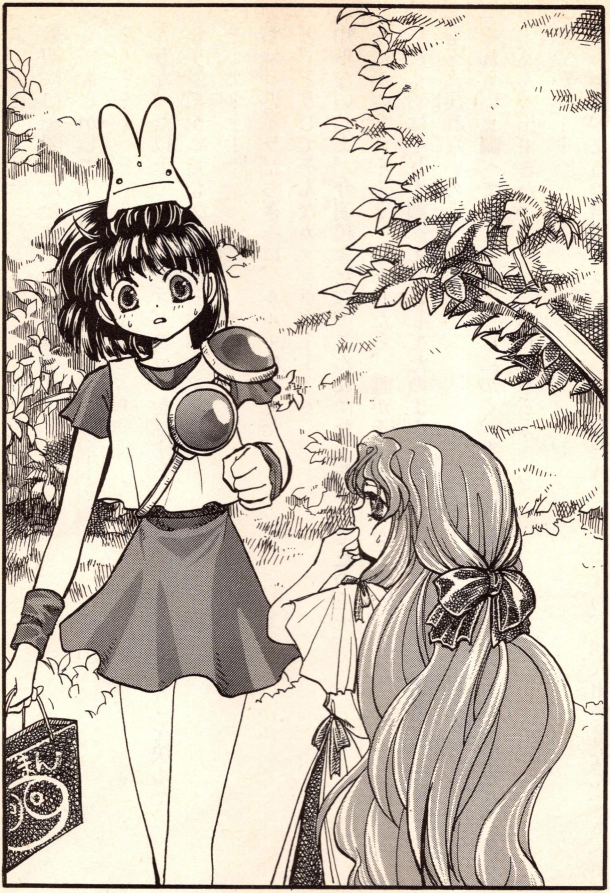
「…………」

「…………」

気マズイ沈黙の中、ルルーとアルルのふたりは、じっとお互いの眼を見つめたまま動かない。テイカテイカ村の喧騒も、いまのふたりの耳には届かない。

ひゅるるるるるるる……。

と、秋の到来を告げる風が、むなしく通り過ぎるだけ。


まん

「あ、あの〜……」
最初に口を開いたのは、アルルのほう。
「も、もしかして……、ホントにルルーなの……？」
「…………」
こうなった以上、もはやホントのコトを話すしかない。ルルーはカクゴを決めた。
もう、どうにでもなれだわ……！
「そーよ……！」
ちょっとイラだちぎみに、ルルーは答えた。
「ど、どうしてそんなカッコウに……？」
「知らないわよ、今朝（けさ）起きたら、こんなになっちゃってたの！」
「なにかの呪（のろ）い……？　だとしたら、誰（だれ）がそんなコトを……」
「あたくちはそれを調べようとしてたのよ！　そしたら、あなたに会っちゃって……」
「もとに戻（もど）れないの？」
「それもいま調べてるとこよ！　とにかく、手がかりを探（さが）そうとちてお外（そと）に出たら、あなたとカーくんが出てきたってワケ。おわかり？」
「そっかぁ……」
アルルは、まるで自分のコトのようにうなだれた。アルルの、他人事（ひとごと）でもなんでも、ホンキ

で親身になって考えてしまうところが、ルルーにとってはうらやましくもあり、小憎らしくもあり……。

「あたくちには時間がないのよ！　もう用がないなら、あたくちは行くわよ！」

「そうだ！　ねえルルー、ルシファー先生のところに行こうよ。きっと、なにかわかるかもしれないよ」

「え……？　ルシファー先生もいらちてるの？」

「うん。魔女の塔って知ってるよね？」

島の北側にある、古の魔女〝イル・シュ・ア〟が建てた塔だ。

「そこの近くにルシファー先生の別荘があって、いまボクたちはそこに住んでるんだよ。そうそう、さっきはそれをいおうと思ってたんだっけ……」

「ど、どうちてこの島に先生の別荘が……？」

「今年の冬は寒くなりそうだから、あったかいこの島で魔法の修業しようって先生がいったの。もうずっとずっと前から、大陸が寒くなるとここの別荘を使ってるって先生いってたよ」

「そうだったの？　ゼンゼン知らなかったわ……」

ルルーは以前、〝なぞぷよマスター〟になる方法を探して、島中を歩き回ったコトがある。だけど、魔女の塔の近くにルシファーの別荘があったなんてゼンゼン知らなかった。塔のまわりはワリと深い森になっているから、見つからなかったのもムリはない……。

「ルルー、急いでるんだったら早く行こうよ」
アルルは、まるで妹を家に連れ帰そうとするかのようにルルーの手を握（にぎ）った。いつもとは立場が逆転だ。
「先生だったら、きっといい方法を見つけてくれるよ」
「う、うん……」
サタンの双子（ふたご）の弟であるルシファーは、ルルーとアルルが知る限りでは最高の魔導師（まどうし）であり、医師であり、学者であり、占い師（うらなし）だった。確かに彼ならば、小さくなったルルーの身体（からだ）をもとに戻（もど）してくれるかもしれない。これは大ラッキー！
しかし、アルルとルシファーがこの島にやってきているというコトは……！
「どうしたの？　早く行こうよ」
「ちょ、ちょっと待って。もしかちて、サタン様も……？」
「うん、いるよ」
「やっぱり……」
「いつものルルーらしくないよ、どうしちゃったの？　いつもだったら、サタンがいるとわかれば自分でスッ飛んでったのに」
「う、うん……」
ルルーは、ちっちゃくなった哀（あわ）れな姿をサタンに見せたくないからこそ、一生懸命（いっしょうけんめい）にもとに

戻る方法を探しているのだ。その前にサタンに会ってしまっては、なんのイミもない。そして、このままルシファーの別荘に行くとなると、カクジツにサタンと対面することになる。
「ルルー、どうしたの？　具合でも悪いの？」
「ううん、違うの」
いいながら、ルルーはアルルの手を振りほどいた。
「これは、あたくちのモンダイ。せっかくだけど、あなたの手は借りないわ」
「な、なんでぇ？」
「あたくちは、あなたみたいなアマアマな人間じゃないの。なんでもかんでもルシファー先生に頼るなんて、あたくちのプライドが許さないわ。これくらいの事件を自分で解決できないようじゃあ、あなたもまだまだね。あたくちはサタン様に振り向いてもらうために、あえてひとりで修業ちてるのよ」
うんうん、我ながらウマイいい訳だわ。
と、ルルーは心の中で自画自賛。
「む～っ、ヒドイいい方だなぁ」
アルルは、まんまるのホッペをちょっとふくらませた。
「でも、ルルーがそういうんなら仕方ないね。うまく解決できるように祈ってるから、がんばって。助けが欲しいときはいつでもいってね」

「ありがとう。キモチだけもらっとくわ」
「じゃあねー」
アルルは肩の上で眠っているカーバンクルを起こさないようにそっと抱き、去っていった。
「やれやれ……」
どぉぉっ……。
アルルの姿が完全に見えなくなった頃に、ルルーはようやくホントにホントの安心のタメ息。
だけど、ここでノンビリしてはいられない。サタンもこの島にいる以上、どこで出くわすかわからない。そうなる前にもとに戻らなくては……！
「…………」
ルルーは、ゆっくりとテイカテイカ村を見渡した。すると、ほどなくして村でイチバン真新しい建物を発見。
「あれが、ももも通販の配送所ね」
聖サイ・ザーンス教会のとなりにあるその建物までいってみると、確かにももも通販の看板がかけてある。
このももも通販は、膨大なネットワークを誇る通販専門のショップで、品揃えもよく価格もリーズナブルだと大評判。品物を家まで運んでくれるので手間もはぶける。最近では配送のノウハウと各地の配送所のネットワークを利用して、宅配便なんかも受けつけてるらしい。

だからルルーも、ももも通販をよく利用していた。そんなショップの配送所がルルーのいる島にもできたことで、ますます利用する機会が増えるかもしれない。もちろん、店の人間がベッドの差出人をスナオに話してくれればのハナシだけど……。

ルルーは「商い中」の札が出ているのをチェックしてから、ついさっき切り取ってきたようなまっサラの木のドアを開けた。

カランコロン、カランコロン……！

ドアの内側につけられたベルが乾いた音を立てて、お客がやってきたコトを店員に告げる。

「こんにちわ～」

ルルーは中に入った。

店の中は、まるでお役所か図書館かなにかみたいにシンプル。店の奥に受けつけ用の長い机が置かれていて、そのさらに向こうには、倉庫かなにかにつながっているらしいドアがひとつ。入り口から見て左右の壁には本棚があって、通販のカタログがぎっしり収められている。

おおよそ商品だと思われるものは、ひとつもない。ここではカタログの中に商品があって、お客はカタログから欲しい品物をさがして注文するってワケ。もちろん、注文は手紙などでもオーケーだし、頼めばカタログはタダでくれる。まさにイタレリツクセリの、いいカンジのお店だ。

「いらっしゃいませー」

とお客――ルルーを迎えたのは、机に向かって座っている、リュックを背負ったダルマみたいなタマゴみたいなモンスター〝ももも〟。ペンギンをまるまると太らせたような身体に、頭のテッペンには申し訳ていどのツノ、口はカーバンクルなみに大きくて、眼はまるでマジックかなにかで書いたみたいに細い。そんな眼で見えるの？　それとも寝てるの？　ってカンジ。
この商人モンスターは、まさにももも通販のシンボルで、各地にいるももも、〝ふふふ〟や〝パララ〟といったほかの商人モンスターたちのチカラでももも通販は成り立っている。
「ご用件はなんなのー？」
聞いてるほうまで眠くなっちゃいそうな口調で、もももはいった。
「あたくち、村から離れた屋敷に住んでるルルーっていう者だけど……、あなた昨日、ウチにベッドを届けてくれまちたわね？」
「ちょっと待ってなのー」
もももは机の上のクリップボードを手に取り、それにはさまれた書類をバサバサとめくる。
「あったのー。確かに昨日、ルルー様宅にベッドひとつお届けとリストに書いてあるのー」
「そのベッドって、ここで売ってるヤツでちゅか？」
「ん～ん、宅配サービスなのー」
「やっぱち……」
ルルーは思った。

　やっぱり、誰(だれ)かがあたくしのコトをおとしいれようとしてるんだわ……！　なんとかして、差出人の名前をももから聞き出さないと……！　ちょっと手荒(てあら)くしてでもね。

「あのぉ～……」

　できるだけかわいくニコニコ笑って、ルルーはいう。

「ひとつお願いがあるんでちゅが……？」

「なんなのー？」

「ベッドの差出人のお名前を教えてくだちゃらない？」

「ダメなのー」

　と、もももはアッサリ。

「どうちて？」

「差出人の名前は秘密(ひみつ)にしろってリストに書いてあるのー。ウチはお客様の信用第一なのー。だから教えられないのー」

「こっちでちょっと事故(じこ)があったんでちゅが、それでもダメ？」

「事故の内容にもよるけどー、基本的にはダメなのー」

「どうちても？」

「どうしてもー」

「ゼッタイに？」

「ゼッタイにー」
「ホントに？」
「ホントにー」
「マジで？」
「しつこいのー」
「………」
よーしわかったわ。そっちがその気なら、ちょっと手荒くいかせてもらうわよ。
ルルーは心の中で、これから格闘（かくとう）を始めるときのように指をボキボキと鳴らした。
「これを見ても、やっぱちダメ？」
いうが早いか、ルルーは気合いをこめる。
「はあああああああああ……っ!!」
〝気〟のパワーが、ルルーの身体（からだ）の中で一気にふくれあがる！
「大・破岩掌（はがんしょう）!!」
ドッゴォンッ!!
繰（く）り出された掌底（しょうてい）づきは、朝のときと同じように長机だけをものの見事（みごと）にコナゴナにした。
「あわわわわわわわわわわ……。な、なにをするのー!?」

「次は、あなたがこうなる番でちゅわ」

じろっ、とルルーはももをにらみつける。身体はちっちゃいケド、そのハクリョクは、格闘技に長けたいつものルルーのものだ。

「ぼ、暴力ハンタイなのー」

「じゃあ、差出人の名前を教えてくれまちゅわね？」

「それだけはゼッタイにダメなのー。なにか事故があったというならー、そのコトを教えてほしいのー」

「あのベッドに寝たら、ベッドの呪いかなにかで、あたくちの身体がこんなに縮んじゃったんでちゅわ。昨日、受け取りのサインをちたときは、もっとおっきくてナイスバディだったでちょう？」

「よく覚えてないのー」

ガクッ★

ルルーは思わずコケそうになった。

「あなたねぇ……、その眼はホントに見えてるんでちゅか!? まあとにかく、そういう事故があったというのはホントでちゅわ」

「それは机を壊す前にいってほしかったのー。呪いのベッドを運んだなんてウワサが広まったらー、商売していけないのー。だからスグに教えてあげたのー」

「あら、そういえばそうでちゅわね、ゴメンなちゃい。おほほほほ……」
ルルーはコロコロと笑うが、有無をいわせずに破壊された机は哀れである。
「えーとー」
もももはまたバサバサと書類をめくった。
「あったのー。ベッドの差出人は、吸血伯爵と書いてあるのー」
「吸血伯爵ぅ!?」
忘れもしない、数年前のある日のコト……。
ルルーがベッドに入ったら、次の朝は家とはゼンゼン違う、まるで城の地下牢のようなところにいた。その城の主こそ吸血伯爵であり、彼は生き血を吸うためにルルーをさらったのである。しかしそれはかなえられず、逆にルルーにボコにされてしまった。もちろん、ルルーが吸血伯爵を倒せたのは、偶然に通りかかったサタンのおかげ。
だから吸血伯爵は、ルルーの運命の人——サタンをひきあわせてくれた、キューピッドだといってもいい。とはいえ、血を吸おうとしただけじゃあきたらず、呪いのベッドまで送りつけてくるとは……！
ゆるせないわ、吸血伯爵……！　カクゴしてなさい、今度はあたくしの実力だけでボコにしてあげるから……！
「で、吸血伯爵の住所はドコでちゅか？」

吸血伯爵への怒りに燃えながら、ルルーはいった。
「えーとー、ももも通販テイカ村支店ウラにある〝転送の魔法陣〟から〝ぷよステーション〟に行って、そこの鉄ぷよ機関車に乗って終点の〝むかし村〟に着いたら、こんどは〝ももんが便〟で〝オオカミ村〟へー。そしてそこから〝さそりまんの川くだり〟で伯爵の城まで行けるのー」
「ずいぶん遠いんでちゅわね……」
「そんなコトないのー。いまから出てもお昼ちょっとすぎには着くのー」
「ありがとう、助かりまちた」
「どういたしましてー」
「ついでに、ベッドの呪いを解く方法なんて、わからないでちゅよねぇ……？」
「さすがにそこまではわからないのー」
「そうでちゅか……」
となるとやはり、吸血伯爵本人に聞くしかない。
ルルーは机を壊したことをわびて、ももも通販をあとにした。とりあえずは屋敷に戻ってちょっと早めの昼食をとって、そして今度は吸血伯爵の城に向かって再出発だ。
「お帰りなさい、ルルー様」
屋敷の玄関前で待っていたミノタウロスが、ルルーを迎えた。

「いってみるちゅもり」
「うん、差出人は吸血伯爵だということがわかったわ。これからゴハンを食べて、伯爵の城にいってみるちゅもり」
「そうですか」
「なんとかちて、もとに戻る方法を伯爵から聞き出さないと……あ!!」
ルルーはトッゼン、あることを思い出した。
その瞬間!
「お嬢サマ!」
ニュッ! とまたじいのドアップ!
「タイヘンですぞ、お嬢サマ!」
「じい、なにがタイヘンなんでちゅか?」
「お嬢サマのお身体をもとに戻す方法がわかったのですぞ」
「うん、あたくちもいま思い出したトコ。ベッドにもう一回寝れば、もとに戻れるのよね」
伯爵の城に同じようなベッドがあったコトを、ルルーは思い出していた。
一度寝ると身体が小さくなり、もう一度寝るともとに戻る魔法のベッド。これがあったからこそ、ルルーは吸血伯爵の城から脱出できたのだった。ベッドの力でいまみたいに小さくなって、普通では通れない穴を抜けたりして迷宮をクリアしたから。

「とりあえず、あたくちはもう一回寝まちゅわ。そのあいだに、昼食の用意をお願い」
「しかしお嬢サマ、あのベッドはもうありませんぞ」
「え……？」
「そういえば今朝、ルルー様がハデにブッ壊したんスよね」
とミノタウロス。

吸血伯爵が送った魔法のベッドは、今朝ルルーが怒りにまかせて放った破岩掌のおかげで、いまはコナゴナのボロボロである。それでは、さすがのルルーも寝ることはできない。

がが――――――――――んっ！

ショックのあまり、ルルーは眼の前がクラクラしてくる。

も、もしかして、あたくしはもう二度ともとに戻れないの……？　伯爵の城に、まだ魔法のベッドは残ってるかしら……？　もしなかったら、あたくしは一生このまま……？

そうだ、ルシファー先生ならもとに戻してくれるかも……！　いや、だけどそれじゃ、サタン様にこの姿を見せるコトになっちゃう。それだけはゼッタイにイヤだわ……！

ってコトは、もしかして今日の夕食会もナシ……!?　そ、そんなぁ……。せっかくのチャンスだったのに、またツブれちゃうの……？　しかもこのままもとに戻れなかったら、もう二度とサタン様を振り向かせるチャンスなんてやってこないわ……！

そんなのイヤ！　ゼッタイにイヤよ……!!

「ううっ……」

じわわっ。

ルルーの眼に、また涙があふれてくる。そして……、

島全体はおろか、北の大陸にまで届きそうな大声で、ルルーは泣きはじめた。希望への道が完全に閉ざされただけに、その勢いは朝より激しい。

「あああっ、ルルー様!」

「うえええええ————ん……!」

「うんうん」

「じい殿、うなずいてるバアイじゃないっスよ!」

「うんうん」

「ダメダコリャ……」

朝のときは、じいにもなぐさめるネタがあったからよかったものの。それがないいまでは、さすがのじいもうなずくしかない。

「びええええええ————ん……!!」

「あわわわわ……」

「うんうん」

「あ————んあんあん……!!」

「あうあう……」

「うんうん」

再びこんな状態がえんえんと続くかと思いきや……、

『は―――っはっはっはっは……!!』

トッゼン、ルルーの泣き声にも負けない高笑いが、ルルーたちの頭上から聞こえてきた。

『わ―――っはっはっはっはっはっはっはっ……!!』

高笑いをしたまま、誰かがコウモリのような羽根をはばたかせて、ルルーの眼の前に着地する。エメラルド色のロングヘアに、青紫系のローブ、立派な翼と2本のツノ。

「さ、サタンしゃま……!?」

『ノンノン』

ルルーのコトバに、いきなり現れた人物は人差し指をチッチッと振った。

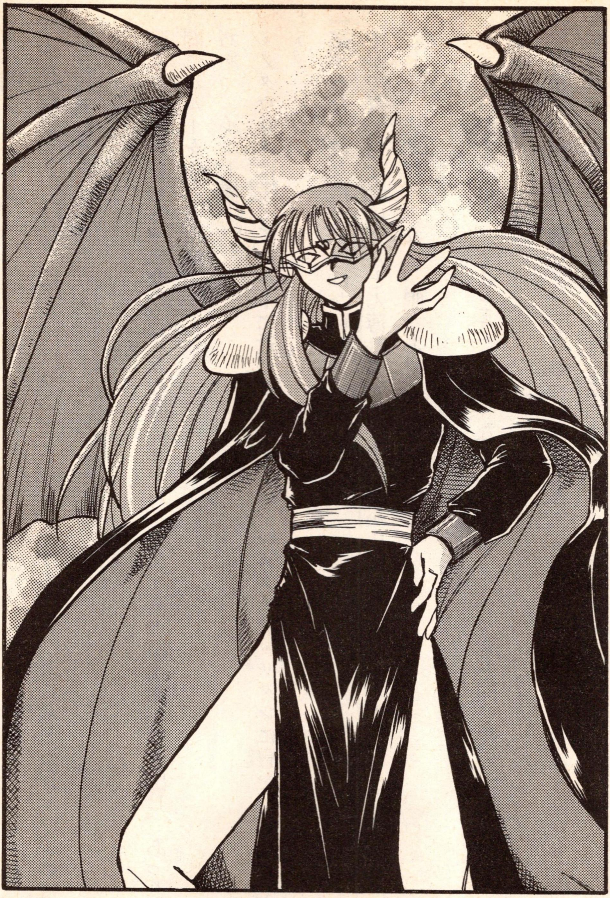
『私はサタン様などという者ではない、〝仮面の貴公子〟マスク・ド・サタンだっ！』

「マスク・ド・サタン……?」

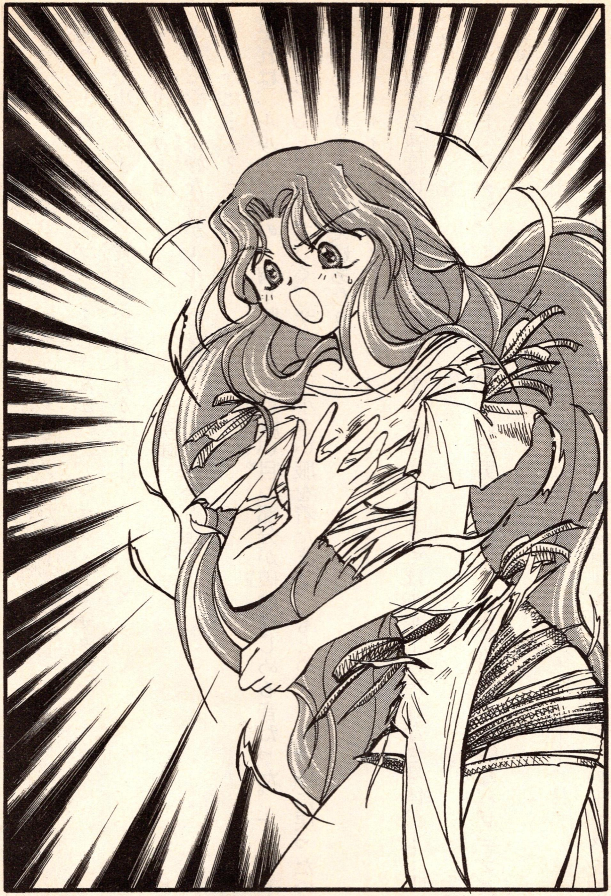
『そのとおり』

確かに、カッコウそのものはサタンとまったく同じだが、このマスク・ド・サタンと名乗る人物は、仮面舞踏会かなにかに使うような、金色のマスクをつけている。

「も、もしかちて、変態コスプレ野郎……？」
ルルーは、そのテのやからがあまりスキではなかった。
『失礼な！　私は変態コスプレ野郎などではない、正真正銘の正義の味方、マスク・ド・サタンである。……まあいい、とにかくキミには涙は似合わない。とりあえず、これで涙をふくがよい』
と、マスク・ド・サタンは、ふところからカーバンクル柄のハンカチをとりだす。ルルーはそれを恐る恐る受け取り、涙をふいた。
『よし。では次に、キミにふりかかった災いを取り除いてしんぜよう』
やおらマスク・ド・サタンは魔法の巻き物を出し、それの指示どおりにルルーを中心にした魔法陣を描きはじめた。
「…………」
ルルーは、これからなにが始まるのか予想できずに、胸がドキドキしている。だけど、災いを取り除いてくれるというなら、ひと筋の光を求めてそれにしたがってみるのもいいかもしれない。どうやらマスク・ド・サタンは、悪人というワケではなさそうだし。
『よしできた。ではルル……いや少女よ、心を落ち着かせて神経を集中させたまえ』
「は、はい……」
素直に、ルルーは眼を閉じ、意識を集中させた。すると、マスク・ド・サタンの呪文を唱え



る声が聞こえてくる。
『〝仮面の貴公子〟マスク・ド・サタンの名において命ずる……。この哀れな仔ヒツジの戒めを解き放ちたまえ……!!』
ドオッ！
呪文の詠唱が終わるやいなや、足元の魔法陣からイキナリ真っ白な光が吹き出し、あっという間にルルーを包みこんだ。
「ああっ、ルルー様！」
ミノタウロスは慌ててルルーに近づこうとするが、マスク・ド・サタンに肩をつかまれてしまう。
『案ずるな、彼女にキケンはない』
やがて真っ白な光はどんどん薄れていき、その中から現れたのは……！
『よし！　成功だ。少女よ、眼をあけるがよい』
「…………」
ルルーは眼を開けた。するとそこには、なんと昨日と――いつもと同じ視界が広がっているではないか！
手、足、お腹、腰、胸など、手で触ったり眼でカクニンしてみると、やっぱりいつもと同じ。年齢のワリにはオトナっぽく、異性を虜にするナイスバディに戻っている！



「も、もとに戻ってる……！」

『えっへん！　どうだ、このマスク・ド・サタンの力は！』

「ありがとう、変態コスプレ……じゃなかった、マスク・ド・サタン」

これで事態はようやく安泰と思われたが……！

ビリビリビリッ……！

トツゼン、奇妙な音がルルーの身体から聞こえ始めた。

「な、なに……？」

それは、ルルーの服の、胸や腰あたりの縫い目の部分が破けはじめる音だった。そしてそれは、どんどんと広がっていく。サイズの小さい服を着たまま、もとの大きな身体に戻ったのだから、あたりまえといえばあたりまえ。

ビィィィィィィィッ……！

服の破ける速度は、ますます加速していく。このままではルルーの汚れなき身体が……！

『おおおっ!?』

マスク・ド・サタン、ミノタウロス、じいの男3人は、いきなりの悩ましげなハプニングに眼を奪われた。

「いやあああっ！　マスク・ド・サタンのバカ！　変態！　エッチ――――っ!!」

叫びながらルルーは慌てて屋敷に駆けこみ、自室のクローゼットからいつものドレスを取り

出して手早く着替えた。それが終わる頃に、マスク・ド・サタンの声が空から響いてくる。

『わはははははは……！　私もちょっとイイめが見られてラッキー！　そして正義の味方マスク・ド・サタンは去っていく！　また会おう少女よ！　ではアディオス・アミーゴ！』

「もう来なくていいわよ！　今度同じコトしたらタダじゃおかないからね！　ゼッタイ許さないんだから！　い――――――っだ！」

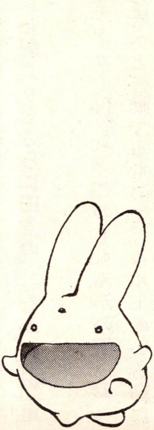
ルルーは窓から身を乗り出して、高笑いの消えていったほうに叫ぶが、もはや変態コスプレ野郎の姿は見えない。

　まあとにかく、魔法のベッドの差出人もわかったし、もとの姿にも戻れた。吸血伯爵のコトはともかく、これでなんとかサタンとの夕食会は無事に開けそう。よかったよかった。やっぱマスク・ド・サタンみたいな変態より、本物のサタン様がイチバンだわ……！などと昼食ができるのを待つあいだに考えながら、夕食会のコト、そしてその後のコトを想像――というか夢想して、またほほを真っ赤に染めるルルーだった……。

　ああ、サタン様……！

　夜までなんて待てないわ……。今からルシファー先生の別荘に行っちゃおうかしら……？

〝激・背負い投げ〟な昼の章



ずんずんずんずん……！

まるで大地を踏み荒す大怪獣のように、ルルーはうっそうとした森の中の細い小道を歩いていた。まさに昼なお暗いといったこの森には、ちょっち西に傾きかけた午後の太陽の光はまったくといっていいほど届かない。

ずんずんずん……！

と、まるで大地を割るような勢いでルルーが歩いているのは、もちろん吸血伯爵に対する怒りのため。いくらなんでも、ちっちゃい頃からキチンと礼儀をしつけられてきたルルーは、普段から怪獣みたいなハシタナイ歩きかたをしてるワケじゃない。

だけど今は怒り心頭！　頭の中が、まるでお湯のわいたヤカンのようにボコボコグツグツといっている。

ずんずんずんずん……！

ゼッタイに許せないわ、伯爵——!!　あたくしの血を吸おうとしただけじゃあきたらず、今

ごろになってヒトの恋路のジャマをするなんて……!! そりゃあ、一応はなんとかなったから いいケド、せめて一発ブン殴らなきゃ……いや、どうしてこんなことをしたのかを問いたださなきゃ気が済まないわ!

ずんずんずん……!

ちょっち早めのお昼ゴハンを済ませたルルーは、サッソク伯爵の城へ出発。ちなみに、お昼のメニューはレンズ豆のスープとライ麦のパンとぷよまんとコーヒー。デザートまでゆっくりと食べてるバアイじゃないケド、人間、どんなに急いでるときでも、食べるときはキチッと食べるというくらいの心の余裕はないと。

まあ、それはともかく、ルルーは昼食を終えるやいなや屋敷を飛び出して、配送所のももも に教えてもらったルートで伯爵の城に向かった。

まずは配送所の裏にある〝転送の魔法陣〟で、最近できたばっかりという〝ぷよステーション〟へ。

草原の真ん中にある、まるで田舎の建物みたいな質素なその駅から、〝ばよえ〜ん本線〟を走る岩ぷよ機関車にゆられること約一時間、出発した駅よりもさらに田舎の、〝むかし村〟に到着。

今度はその村から〝ももんがの駅〟に行って、〝オオカミ村〟へ。このももんがの駅、おっきなももんがに乗ってあちこちに建てられた塔から塔へと移動するもので、ルルーのいる島に

はこんな交通網はない。これを使ってアルルの故郷や魔導幼稚園なんかに行けるらしいケド、いまのルルーには関係はない。

さてさて、オオカミ村に着いたら今度は、そこの近くを流れる川を、〝さそりまんの川くだり〟に乗って一気に下流へ。タライのようなちょっち危なっかしい小船に乗って、さそりまんの船頭で川をくだるワケなんだけれど、川の流れがゆっくりなうえ、さそりまんがノンビリしまくっているからタマラナイ。「ええ天気でんなー」とか「もうすぐ秋でんなー」とか、おっとりしたニコニコ顔でしゃべりまくって船がなかなか進まないので、急いでるルルーとしてはイライラのしっぱなし。

「ちょっと早くしてよ！　こっちは急いでるんだから！」

と文句をいったら、

「まあまあ……。世の中、そんなに急いでもイイコトおまへんで。これでも食って、落ち着いて景色でも楽しみなはれ」

さそりまんはニコニコしながら、ぷよまんとシブイ抹茶をくれた。そういえばルルーは、お昼頃はデザートまでたしなむほどの心の余裕があった。そんなルルーがなんでイライラしてたのかというと、サタンとの会食までそんなに時間がないコトと、だんだんだん大きくなってきた吸血伯爵への怒りのため。急いでるときにさそりまんのニコニコ顔を見てると、よけいイライラするというのもちょっちあるケド……。

ってかなきゃ……！

怒りに我を忘れるなんて、あたくしもまだまだね……。この怒りは、伯爵に会うときまでと

なぁんて思いながらぷよまんと抹茶を味わっていると、やがて魔法関係の学校とかが修学旅行にやってくるという〝廃都ラーナの遺跡〟の脇を抜け、伯爵の城がある森へと到着。

船をおりたルルーは、

「さぁ——て……。伯爵、待ってなさいよぉ……！」

と気合いを入れて、森の中を歩き出した。

そして、早くもところどころ赤く染まりはじめている森の中を歩いているうちに、伯爵への怒りもふたたびわきたってきて、

ずんずんずんずん……！

という怪獣みたいな歩きかたに、いつのまにかなっていた——というワケ。

ちなみに、じいとミノタウロスはお留守番。じいはともかく、バアイによっては伯爵と戦うかもしれないこの状況で、ミノタウロスがついてこないのはとっても珍しい。いったいなにがあるのやら、ミノタウロスは「ちょっと、約束がありまして……」といってついてこなかった。

その約束のせいか、ミノタウロスは朝からソワソワしっぱなし。

戦力としてとっても頼りになるだけに、ミノタウロスがいないのはかなり残念だけれど、用事があるのならしかたがない。ルルーは従者を個人としてちゃんと尊重する、とってもエライ

ご主人様だった。

ずんずんずん……！

それにしてもミノタウロスったら、あたくしに隠れていったいナニしてるのかしら……？

ずんずんずん……！

そんなコトを考えながら進むルルーの前には、もう伯爵の真っ黒な城が見えている。

背が高く、塔にも見えるこの城を地面から見たのは、これが初めて。以前に城に来たときには、いつのまにか中にいたし、帰りはサタンに抱かれて空を飛んでいたし……。このときのことを思い出すと、伯爵に対してよけいアタマにくるやら、サタンのぬくもりが恋しいやらで、なんだかフクザツなキモチ。

ずんずんずん……！

伯爵の城まで、あともう少し。

と、歩き続けていると……、

「あら……？」

ふと、ルルーは前のほうに人影があるのに気がついた。最初は豆ツブのようだったその人影は、どんどんどん大きくなってきて、姿形がハッキリしてくる。どうやら、向こうもこっちに歩いてきているらしい。

「伯爵……？」

ではないコトは確か。吸血伯爵は、その名のとおりヴァンパイア——その実力は、普通のヴァンパイアなんかとはくらべものにならないケド——だから、お陽サマの下には出られない。城の中にいるぶんには、昼間でも動けるらしいけれど。

それにしても、ルルーのまわりには伯爵がふたりいるけれど、吸血伯爵だのゾンビ伯爵のテイカテイカ卿だの、どちらも人間ではない。人間の貴族はいないのかしら？　とルルーはたまに思う。サタンも悪魔の立派な貴族だけれど、もちろんルルーにとって〝このお方〟だけは別格である。

それはともかく、では伯爵でないとすると、前方から歩いてくる人影はいったい……？

「………」

すたすたすた……。

ルルーはずんずん歩きから普通の歩きかたに変えて、人影を注意深く観察しながら進んだ。歩きかたを変えたのは、相手がイキナリ攻撃してきたようなときの用心のためと、人前でハシタナイ行動をするワケにはいかないという、お嬢サマらしいプライドのため。

「………」

すたすたすた……。

ルルーは進んだ。すると、だんだん人影が誰だかハッキリしてくる。

「あら……？」

思わずルルーは声を上げた。

「あららら……?」

伯爵の城のほうから近づいてくるその人影は、ルルーのよく知っている人物だった。それも、会ったらソッコーでブン殴る！　というほどじゃないケド、できるなら顔をあわせたくない部類の……。

ちょっちクセのある銀色のショートヘアに青いヘアバンド、サタンほどじゃないけれど、カゲがあるというか邪悪っぽいかなりの美貌。白銀のローブ、そして青い肩アーマーとマントに身を包んだ、いかにも魔導師というその人物は……!?

「ど、どうしてシェゾがここに……?」

呆然と立ち尽くして、ルルーは魔導師の名をつぶやいた。

「ん……?」

ルルーのかすかな言葉が聞こえたらしく、なにやら考えこみながら歩いていた魔導師――シェゾ・ウィグィィは顔をあげる。

「なんだ、ルルーではないか」

シェゾはいった。

「こんなところで、なにをしている?」

「それはあたくしのセリフよ！　あなたこそ、伯爵にいったいなんの用があるというの?」

「ふっ……」

ルルーを嘲笑うかのように、シェゾは口の端をゆがめた。ルルーもまわりから「女王様な性格」とか「タカビー」とかっていわれるケド、コイツほどじゃあない。いちいちカッコつけるそのしぐさ、ヒトを見下したようなそのセリフひとつひとつに、なんとなく腹が立つ。「あなたいったいナニサマのつもり!?」ってカンジ。

「オレがなにをしていようと、お前には関係のないことだ。……が、教えておいてもさしつかえなかろう」

「……………」

破岩掌のイッパツでもかましたい気分をなんとかこらえて、ルルーはシェゾの言葉を待った。

「オレはいま、伯爵とある実験をしようと申し入れてきたところだ」

「実験?」

「そう。広く知識を集めることは、魔力の効率化、そして増幅につながる。そして知識を得るためには、さまざまな実験はつきものだ」

「へぇ〜、アルルのちっちゃいお尻をおっかけてるだけじゃなかったのね」

たっぷりのヒニクをこめて、ルルーはいった。

闇の魔導師シェゾは、己の魔導力をより高くするべく日夜努力を重ねている。それは一流の魔導師になるためにがんばっているアルルとおんなじで、魔導師だったら——というか誰だっ

て、より上のレベルになりたい、イチバンになりたいと望むというもの。ルルーだって格闘家としてもっともっと強くなりたいと思うし、AJPAに認められるようなぷよぷよの達人になりたいし、なぞぷよマスターにだってなりたいし、アルル以上の超一流の魔導師になってサタンに振り向いてもらいたいと思ってる。

より強い魔導師になるために、たくさん修業するのはとってもいいコトだ。ただしシェゾの場合、その方法がちょっとダークというか邪悪というか変態というか……。

シェゾも一応は、普通の魔導師のようにたくさんの書物を読んだり、いろいろな遺跡やなにかを旅して知識を深めているらしい。そのおかげか、アルルも知らない、強力な〝古代魔法〟だって使える。そんなシェゾがより高い魔導力を得るために考えたのが、〝人の魔導力を吸収してしまう〟というコト。

これまでにどれだけの人の魔導力を吸収してきたかは不明だけれど、シェゾはいま、アルルの魔導力をつけねらっている。

だけどずいぶん前に、

「お前が欲しい」

とアルルの前に現れてからというもの、シェゾの試みは失敗ばかり。まるで物語に出てくる悪役のように、作戦すべてがことごとく失敗する。シェゾがアルルに撃退されるシーンを、ルルーは何度となく眼にしているケド、その失敗の様子は気の毒になってくるくらい。それと同

時に、「魔法（まほう）のウデは一流かもしれないけど、オツムが三流じゃあ……」とも思う。ずっと前にルルーがなぞぷよマスターになるためにがんばっていたとき、ルルーといっしょにまんまとウィッチの陰謀（いんぼう）にひっかかったし……。

なにしろアルルの前に出てくるたんびに、

「お前が欲しい」

というもんだから、いまや変態あつかい。

そりゃあ、「お前の魔導力（まどうりょく）が欲しい」といいたいってのはわかるケドさ……。クラくて陰湿（いんしつ）なテでアルルを狙（ねら）ってくるし、やっぱ変態よね。あのマスク・ド・サタンといい勝負かも……。

なぁんてコトを、伯爵（はくしゃく）の城の前でシェゾと顔をあわせているルルーは、ふと考えた。

「バカにしてもらっては困る」

ルルーがどんなコトを考えているのかも知らずに、シェゾはいう。

「確かに、アルル・ナジャに秘（ひ）められた強大な魔導力はノドから手が出るほど欲しい。だがそれとて、己（おのれ）の野望達成のための1ステップでしかない。アセる必要はないってことだ、アルルが自分の魔導力に目覚めたということでもない限りな……」

「……」

アルルに秘められた強大な魔導力――。

これまでに何度となく、いろんなヒトから聞いたコトバだけれど、でもやっぱりそれを耳に

するたびに、ルルーはなんだかムカムカしてくる。
どうして、いつもアルルばっかり……。
こんなとき、いっつもそう思う。「不公平よ！」と神様に文句をいいたくなる。
だけど、どんなに叫(さけ)んでみても、アルルに強大な魔導力が秘められている——らしい——という事実は変わらない。いまルルーの眼の前にいるシェゾも、あろうことかサタンも、ルシファーでさえもそういっているし、ルルーもブチ切れたアルルのパワーは何度も眼にしている。アルルの逆鱗(げきりん)に触(ふ)れたサタンやシェゾが、もうどれだけ無意識的に発動したアルルの強大な魔導力で吹(ふ)き飛ばされてきたことか……。
でも別にルルーは、アルルがそんなに強い魔導力を秘めているってコトがうらやましいとか、腹(はら)が立つとかってワケじゃあない。要するに誰でも持っている〝火事場(かじば)のバカ力〟とか〝潜在(せんざい)能力〟とかいったものが、アルルの場合はとてつもなく大きいってだけ。それにルルーだって、アルルに負けないくらいの潜在能力を持っている——とルシファーが前にいってくれた。
ナニがくやしいって、アルルの秘められた魔導力の前には、ルルーのナイスバディも、洗練された美貌(びぼう)も、親の財産もかすんでしまうってコト。
シェゾはまさにアルルの魔導力が目的なワケだし、ルシファーは潜在能力をうまく引き出せるようにして自分のような一流の魔導師にするために教育している。サタンでさえ、強大な魔導力を持つアルルは、サタンの次に魔界の王となるもの——つまりサタンの子供(こども)を産ませるの

にふさわしいと考えてる。

　で、当のアルルは、それをジカクしてるのかいないのか……。

　モノスゴイ魔導力を秘めていることくらい、もうとっくに知っているハズなのに、アルルは相変わらずボゲボゲへらへらと暮らしてる。もうちょっとシャキッとして修業にはげんでもいいのに、カーバンクルといっしょに遊んだりぷよまんを食べたり……。

　なんだかバカバカしくなってきちゃうわ。こっちは「アルルに負けないパワーを持ってる」っていうルシファー先生の言葉を信じて、一生懸命に努力してるっていうのに……。いつかアルルを超えるパワーを身につけて、サタン様に振り向いてもらおうとしてるのに、まったくはりあいがないじゃない……！

　そう考えると、なんだか風船がしぼむみたいに気合いが抜けていく。そりゃあ確かに、アルルはアルルなりに努力しているんだろうとは思うけれど、チンクシャでお人好しのアルルが恋敵かと思うと、ルルーとしては我ながら情けなくなってくる。そんな考えがどんどん深みにハマって、サタンをあきらめようかと思ったことも一度や二度じゃない。ほかのヒトでもいいかなぁ～……、なんて。

「どうした？」

「……!?」

　シェゾの言葉で、はっ！　とルルーは我にかえった。ムカムカしてるうちに、いつのまにか

自分の考えの中に入りこんでいたらしい。
「な、なんでもないわよ……！」
いいながら、
バカバカ！　これじゃボゲボゲのアルルといっしょじゃない！　しっかりしなさい！
と心の中で自分に気合いを入れる。
「まあとにかく、オレはどうしてここにいるのかを教えたぞ。今度はお前の番だ」
シェゾはいった。
「ど、どうして？　どうしてあなたなんかに、あたくしがここにいる理由をいわなきゃいけないの？」
「確かに、その必要はない。だがオレは、お前が問うからさしつかえのない範囲(はんい)で教えたのだ。お前がここにいる理由を明かすのは、それに対する礼儀(れいぎ)ではないのか？」
「う……」
「それともお前は、人の名前を問うても自身の名は明かさぬという、そんなぶしつけなオンナなのか？　ニンジャや暗殺師(あんさつし)を生業としているならば、それも職業的な注意深さとして合点がいくというものだがな……」
「ううっ……」
スルドイ論理的たたみかけに、ルルーはタジタジ。

「わ、わかったわよ！　そんなに聞きたいんなら教えてあげるから、感謝なさい！」

とっさにそういったものの、ルルーは伯爵の城に向かってる理由をホントに教えていいものかどうか悩んだ。

別に、伯爵をこらしめるコトをジャマされるのがコワイからとか、シェゾがルルーの恋路をジャマしてるから、とかっていうワケじゃあない。たとえそういう理由で戦いになったとしても、確かにシェゾは強いけれどルルーにも勝つ自信はある。

ルルーが迷っているのは、

シェゾがなにをしてくるかわからず、話したコトがどう利用されるかわからない――。

というコトで、これが己の野望を達成するためにはすべてのものを利用するという、悪の魔導師シェゾ・ウィグィィのコワイところ。以前にもルルーは、なぞぷよマスターへの手がかりを求めていたときに、それをまんまとシェゾに利用されたコトがあった。おまけに、嫁入り前の乙女にはたえられないほどの辱めまで受けて……！

「む〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……！」

そのときのコト――シェゾがルルーの足元のカゲに隠れてずっとついてきてたコトを思い出して、この場でシェゾをボコにしたくなってきた。

だけど、ここにいる理由を話すといってしまったし、確かにシェゾのいうとおり、理由をたずねたこっちも話すのは礼儀。それに、一度やるといったコトをやらなかったり、ヒトになに

かたずねておいて自分のコトは明かさない、というようなズルイまねはルルーにはできない。
「いいこと？　一回しかいわないからね」
「ふむ……」
ルルーは、伯爵と出会い、そして、いま彼の城に向かっているコトにいたるまでのイキサツを話した。城にトツゼン連れてこられ、伯爵に血を吸われそうになったコト、サタンの協力で城からなんとか脱出できたコト、そして今朝の呪いのベッド事件……。
正直者で純粋なルルーは、悪人なシェゾみたいにさしつかえないところだけを話す、なんてコトはできない。身振り手振りをまじえたり、サタンへの想いにひたったりしながら、こと細かく説明した。もう、話したコトが利用されるんじゃないか？　なんていう心配は時空のかなたにスッ飛んでしまっている。
「……というワケで、なんで伯爵がいまさらあたくしにチョッカイを出すのか、それを問いただすために城に向かっているのよ。おわかり？」
「なるほど」
シェゾは、腕を組んでかすかな笑みを浮かべながらルルーのハナシを聞いていた。「実は、そのハナシならもう知っている。お前をからかうためにたずねただけだ」とでもいいたげな、ちょっちイヤなカンジの微笑み。
ナニよ、あなたが聞きたいっていうから話したのに、そーいうタイドを取るワケ？　ぶしつ

けなのはどっちよ！

と、ルルーはまたムカムカしてくる。

「美麗な女人の生き血を吸うのは、吸血鬼どものサガであり、生きる術。どうしても吸われたくないのなら抵抗するしかあるまいが、伯爵に狙われるのも美しさの証しというものだな」

「あら!?」

シェゾの言葉に、ルルーはすっとんきょうな声で応えた。てっきり皮肉のひとつでも出てくるのかとちょっちムカムカしながら待ち構えていたら、シェゾの口からもれたのは、意外や意外のマトモなセリフ。あいかわらず皮肉っぽい口調だけれど、こんなセリフを聞いたらルルーでなくたってビックリするというもの。

「あなたからそんなコトバが出てくるなんて……。ありがとう、お世辞でもうれしいわ」

「いいや、世辞などではない。オレは事実しかいわん」

いいながらシェゾは、じっとルルーを見つめた。いつのまにかうすら笑いが消えて、超マジメ顔になっている。

「ど、どうしたの？　イキナリ……。シェゾ、熱でもあるんじゃない？」

「熱などない」

ツカツカツカ……。

トツゼン、シェゾはルルーのほうに歩き出した。

ルルーを攻撃(こうげき)するっていうフンイキじゃあない。シェゾがその気なら、離(はな)れていても呪文(じゅもん)のイッパツでオーケーのはず。それよりもなによりも、格闘家(かくとうか)のルルーに接近戦を挑(いど)むのはあまりにも愚(おろ)かというもの。

「オレは常々、お前に伝えたいと思っていた……」

ツカツカツカ……。

「な、なに……？　なんなの……？」

奇妙(きみょう)なシェゾのフンイキに圧倒(あっとう)されて、ルルーは思わずあとじさった。

「な、なんかヘンよ、シェゾ……。ど、どうかしちゃったんじゃないの……？」

じりじりじり……。

「オレはいつもと変わらない」

ツカツカツカ……。

「ちょ、ちょっと……！　シェゾ、ふざけないで……！」

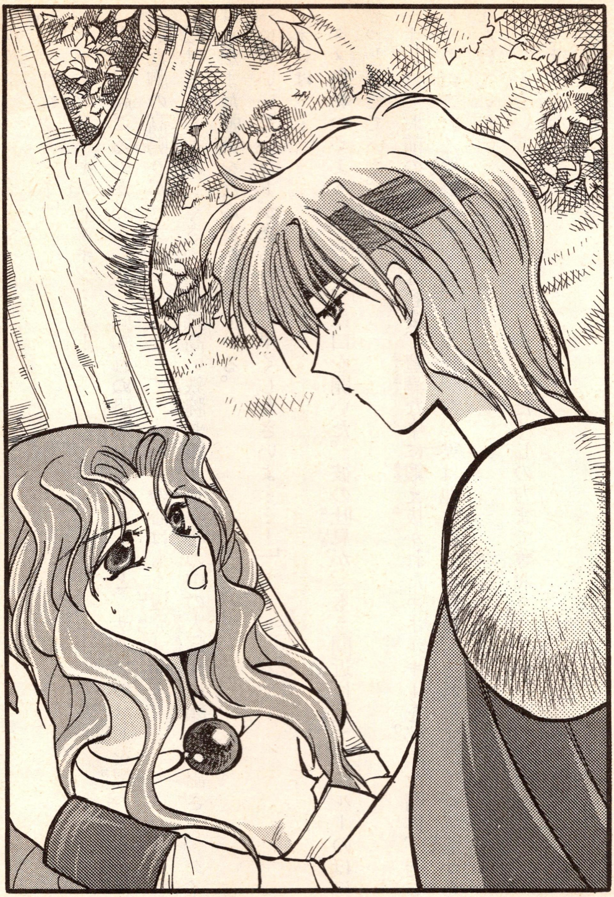
じりじりじり……。

「オレはいつも本気だ」

ツカツカツカ……。

ルルーがさがれば、それだけ、いやそれ以上にシェゾが迫(せま)ってくる。戦闘(せんとう)を始めるというカンジじゃないけど、怒(おこ)ったような、思いつめたようなマジメ顔を少しも崩(くず)さずに……。

まるで、ブキッチョな青年が荒っぽく告白するかのように、シェゾはルルーに迫る。
ツカツカツカ……。
「ちょ、ちょっと……、あの……」
じりじりじり……。
ドン！
うろたえながらあとじさるルルーの背中は、ついに樹にぶつかってしまった。もう逃げられない……！
確かに走ったりすれば逃げられたかもしれないけれど、いつもとはゼンゼン違うシェゾの態度にルルーはどうしていいかわからず、「逃げる」なんて選択肢すら頭に浮かばない。
ツカツカツカ……。
やがてシェゾはルルーの眼の前まで近づき、
ガッ!!
樹にもたれるように、左手をルルーの顔のすぐ脇に荒っぽくかけた。そのあまりの勢いに、ルルーは一瞬、ビクッと身をすくませる。
「………」
もはやルルーは、ヘビににらまれたカエルのような状態。じっと見下ろすシェゾの瞳から眼をそらすことすらできない。



「ルルー」

「な、なによ……！」

ドッキンドッキンドッキン……！

なにが起こるのかわからない底知れぬ恐怖のようなものと、サタンのコトを想ってるときみたいな胸の高鳴りがゴチャマゼになって、ルルーの心はもう爆発寸前！

だけどルルーは、くさっても気高い鉄腕お嬢サマ。心の中の大騒ぎは顔には出さず、タイドはまだまだ強気をなんとか保っている。

「い、いいたいコトがあるなら、早くしなさいよ……！」

「オレは……」

タメ息をつくように、シェゾは口を開いた。彼の吐息が、もう間近に迫ったルルーのほほをそっとなでていく。

「オレは、お前のその美麗な容姿、豊満な中に鍛え抜かれたエネルギーを秘めた肉体、そこからくりだされる格闘のセンス、ワガママだが実は他人思いの性格、それらすべてに以前から眼をかけていた」

「ど、どういうコト……？　まさか、あたくしの力まで奪おうっていうんじゃあ……」

「とぼけるな!!」

「!!」

ビクゥッ！

すさまじいシェゾの一喝に、ルルーはケイレンしたようにふるえあがった。

「オレがなにをいいたいかわからぬほど、お前は暗愚ではないはずだ」

また吐息のような口調に戻って、シェゾはいう。

「…………」

シェゾ、ホントにホンキなの……？

でも、どうしていまさら……？

あたくしがサタン様一直線だっていうのは、もう知ってるはずなのに……。

いくらなんでも、それを知らないほどシェゾもおバカじゃない……、と思うケド……。

もうルルーの頭の中はこんがらがってしまって、シェゾの告白に喜んでいいのやら悲しんでいいのやらわからない。これがさそりまんとかサムライモールとかの告白だったら、

「ふっ、美しさって罪ね……」

なぁんてタカをくくってるトコロだろうけれど……。

「オレはいずれ、世界最強の魔導師になる。神や悪魔をも凌駕する魔導師にな……！」

頭ゴチャゴチャのルルーをよそに、シェゾは続ける。

「…………」

「そうなればもはや、世界を手に入れたも同然だ。今度の実験が成功すれば、その距離はより

いっそう近づくことになる」

「…………」

「どうだルルー、最強の魔導師の妃（きさき）となるつもりはないか……？」

「ええっ!?　で、でも……」

ルルーは、それだけいうのがせいいっぱい。あまりにトッゼンの展開にどう対処していいかわからず、ルルーはうつむいて、声もか細い。

いつもの、というかまったく別のシチュエーションだったら、

「え――――――――っ!?」

とデッカイ声を出して、

「冗談（じょうだん）じゃないわ、ダレがあなたみたいな変態と……！　おバカも休み休みいってよね！」

そういいながら、シェゾに背負い投げのイッパツでもみまっていたかもしれない。

だけどいまは、シェゾの〝超（ちょう）マジ〟なフンイキにイキナリ圧倒（あっとう）されてしまって、強気な格闘（かくとう）家（か）のルルーでなく、サタンを一途（いちず）に想（おも）う純粋（じゅんすい）な乙女（おとめ）のルルーになってしまっている。

「どうした……？」

グイッ。

「あ……」

シェゾは、うつむくルルーのあごに触（ふ）れ、荒（あら）っぽく引き上げて自分のほうを向かせた。荒っ

ぽいといっても、イヤと感じるほどじゃない。むしろ、そのワイルドさが心地よいくらい。

「オレではサタンの代わりにならんか？」

いつのまにか、ふたりの顔はキス直前の距離にまで迫っている。そんな間近でルルーを見つめるシェゾの瞳は、朝焼け直前の空のようにサワヤカな青。そこには、悪役にありがちなニゴリは少しもない。

ルルーも――おそらくはほかのヒトも――、シェゾが根っからの悪人じゃないということはわかってる。ただ、考え方が他人よりもはるかに自己中心的というだけ。

だけど……。

「そ、そんなコト急にいわれても……」

ようやくルルーはそれだけいった。

「それに、あなたにはアルルが……」

「アルル？」

ふと、シェゾの瞳に邪悪な影が走った。

「オレは、アイツの魔導力が欲しいだけだ。それがなければ、あんな小娘に用はない」

優しいかと思えば、トッゼン悪魔的な厳しさを帯びたり、そしてまたもとに戻ったり……。

このあたりはサタン様によく似てるかも、とルルーは思った。

「お前のような者こそ、オレの輝かしい人生の伴侶にふさわしい」

「ど、どうして……？」
「どうして、だと？」
ふっ、とシェゾは笑うように息を吐いた。でも超マジメな表情はゼンゼン変わらない。
「愛に理由などいるものか。人の心の奥底にある愛の火種は、いつ燃え上がるかわからぬ。それはお前とて承知しているはずだ。だからこそ、お前はサタンをずっと想い続けているのではないのか？」
「……………」
た、確かに、シェゾのいうとおりかもしれない……。
伯爵の城でサタン様を見たとき、「このヒトのお嫁さんになるために、あたくしは生まれたんだ！」と思ったもの。なんのワケもなく、まるで火がついたみたいに……。
だからこそ、あたくしはサタン様を追い続けてるワケだし、よくよく考えてみると、サタン様がアルルを妃にしようとしてるのも、おんなじようなモノかも……。
「いま、お前の眼はサタンしか向いていないだろう」
まるで詩のようなシェゾの告白はまだ続く。
「しかし、愛の炎はいずれ消えることもある。消すこともできる。そして、新たに灯をともすこともな……」
「……………」

「オレはいずれ、アルルだけでなくルシファーやサタンの魔導力をも手に入れる。そのときこそ最強の魔導師を名乗る資格が得られ、そして、お前のサタンに対する炎も消えるだろう」
「じょ、冗談じゃないわ……！　そんなコト、あたくしが許すワケないでしょ！」
「なぜだ？」
「なぜって、愛するヒトを守るのは当然のコトでしょ！　もしあなたがサタン様の魔導力を吸収するというなら、あたくしは徹底的にジャマするわよ」
ルルーの心の中で、強気な格闘家ルルーがほんのちょっち目覚めた。
「そうまでして、なぜお前はサタンにつくすのだ？　その見返りはなんだ？」
「そんなものないわ、あたくしはサタン様のお力になれるだけで充分なの……！　いまのところは……」
「それで、サタンがお前を振り向くとでもいうのか？　ヤツがそう保証したのか？」
「そ、それはないけど……、サタン様はお優しくしてくださるわ……！　ちょっとだけいっしょに住んでたコトもあったけど、一生懸命にお世話するあたくしに、いつもねぎらいのお言葉をかけてくださるし……」
「お前はいいように使われているだけだ。サタンは、お前のことを便利な小間使い程度にしか思っていないかもしれんぞ。お前がミノタウロスを使っているようにな」
「え？　どういうコト……？」

「とにかくっ！」
ずいっ。
シェゾは、サタンとはまた違ったスルドイ美顔を、ルルーにさらに近づけた。もう少しで鼻と鼻が触れそう。いつクチビルがふれあってもおかしくない距離。
「…………」
ドッキンドッキンドッキン……！
ルルーの鼓動が、またスピードアップした。このままクチビルを奪われてしまいそうだという心配と、あんまり認めたくないけれど、ほんのりとそれを期待するようなキモチがゴチャマゼになって、胸の高鳴りがまたさらに加速する。
だけどシェゾは、そんな強引なマネはせずにいった。
「オレはお前をあきらめんぞ。お前がサタンをあきらめぬようにな」
「…………」
ルルーとしては、ホッとしたような、ガッカリしたような……。
「これはその証しだ、受け取れ」
とシェゾが差し出したのは、キラキラした果物。リンゴのような、ナシのような、それでいてオレンジのような柑橘系の、不思議な香りがする。
「これは……、もしかして〝雲樹の実〟？」

「そのとおり」
ルルーは、伯爵の城で見たことがあった。種を植えるとあっというまに芽が出て、そして空にとどかんばかりの高さにまで成長する、不思議な〝雲樹〟で採れる果実だ。ルルーはかつて、雲樹の成長の速さと大きさを活かして、縦に長い伯爵の城をあちこち冒険し、ようやく伯爵の部屋までたどりついたのだった。そんな雲樹の実は、ほんのり甘くておいしく、しかも食べた人の潜在能力を少し目覚めさせる働きがある。
「雲樹の実に秘められた言葉を知っているか？」
シェゾはいった。
「まあ、花言葉のようなものだが……」
「ううん、知らないわ……」
「〝永遠の愛を誓う〟だ」
「え……？」
「いつかお前を迎えに行くそのときまで、大事に持っているがいい」
「で、でも……」
いいながらも、ルルーは雲樹の実をそっと受け取った。そして、シェゾの顔を見つめる。
「………」
透き通った青いシェゾの瞳からは、ホントにホンキでルルーに告白してるのかは、ちょっち

わからない。

「………」

ルルーは、今度は手にした雲樹の実を見つめた。

もし、この雲樹の実にシェゾのいうとおりの言葉が秘められているのだとしたら、シェゾのキモチはホンキ以外のなにものではない。

でも、あたくしにはその想いに応えることができない……。

あまりにもトッゼンに告白されたものだから、心の準備ができていないというコトもある。だけど、そうでなくても、サタンを忘れるなんてルルーにはそうそうできやしない。たとえずっと振り向いてくれなくても、もしシェゾに魔導力を奪われてサタンが死んでしまったとしても、ルルーには、ずっとサタンを想い続けていられるというゆるぎない自信がある。

本気の想いに応えてあげられないのなら、いっそこの場で断りを入れたほうが、シェゾの告白に対する礼儀であり、情けであるかも……。

いや、そうではなくてこれは、実は「サタンをあきらめなさい」「見果てぬ夢をずっと追っていないで、シェゾの想いに応えてあげなさい」という、ルルーに対する神様の情けなのかもしれない……。

でも……。

でもやっぱり、神様の御告げにそむいてでも、あたくしはサタン様のほうが……!!

「…………」
じっと雲樹の実を見つめて、ルルーは考えた。だけどやっぱり、想いはシェゾのほうには傾かない。そのキモチを、ルルーは思い切って伝えることにした。
「ご、ごめんなさい……」
あなたの想いには応えられないわ、といおうとした瞬間……！
「ぷっ……！」
「ぷっ？」
ミョーな音——というか声が、上から降ってきた。
続いて……、
「は————っはっはっはっは……!!」
イキナリの高笑い。
「な、なんなの……？」
見ると、さっきまで超マジメ顔だったシェゾが、腹をかかえて大笑いしていた。
「は————っはははははははははははははは……!!」
「…………」
ボ——ゼン……。

ナニが起こっているのかまったくわからず、ルルーはただひたすらに口をアングリ。
「はっはははははは……！　いや、すまんすまん……」
笑いのおさまりかけたシェゾが、笑い涙をふきながらようやくいった。
「お前がそんなにマジに受け取るとは思わなかった」
「へ……？」
「ニブイやつだな……」
シェゾの顔からは、あの超マジメな表情はもうとっくに消え、いつものイジワルな皮肉っぽいうすら笑いがはりついている。
「お前への告白は、すべてウソッパチだというコトだ」
「な……!?」
あまりにもアッサリしたシェゾの真実のコトバに、ルルーは絶句。脳ミソの回転が止まってしまったかのように、怒り(いか)も悲しみも出てこない。
「許せ、ちょっとからかおうと思っただけなんだ。お前がそこまでマジになるとは……」
「………」
そーよ、こっちはマジだったのよ……！
あなたがマジな顔で告白するから、あたくしもマジに考えて、マジなキモチを伝えようと思ったのに……！

マジでシェゾでもいいかなぁ〜って考えたケド、やっぱりサタン様のコトがあきらめられないって、マジで結論を出したのに……！

マジだったのはあたくしだけだったというの……！

つまり、シェゾのトツゼンの告白にとまどっていたルルーは、まさにシェゾの手で踊らされていたマリオネット……。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ……!!」

ムッカ―――――――ッ!!

ルルーの心の中で炎が吹き出した。もちろんそれは、愛の炎ではなく、とてつもない勢いの怒りの炎。

「からかった詫びに、雲樹の実はくれてやる。すりおろしてカレーかなにかに入れるとウマイらしいぞ。これはホントだ、いや、マジで」

シェゾがなにかいってるケド、いまのルルーにはそんなコトはどうでもいい。

「それじゃ、そーいうコトで……」

くるっ。

と、シェゾはきびすを返した。

が……!!

「ま・ち・な・さ・い……!!」

がしっ!!

慌(あわ)てて立ち去ろうとするシェゾの肩(かた)を、ルルーは思いっきりひっつかんだ。その顔は、憤怒(ふんぬ)に燃(も)える阿修羅王(あしゅらおう)のよう。

「よぉ～くも、あたくしの純(じゅん)なココロをもてあそんでくれたわね……!!」

シェゾをムリヤリ振(ふ)り返らせ、ルルーはいった。

「い、いや、その……」

「雲樹の実もいただいたコトだし、お返しをしないと失礼にあたるわね……!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……!

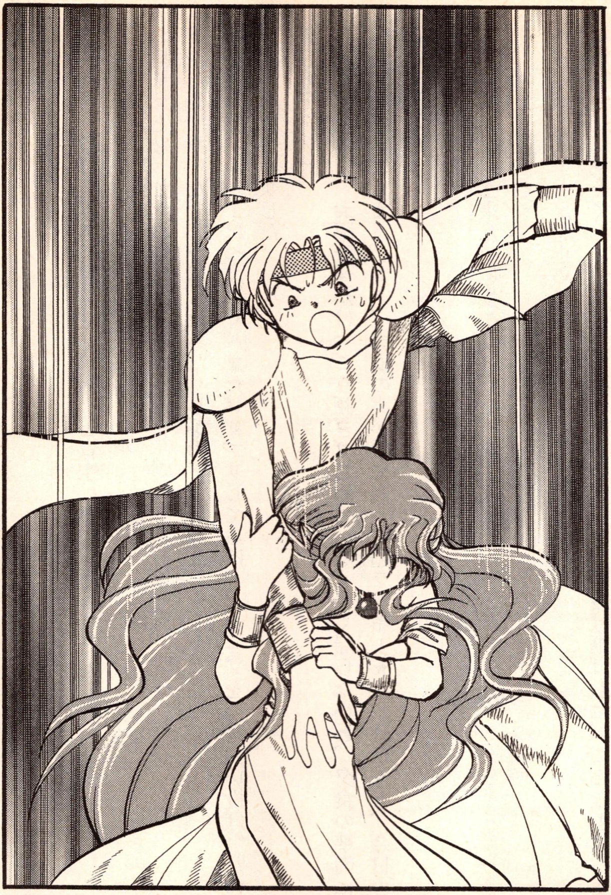
心の中の怒りの炎が、〝気〟の奔流(ほんりゅう)となってルルーの身体(からだ)を駆(か)け巡(めぐ)る。

「れ、礼には及(およ)ばんから、このまま帰らせてくれ」

「うるっさぁ――――――いっ!!」

怒りを爆発(ばくはつ)させたルルーは、シェゾの右手をひっつかんでそのままふところにもぐりこみ、思いっきり背負い投げる!!

「激(げき)・背負い投げ!!」



ブォォンッ！

「おわ――――――――――――っ……!!」

思いっきり投げ飛ばされたシェゾは軽々と青空に舞い、そして……、

キラ――――ン……。

お星サマとなって南の空に消えていった。

「まったく、あんな変態を信じたあたくしがおバカだったわ……！」

腕を組んで、ルルーはつぶやく。まだプリプリしてるけど、シェゾを〝背負い投げ〟たおかげでだいぶスッキリした。

「あらら……？」

よくよく見ると、お陽サマがけっこう傾きはじめている。早く帰らないと、夕食の準備に間に合わなくなってしまう。でも、雲樹の実が手に入って超ラッキー★　これはもう、今日のカレーに入れるしか……！

「さぁ～て、帰ろ」

と、ルルーはもと来た道を歩こうとした。が……、

「……って、違う！」

ルルーはピタッを足を止めてしまう。

「そういえば、あたくしは伯爵に用があったのよ。シェゾを投げ飛ばしに、こんなところまで

来たんじゃないわ」
あやうく本来の目的を忘れるトコロ……。
ルルーは回れ右をして、眼の前にでーんとそびえたつ伯爵の真っ黒な城に向かって歩きはじめた。
ほどなくして——というか、ようやくルルーは吸血伯爵の城に到着。
「はぁ〜〜〜〜〜〜……」
初めてマトモに眺める城の全景に、ルルーはアングリと口を開けるしかなかった。
とにかく大きい、というか高い。4階建てとか5階建てとかっていうレベルじゃない。確か、ルルーの記憶するところによると、7〜8階建てくらいのハズ。
そんな、塔のような真っ黒な城が、モンスターの角かなにかのように空に向かって突き立っている。このあたりになると、もう木々がかさなりあっていて、太陽の光はまったくといっていいほど届かない。そんな森の暗さが、暗黒城とでもいうべき伯爵の城にマッチしている。これで空に雷雲でもたちこめていたら、さらにハクリョクが増していたに違いない。
ルルーはさらに進んで、玄関の前に立った。この玄関が、これまたデカイ。ミノタウロスが3人ほど肩車してもヨユーで通れそうなくらい。そして、その玄関にはルルーの顔の2倍はありそうな、吸血コウモリをあしらったノッカーがある。
ゴォンゴォン……！

ルルーがノッカーを鳴らすと、低く、重々しい音がお城全体に響き渡った。

そして……、

ぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎぃ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ……！

重くてカタイ石材や木材なんかがこすれあってきしむような、これまた重々しい音とともにトビラが開いた。

その向こうに、ダレかが立っている。ルルーのところのじいよりはまだ若そうだけど、髪もヒゲも真っ白で、頭のテッペンがツルツルのオジサン。

「お待ちしておりました、ルルー様」

オジサンは、うやうやしくおじぎをしていった。ルルーはこの人をよく知ってる。以前、この城につれてこられたとき、イチバン最初にボコにした伯爵の執事さんだ。

「伯爵様がお待ちでございます。ささ、中へ」

と執事さんは脇によけて道をあけ、奥を指し示した。まるでルルーが来るのをずっと待ち構えていたように手際がいい。

「待ってたって……、伯爵はあたくしがココにくるのを知ってたの？」

ルルーはいった。

「はい。もちろん伯爵様はご存知でございます」

「…………」

なるほど、呪いのベッドみたいなイヤガラセをすれば、あたくしがゼッタイにお城まで乗りこんでくると踏んだワケね……！　なかなかやってくれるじゃない、伯爵……！

ルルーはまた、伯爵への怒りを静かにつのらせた。

「じゃあ、伯爵のトコロまで案内して」

なんだかワナにかかったみたいでクヤシイけれど、せっかくここまで来たんだから、伯爵に〝背負い投げ〟のひとつでもかけないと気がすまない。それに、伯爵がどんな作戦でルルーの血を吸おうとしてくるのかを見極めたいという思いと、どんなワナにかかっても負けやしないという自信もある。

「では、こちらへどうぞ」

執事さんの案内で、ルルーは城の中へと進んだ。

中はずっと前に連れてこられたときとほとんど変わってなく、なんとなくナツカシイ。城に住んでるのはたぶん伯爵と執事さんくらいしかいないハズだけど、いわゆるお城や大きなお屋敷の例にもれず、部屋があちこちにいくつもある。このあたりはルルーの屋敷とおんなじ。

ルルーの屋敷にあるいくつもの部屋は、基本的にはお客さんやなんかを泊めたりするためのもの。でもこの伯爵の城のバアイは、さらってきた女のヒトを閉じこめておくためにちがいない。かくいうルルーも、気がついたら、部屋のひとつの豪華なベッドに寝かされていた。

そういえば、伯爵も執事さんもキチンと礼儀をわきまえてたし、よく考えたら待遇そのもの

は悪くなかったわねぇ……。

なぁんてコトを思い返しながら、ルルー――と執事さんは、ヤケに広くて、寒々として薄暗い廊下を進んだ。

カッ――ン……、カッ――ン……。

と、エコーみたいに重なったふたりの足音が、さらにエコーがかかって廊下じゅうに響く。

まあ、吸血伯爵の城っていうくらいだから、夜みたいに薄暗くてブキミなカンジがするのはあたりまえといえばあたりまえ。でも、自分と執事さんの気配しかまわりに感じないのは、やっぱり心細い。イキナリ、コウモリかなんかがバタバタバタッ！　とかいって飛んできそうなカンジ。

以前は、スケルトンTやウィザード、デーモンサーバントやフロストジャイアントなんていうモンスターたちがウロウロしてたケド、いまはそのひとりの気も感じられない。もしかするとあのモンスターたちは、ルルー――やほかの女のヒトたち――を逃がさないためにいたのかもしれない。

モンスターたちがゼンゼンいないってコトは、いまお城には、さらわれた女のヒトがいないってコト……？

と、心の中でルルーが首をかしげながら歩いていると、

「ルルー様、こちらにお乗りください」

トッゼン、執事さんがいった。
見ると、
でで————————ん！
ってカンジで、とてつもなく大きな樹が執事さんの横に立っている。廊下からハミでそうなくらいに横幅があって、樹齢ン千年とかン万年とかってカンジ。しかも床や天井を完全につきやぶっていて、根っこははるか下に、枝やなんかははるか上にあるみたい。
「こ、これは……!?」
「見覚えございませんか？　以前、あなた様がお植えになった、雲樹でございます」
「あー、そういえば」
ポン。
とルルーは手を打った。
そういえばコレ、あたくしが植えたんだっけ。なんだかナツカシイわねぇ……。
ルルーはシミジミ。
ずっと前にこの城から脱出しようと奮闘していたとき、ルルーはどこかの部屋にいたモグラの老人に出会い、雲樹の種をもらった。それを土がムキだしのところに植えたら、あっというまに床や天井をつきやぶるホドに育ってしまったってワケ。そしてルルーは、この雲樹をのぼったりおりたりしてようやく伯爵のところにたどり着き、サタンに助けてもらって城から脱出

できたのだった。だから、種をくれた老人には感謝感激ってカンジ。
「こんなの、よく残しておいたわねぇ」
「ここまで育ってしまった雲樹を切るのはひと苦労ですし、雲樹の実も採れることですので、このままにせよと伯爵様がおっしゃったのです」
「でも、ここに植えたあたくしがいうのもナンだけど、ジャマじゃない？」
「そんなことはございません。むしろ、手軽に階を移れますので、感謝しております」
「え？　もしかしてコレをよじ登るの？　あたくしはもうやりたくないわ」
ルルーも、確かにちっちゃい頃はよく木登りなんかして遊んでたケド、オテンバ娘のアルルじゃあるまいし、いまさらそんなはしたないマネはしたくない。ずっと前のときは、どうしても城から脱出したいというキモチがあったし、人前じゃなかったからやったダケ。
「そんな必要はございません。昇降機を取りつけましたので……」
足元を指差しながら、執事さんはいった。
「ショウコウキ？」
よくよく見ると、執事さんはちょっとしたゴンドラに乗っている。頑丈そうなブランコというか、人が入れそうなカゴというカンジの、かなり簡素なヤツ。よく気球やなんかについてるヤツよりは、さすがにサイズがちっちゃい。
そして、このゴンドラにはハンドルがついていて、樹と同じように上下に伸びている何本か

のロープにつながっている。このハンドルを回せば、ゴンドラが上下するってカンジらしい。さらによく見たら、天井や床の穴もゴンドラが通れるようにキレイに整えられてるし……。
「へぇ〜、スゴイじゃない」
「これも伯爵様がご立案されたものでございます」
「なるほど」
伯爵もナカナカやるわね。転んでもタダじゃ起きないっていうか、災い転じて福となすというか……。
なんてコトを考えながら、ルルーは早速ゴンドラに乗りこんだ。
カラカラカラ……。
執事さんがハンドルを回すと、乾いた音を立ててゴンドラがのぼっていく。上や下は真っ暗闇だし、まわりは石造りの壁やザラザラした雲樹の幹だけでかなり殺風景だけれど、なんとなくワクワクする。壁の小窓からちょっち見える外の風景が、「あ、のぼってる」ってコトを実感させてくれて、ちょっといいカンジ。
そんなワクワクも、ほどなくして終了。ゴンドラは最上階に到着した。
「どうぞ、伯爵様は奥におられます」
執事さんに導かれるまま、ルルーはゴンドラを降りた。執事さんはそのまま。
「では、わたくしはこれにて失礼いたします」

カラカラ……。

今度はハンドルを逆に回して、執事さんは下に降りていってしまった。

ポツネン……。

薄暗いフロアに、ルルーはひとりぼっち。最上階だというのにちっちゃな窓のひとつもなく、お陽サマの光はまったく入ってこない。壁にかけられた何本かのロウソクが、ちろちろとあやうげにゆれているだけ。

そのうちの、もっとも豪華そうな燭台にはさまれて、観音開きのおっきなトビラがある。マホガニーかなにかの一枚板に、吸血コウモリや三日月をあしらった彫刻がなされていて、ちょっちブキミだけどとっても豪華。

もちろんこのトビラに、ルルーは見覚えがある。この向こうには伯爵の部屋があって、そこはルルーとサタンが初めて出会った思い出の場所……。

だけど、この思い出の場所には、吸血伯爵というニクらしい相手がいる。トビラの向こうから、ルルーを待ち構えてるっていう伯爵の気配がビンビン感じられる。

「よぉ～し……！」

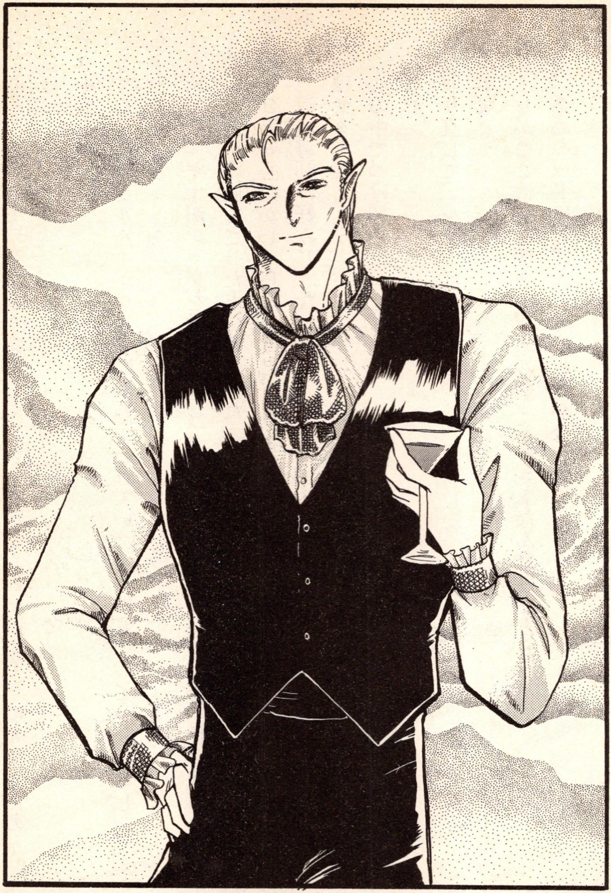
ギギギギィ～～～～……ッ！

なつかしさと伯爵への怒りをこめて、ルルーはトビラを開けた。

その向こうには……！

「やあルルーくん、待っていたよ」
数年前にルルーをさらって、生き血を吸おうとした吸血伯爵！
真っ白なシャツに、真っ黒なベストとスラックスでビシッとキめ、左手には真っ赤な液体の入ったカクテルグラス。短めのブロンドを後ろになでつけ、その下はナイスなダンディー顔。サタンやシェゾのような、鋭いカンジの二枚目とはちょっちタイプが違う。
そんな伯爵が、もたれるように後ろの机に右手をおいて、ルルーを待っていた。部屋の真ん中にでんとある机は、ルルーのパパの書斎にあるのとおんなじくらい大きく、羽根ペンやら本やらがキチンと整理されて置いてある。
「ひさしぶりだね、ルルーくん」
ダンディー顔にとってもよく似合う太めの声で、伯爵はいった。
「ホントにひさしぶりね、伯爵」
ムカムカする心をできるだけおさえつつルルーは応えるけれど、やっぱり声にちょっちトゲが出てしまう。でも、自分がいまここにいるのは、「どうして呪いのベッドなんかを今ごろ送りつけたのか？」ってコトを伯爵に問いただすためであって、イキナリ伯爵を投げ飛ばすためじゃあない。そう自分にいいきかせて、ルルーはなんとか心を落ち着かせた。
「あたくしがここに来るなんて、よくわかったわね」
「ふむ……」

くいっ。
ルルーのコトバに応えるかのように、伯爵はグラスの中の液体を飲み干した。それが本物の生き血なのか、トマトジュースかなにかなのか、それともカクテルなのかはルルーにはわからない。
「さきほどまで、私とシェゾ・ウィグィィが会見していたのは知っているね？」
「ええ、シェゾから聞いたわ。ふたりでなんかの実験をするんですって？」
「そのとおり。だが、キミも知っているとおり、シェゾは油断のならない男だ」
いいながら伯爵はグラスを机に置き、代わりに大きな水晶球を取り出した。
「そこで、この〝千里眼の水晶〟で彼奴の動向をうかがっていたところ、キミがシェゾの前に現れたというワケだ」
「ってコトは……」
「うむ、シェゾがキミにせまるシーンも、しかと拝見させてもらった」
「…………」
よりにもよって、あたくしがシェゾにからかわれてるトコロを伯爵に見られるなんて……！
とルルーは思ったけれど……、
「いやしかし、あのままキミがシェゾになびいてしまうのかと思ってヒヤヒヤしたぞ」
「へ？」



「なにしろこの水晶では音がひろえんので、シェゾがなんといってキミにせまったのかわからんからな」

「そ、そうなの?」

どうやら伯爵は、ルルーがシェゾにからかわれていたコトは気づいていないらしい。ルルーはちょっち安心。

「まあ結局は、キミがシェゾを投げ飛ばしてくれて、私もひと安心。で、私は執事(しつじ)に命じてキミを迎(むか)え入れる準備をさせたというワケだ」

「なにがひと安心だかわからないけど、よくわかったわ。ちなみにいっとくけど、あたくしはあんな三流魔導師(まどうし)は好(この)みじゃないの」

やっぱサタン様よ……!

と、心の中でつけ加えておく。

「ところで」

気を取り直して、ルルーはたずねた。

「なにかな?」

「あたくしがここに来た理由は、あのベッドのコトなんだけど……」

「うむ、あのベッドは気に入ってくれたかな?」

ムカッ!!

伯爵のこのヒトコトで、ルルーの怒りがイッキに強火になった。

「気に入ったかですってぇ〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰……!?」

キザ男にありがちな、スカしたいいかたがルルーは大っキライ。もっと直接的な「呪いのベッドの寝心地はどうだ?」というセリフのほうが、まだマシというもの。

あのシェゾ・ウィグィィが、モロにスカしたセリフをいうタイプ。だからルルーは、なるたけシェゾと顔をあわせたくないのだった。

「あんなベッドを気に入るワケないでしょ!」

さっき、よりにもよってシェゾにからかわれたってコトが、ルルーの怒りをさらに大きくしている。

呪いのベッドなんかを送られて喜ぶ人間の顔が見てみたいわよ……!!

「なんと、あのベッドでは気に入らんというのか?」

さも心外だといわんばかりに、伯爵は眼を丸くした。

「キミも意外とゼイタクだな。フレームは樹齢数千年という古代オークの芯の部分を削り出したものだし、クッションやマクラの中には最高級の羽毛と綿が入っている。それにシーツや毛布には、精神をリラックスさせる効果のある素材を使っているのだ。つまり、この世にふたつ

となく超高級ベッドなのだぞ」
「いくら超高級でも、呪いのベッドじゃしょうがないでしょうが！」
「呪いのベッド？　待ちたまえ、それはいったいどういうことだ？」
「いまさらとぼけないで！」
「とぼけてはいない」
「この城に置いてあった、寝るとちっちゃくなる呪いのベッドのコトよ！」
「そんなコトはわかっている。その呪いのベッドがどうしたのだ？」
「あたくしのところに呪いのベッドを送ってきたでしょうが!!　おかげで今朝はタイヘンだったんだから！」
「いや、私はそんなコトはしていないぞ」
「ウソ！」
「ウソではない。私の眼を見たまえ、これがウソをついている眼かね？」
「…………」
じっ。
イライラムカムカする心をなんとか落ち着かせて、ルルーは伯爵の眼を見つめた。伯爵の表情はマジメで、瞳にはウソをついてるような、どこかうわついたようなカンジはない。もっとも、さっきはそのテでまんまとシェゾにひっかけられてるから、完全に信じるコトはできない

けれど……。

「と、とりあえずはマジメみたいだけど……」

「とりあえずというのには引っかかるモノがあるが……、そうだろう？」

「でも、あたくしのトコロに呪いのベッドが届いたのは事実だわ！」

「なにかのマチガイではないのかね？　差出人が違うとか」

「そんなコトないわ！　通販のももに聞いたら、確かに伯爵が差出人だって……！」

「まあそうだろう。呪いのベッドは、私の城にしかないはずのものだからな。となると……」

「となると？」

「執事が間違えて送り届けた可能性が高いな」

「ホントにぃ？」

「本当だとも。執事は、私がまだキミの血を吸おうとしているとカン違いしているのだ。信じてくれ！　私自身は、純粋な気持ちでキミに贈り物をするつもりだったのだ……！」

伯爵の身振り、表情すべてが、「頼む！　信じてくれ！」と懇願している。

「この私の存在を賭けてもいい。キミが望むなら、この窓から表に出て、太陽のもとで灰となろう！」

いまは鉄製のよろい戸がきっちり閉められているおっきな窓を指差して、伯爵はキッパリといいきった。

この窓にも、ルルーには思い出がある。伯爵との戦いでピンチになったとき、ここからサタンがひょっこり現れて、ここから自慢(じまん)の翼(つばさ)でルルーを運び出してくれたのだ。

でもいまは、そんな思い出にひたってるバアイではない。

「まあ……、そこまでいうなら、手違いだったというコトにしてあげる」

ルルーはいった。

「すまない。同時に、執事のミスをどうか許してくれたまえ」

「じゃあ、ひとつ聞きたいんだけど」

「なにかな?」

「どうして今ごろ、あたくしに贈り物なんかを……?」

「う、うむ……、それはな……」

ポッ。

伯爵は顔を赤くして、気恥(きは)ずかしそうにほほをポリポリとかいた。

「ど、どうしたの? 伯爵……」

らしくない伯爵の表情に、ルルーはちょっち驚(おどろ)き。

「その……、なんというか……」

声がだんだん細くなってきて、それにあわせて伯爵の身体(からだ)もどんどんちっちゃくなっていくようにルルーには感じる。もちろん、実際の大きさは変わってないケド。

「じ、実は……」
「じれったいわねぇ。いいたいコトがあるんなら、ハッキリいいなさいよ」
「実はっ……!!」
ぐぐっ、と伯爵のコブシに力がこもる。
「実は？」
「私は、キミを愛してしまったのだ!!」
「は……？」
思いがけないセリフが出てきて、ルルーの眼は点になった。奇妙な静寂が、ふたりのあいだを駆け抜ける。
「い、いま、なんて……？」
「こんなコトを何度もいわせないでくれ。私は、キミを好きになってしまったのだよ！」
「え――――っ!?」
とっても久々の、飛び上がるほどの大ショ――ック！　恩師のルシファーが、実はサタンの双子の弟だって知ったとき以来のオドロキ。
まさか、吸血伯爵から告白されようとは……！
「それってもしかして、ギャグ？」

さっきシェゾにダマされたコトを思い出し、ルルーはちょっちイジワルな口調(くちょう)でいった。あまりにも意外すぎてなんかウラがありそうだし、シェゾのせいでルルーはかなりナーバスになっている。

「ギャグなどではない！　私は本気だ！」

ちょっとイラついた声で、伯爵はいう。

「数年前、サタンのいらぬ横やりもあったが、私はキミにコテンパンにヤられてしまった。それはキミも覚えているな？」

「うん」

「私はそのときの、精神的、肉体的ショックがもとで、数年ほど寝こんでしまった。そして目覚めたのはつい数週間前……」

「え？　そうだったの？」

「しかし地下の棺桶(かんおけ)で眠(ねむ)っているあいだにも、キミのコトが頭から離(はな)れなかった。水晶(すいしょう)のように純粋(じゅんすい)で美麗(びれい)な相貌(そうぼう)、将来の美しさを予感させるしなやかでバランスのよい身体、そしてそこから繰(く)り出される格闘術(かくとうじゅつ)……。それが私の瞳(ひとみ)に浮(う)かんでは消え、浮かんでは消え……」

「…………」

半分ほど唖然(あぜん)として、ルルーは詩を読んでいるような伯爵のセリフに聞き入った。ホントにホンキらしいけど、でもまだ信用したワケじゃあない。セリフもなんだか練習したみたいなカ

ンジだし。

伯爵の語りはまだ続く。

「キミの姿が浮かぶたびに、私は身をよじられるような想いにかられ……」

「それって、腸ネンテンかなにかじゃないの？」

「胸は張り裂けそうになり、そうかと思えばいまにも止まりそうなほどに凍りつき……」

「心筋梗塞？　心不全？　あなたも長いコトないかも……」

「あのな、ルルーくん……」

ぽむ。

あきれかえった顔で、伯爵はルルーの肩に手を置いた。

「私はマジメにハナシをしているのだ。そーいうまぜっかえしはやめてくれないかね？　だいたい、私は不死身の吸血鬼、そのようなコトで死ぬはずがないだろう」

「あら、わからないわよ。ヴァンパイアだって病死するかもしれないじゃない？」

「そういえば、私の祖父が肺ガンで……って、ちっが――――う!!」

「ちがうの？」

「そういうモンダイではない。……まったく、いつからキミはそんなにひょうきんになったのだ？　サタンの影響か？　あやうくこっちもノせられるところだった……」

ヒトのせいにしてるけど、伯爵のノリのよさはおそらく地だ。

「頼むからマジメに聞いてくれ、私もマジメにハナシをしているのだ。極端にいえば女性を食料としてしか見ていなかった私が、初めていだいた純粋な感情のコトを……」

「ご、ごめんなさい……」

心に訴えかけるような伯爵の姿を見て、ルルーはなんだか悪いキモチになった。ホンキで好きだといってくれてるのならば、それを茶化したりしちゃあいけない。

どうやら、シェゾみたいにあたくしをからかう、ってワケじゃなさそうね。呪いのベッドのコトも誤解だってわかったし……。

だけど……。

「お気持ちはうれしいけど、あたくしには心に決めた人がいるわ」

シェゾのときみたいに悩んだりせず、ルルーはきっぱりといい切った。断るならいまのうちしかない。それに、恋愛感情をいだいたのが初めてだとするならば、ルルーでない別のイイ人がこれから見つかるかもしれないし……。

「心に決めた人とは、サタンのコトだな？」

「ど、どうしてそれを……？」

「目覚めてから数週間、キミの身辺をいろいろと調べさせてもらった。もちろん、キミがサタンひと筋だというコトも知っている。だが、そのサタンはアルルとかいう小娘にぞっこんらしいではないか？」

「そ、そうかもしれないけど……、いつか、あたくしに眼を向けてくださる日がくるかもしれないじゃない。その日が早くくるように、サタン様が振り向いてくださるように、あたくしはずっと努力し続けているのよ」
「多分、キミの一生が終わりを告げても、サタンはキミを振り向くことはない」
「どうしてそんなコトいうの!? やってみなきゃわかんないじゃない!?」
「そうかもしれんが、サタンの性格については、私はキミよりもよく知っている。サタンがほんの子供だった頃からな」
「え……?」
「あいつは次期魔界の王として帝王学を徹底的に叩きこまれ、望むものはなんとしてでも、力ずくでも手に入れるよう教育された。そんなサタンがアルルとやらをあきらめることは、天地が逆になってもありえない」
「で、でも……!」
「サタンはキミによくしてくれた、といいたいかもしれない。しかしそれは、キミをいいように使うためのエサでしかない。あいつも、目的のためには手段を選ばんし、利用できるものはなんでも利用するヤツだからな」
「ウソ……!」
伯爵のコトバは、シェゾのおんなじセリフより、ずっとずっと重く、現実味がある。だけど

それだけに、ルルーはそれを素直に受け止められない。受け止めたくない。実は、ルルーはサタンに利用されていただけなんて……！

「そんなのウソよ……!!」

「いや、それが真実だ」

「で、でも……」

「キミはさきほど、心に決めた人がいるといった。それは、私を気づかってのことだな？　決してかなうことのない恋ならば、早くあきらめさせたほうがいいと……」

「う、うん……」

「さしでがましいようだが、早くあきらめたほうがよいのは、むしろキミのほうではないのかね？　キミはまだ若い。いくらでもやり直しがきくと思うのだが……？」

「…………」

伯爵のセリフはとっても論理的。といっても、普通の女のコだったらここで「でもやっぱりサタン様が……」とかいって、感情的になって泣いてしまうトコロかもしれない。

幸か不幸か、ルルーはとてもカシコイ女のコ。論理的なコトバを分析するほうに頭が働いてしまって、心は夕凪の海のように静か。

サタン様をあきらめろなんて、あたくしにとっては死ねといわれてるのとおんなじだわ……。

それに、ここであきらめたら、なんのためにいままで努力してきたというの……？

でも……、伯爵のいうことももっとも……。たとえ夢がかなったとしても、おばあちゃんになってからだとしたらちょっとイヤだし、トシを取っても夢がかなうという保証は、確かにどこにもない……。いまの状態がずっと——一生続くくらいなら、伯爵のいうとおりにさっさとあきらめたほうがいいのかも……。

でも……。

でもやっぱり、あたくしはサタン様が……！

「ルルーくん」

悩むルルーに、伯爵はやさしくいった。

「サタンの妃になるということが、魔界に行くということが、どういう意味を持つかわかるか？」

「というと？」

「ヤツは、地上でこそかなりおちゃらけたマネをしてはいるが、ひとたび魔界に帰れば、誇り高き貴族だ。威厳を保つため、ふざけたそぶりはいっさい見せるまい」

「………」

「そして、魔界には魔界のルールがある。キミはおそらく、自由に表を歩くことすらままならないだろう。さまざまなギャップに、キミはたえることができるかね？」

「そんなことくらい、あたくしならたえてみせるわ」

「いや、魔界を甘くみないほうがいい。魔界の者は人間にあわせることができるかもしれないが、人間が魔界の者にあわせるのは不可能だ」

「じゃあ、伯爵はあたくしにあわせてくださるというの？」

「もちろんだ。ニンニクを食らえといえば、よろこんで食べよう。キミがショッピングに出たいといえば、昼間でもよろこんでエスコートしよう。それによって、たとえ私の身が滅びることになってもかまわない」

「そ、そんな……、なにもあたくしはそこまで……」

「血を断てといえば、よろこんで断とう。いや、実際にはもう断っているが……」

「え？　じゃあ、さっき飲んでたのは……？」

「あれは、〝ブラッディマリー〟というウォッカとトマトジュースのカクテルだ。数週間前に目覚めてから、私は血を一滴も口にしていない」

「ええっ!?」

部屋があんまり明るくないから気がつかなかったケド、よくよく見ると、伯爵の顔が以前よりもずいぶんやせている。いや、やせたというより、やつれたというカンジ。吸血鬼のエネルギー源である血を飲んでないとするなら、確かにやせようというもの。

となると、城の中にモンスターの気配がなかったのもナットクがいく。血を吸わないと決めたのなら、女のコをさらってくる必要もないし、女のコを逃がさないためにモンスターたちを

放しておく必要もない。
「血を飲まなくて大丈夫なの!?」
「大丈夫ではないが、まったくダメというほどでもない。といっても、酒の力でなんとか立っているのだが……」
「伯爵……」
そこまであたくしを想っているなんて……。
驚きと感動で、ルルーの胸はいっぱいだ。いままでルルーにいいよってきた男は何人もいるけれど、命までなげだそうという人はいなかった。あのミノタウロスでさえ、確かに命を賭けてルルーに仕えるカクゴはあるだろうけど、口に出していったコトはない。
命まで賭けてあたくしを愛してくれるという、伯爵の想いになんとか応えてあげたい……。でもやっぱり、そう簡単にサタン様のことをあきらめるなんてできない……。
「………」
さっきのシェゾのときと同じように、ルルーは心の中でサタンと伯爵をハカリにかけた。だけどいつまでたっても、どっちが重いか答えが出ない。
「ルルーくん……」
ふわり。
悩むルルーに追い討ちをかけるように、伯爵はルルーの肩にそっと手をまわした。そのしぐ

さはあくまでも自然で、やさしく、さりげない。
そう、今朝のルルーの夢に出てきたサタンのように……。
「……」
も、もしかして、これが夢の暗示なの……？　やっぱり神様は、サタン様をあきらめろとあたくしにいっているの……？
ドッキンドッキンドッキン……！
氷のような伯爵の視線に射抜かれて、ルルーの心臓はもはや破裂寸前。これも、夢のシチュエーションとまったくおんなじ。
そして……、
「ルルーくん、私は……」
と、伯爵の口から甘い愛のコトバがつむぎだされようとした瞬間……！
コンコン。
誰かがトビラをノックした。
「伯爵様……」
続いて、執事さんの声がトビラの向こうから聞こえてくる。
「伽の準備ができました。いつでもお食事ができます」
「トギ……？」

伯爵の腕の中で、ルルーは首をかしげた。

伽とは、寝床を婉曲に表すコトバ。いくらなんでも、ベッドの中で遅いランチをとるハズはないから、食事とはすなわち吸血伯爵の食事ということ。つまり執事さんは伯爵に対して、ベッドの中であんなコトやこんなコトをしながらルルーの血を吸う準備ができた、といっているのである。

「ば、ばかもの!!」

トビラの向こうの執事さんに向かって、伯爵は怒鳴った。

「な、ナニをカン違いしているのだ貴様は！」

「は？　と申しますと？」

「わ……、私はルルーくんの血を吸う気などないと常々いっているだろう！　ボケるにはまだ早いぞ！」

なんだか伯爵の声がうわずっていて、とっても早口。どんな心理状態なのかが、ルルーにも手に取るようにわかる。

ついでに、ルルーはいまどんな状態におかれているのかも……。

「おコトバを返すようですが、お間違いになられているのは伯爵様のほうですぞ」

くぐもった声で執事さんはいった。

「ルルー様をお迎えし、伽のしたくをするようおっしゃったのは伯爵様ではありませぬか」

「わっ、バカ！　し――――――っ!!」

「………」

なるほどねぇ……。

ふたりの会話を聞きながら、ヤケに落ち着いてルルーは思った。

やっぱりナニもかもウソで、あたくしの血を吸うためのワナだったというワケなのね……。

ベッドのコトも、あたくしが好きだというコトも、命を賭けてあたくしを愛してくれるというコトも……!!

ぶちっ!!

ルルーの中で、ナニかが音をたててはじけ飛んだ。そのナニかとは、まさしく堪忍袋の緒！

「はぁ〜くぅ〜しゃぁ〜くぅ〜……っ!!」

伯爵の右腕をしっかりとつかんで、ルルーは彼をニランだ。もはやルルーの心の中には、ゴウゴウと燃える怒りの炎しかない。

「わ――――――――――――――――っ!!」

そんなルルーの形相を見た伯爵は、腰を抜かすほどビックリ仰天。だけどルルーに腕をつかまれているおかげで、腰を抜かすことすらできない。

ルルーの顔は、それほどまでに恐ろしく変化していた。眼はつりあがり、水晶色の髪は逆立

ち、それはまるで怒髪天をつく鬼神のよう。

「よくも……！　よくもあたくしの乙女心をもてあそんでくれたわねぇ……!!」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

という効果音をバックに、ルルーはいった。

さっきシェゾから同じテでダマされているだけに、ルルーの怒りはよけい大きい。おんなじテにひっかかった自分が情けなくて、悔しくて、腹が立つ。始めはあんなに警戒してたのに、結局はたくみな論理展開や情に負けてしまって……。

もう誰も信用しないわ……！　誰がなんといおうと、どう迫ってこようと、あたくしはもうサタン様しか追いかけない……!!

ナニよナニよ！　みんなしてあたくしをバカにして……!!　シェゾも伯爵も大ッキライよ!!

「い、いや……、その……、あの……」

思わぬところから計画がバレてしまって、伯爵はもはやシドロモドロ。

「そういえば、伯爵にベッドのお礼をしなくちゃね……。だってあたくしは、そのためにここに来たんですもの……」

ボキボキッ……！　ベキベキッ……！

伯爵の右腕をいったん離して、ルルーは指を鳴らした。た～っぷりの威圧感をこめて。

「あ……、う……」

「ゼッタイにあたくしが仕返しに来ると思って、呪(のろ)いのベッドを送ったんでしょ？　お望みどおりに来てあげたんだから、感謝(かんしゃ)なさい」
「ま、待ってくれ……」
ようやく伯爵(はくしゃく)はマトモなコトバを発した。
「ベッドの件は、確かにいつわりだった。それは認めよう。だが、キミを愛してしまったというのは本当だ！　信じてくれ！」
「そんなコトいったって、いまさら信用できるわけないでしょ！　本当だとしたら、どうしてあたくしの血を吸おうとしてたの!?」
「そ、それは、ヴァンパイアの悲しきサガというヤツで……。ほんのちょっとでいいから、キミの血をわけてもらいたいな、と……。頼(たの)む！　もう何週間も血を吸っていないのも本当なんだ！　キミの血を吸わせてくれ！」
「うるさ――――いっ!!」
ぐいっ。
ルルーは伯爵の腕を再びつかんだ。
「あんたなんかずっと棺桶(かんおけ)で寝(ね)てればいいのよ!!」
そして、そのまま投げ飛ばす！

「激・背負い投げ!!」

ブォォォォォォォォォォン……!!

「わ―――――――っ！」

ドバァン！

思いっきり投げ飛ばされた伯爵はマホガニーのトビラをつきやぶって、執事さんをもまきこんで、そのまま雲樹のゴンドラにナイス・イン！

カチッ。

そのショックで、ハンドルが作動した。

カラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラカラ……！

ひゅるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる……！

「のわ―――――――っ！」

「ひえ―――――――っ！」

哀れな伯爵と執事さんを乗せたゴンドラは、下へとイッキに降りていく。いや、落ちていく。

やがて、

ずずぅ……ん……！

かすかな音と振動が、城全体をゆらした。

「まったくもう……！」

伯爵たちが下におっこちたコトを確認してから、ルルーはまだプリプリしながらつぶやく。

シェゾや伯爵も許せないケド、あんな連中に二度もダマされてしまうとは、あたくしもまだまだ修業が足りないわ……！　もっともっと精神修業もつんで、魔界とのギャップにもたえられるようにならなくちゃ……！

魔界と地上とのギャップ——。

ルルーの心の中には、そのコトバがなんとなくひっかかっていた。ホントは単なるでまかせかもしれないけれど、おなじ魔界の貴族である伯爵のセリフだけに、ミョーに真実味がある。

やっぱり、魔界に行ったらサタン様は変わってしまうのかしら……？

ふと、ルルーはそんなコトを考えた。いつもの、明るくてちょっちドジなところが消えてしまうのもイヤだけど、ルルーの知らないサタンの一面をまのあたりにするのは、かなりコワイ感じがする。そのギャップにたえられるか？　と問われたら、いまのルルーにはちょっとキビシイかもしれない。サタンの本当の姿を見たときに自分がどうなってしまうかなんて、ルルーには想像もつかない。

やっぱり、人間は魔界の人といっしょにはなれないのかしら……？

あんまり眼を向けたくないケド、真剣に考えなきゃいけないモンダイでもある。

「……………」

ぶんぶん。

ほかには誰もいない部屋の中で、ルルーは首を大きく振った。悪い考えを頭の中から追い出すかのように。

いっしょになれないのかしら？　なんて考えちゃダメよ！　そんな迷いがあるから、シェゾや伯爵なんかにつけこまれるのよ。サタン様がダメだったらほかの人でもいいかな、なんて考えてるから……。

まずそこから直していかなきゃ。迷わずにサタン様だけを愛することができなくちゃ、魔界のギャップにたえるコトなんてできやしないわ……！

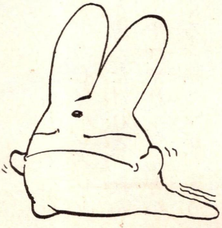
「よしっ！」

格闘技のかまえで、ルルーはちょっち体育会系な気合いを入れた。シェゾとの大騒ぎもあったし、もうだいぶ時間がたっているハズ。早く帰らないと、サタンとの夕食会に間に合わなくなってしまう……！

楽しみにしててくださいね、サタン様……！　とびっきりの愛のカレーを作ってお待ちしておりますわ……！

〝烈・四肢咆哮〟な夕の章

「るんるんる～ん★」
セッカチなカラスが鳴きながら家路についている頃、ルルーはテイカテイカ村の商店街で夕食のお買い物中。
「ふんふふんふふ～ん★」
るんたった★
ってカンジの鼻歌まじりの軽やかなステップで、ルルーはカレーライスの材料を求めて、たくさんのお店がたちならぶ通りを歩く。ＢＧＭはお店の威勢のいいオジサンや買い物オバサンたちの喧騒だけど、それさえも、いまのルルーには小気味いいポルカのように聞こえる。
真っ白なエプロンをつけて、買い物カゴを左腕にひっかけて、ちょっちいいカンジ。もちろん、そんなルルーの手料理を心待ちにするダンナ様は、サタン以外にありえない。
ルルーとしては、夢にまでみたこの状態に、そりゃあ確かに鼻歌もでようというもの。
実際にはルルーとサタンは結婚してるワケじゃないし、サタンが買い物の帰りを待っている



ワケじゃないけれど、やっぱり心がウキウキする。ルルーに対してちょっちイジワルな神様も、サタンとのあったかい家庭生活を想像するくらいでは文句をいったりしない。

ああ……、またこうしてサタン様のためにお買い物ができるなんて、夢のようだわ……★

ちょっち昔に想いをはせながら、ルルーは商店街をスキップするように歩く。

以前ルルーは、ほんの少しのあいだだけれど、サタンとふたり――もちろんミノタウロスもいっしょだから正確には３人――で暮らしていたコトがある。そのときもこうして、エプロンをつけて買い物カゴを片手に、夕食の買い物に出かけてたのだった。そのときのうれしさったらもう、今日とはくらべものにならない。八百屋のオジサンに「若奥さん」なぁんて呼ばれたりして、いま思い出してもウレシハズカシってカンジ。

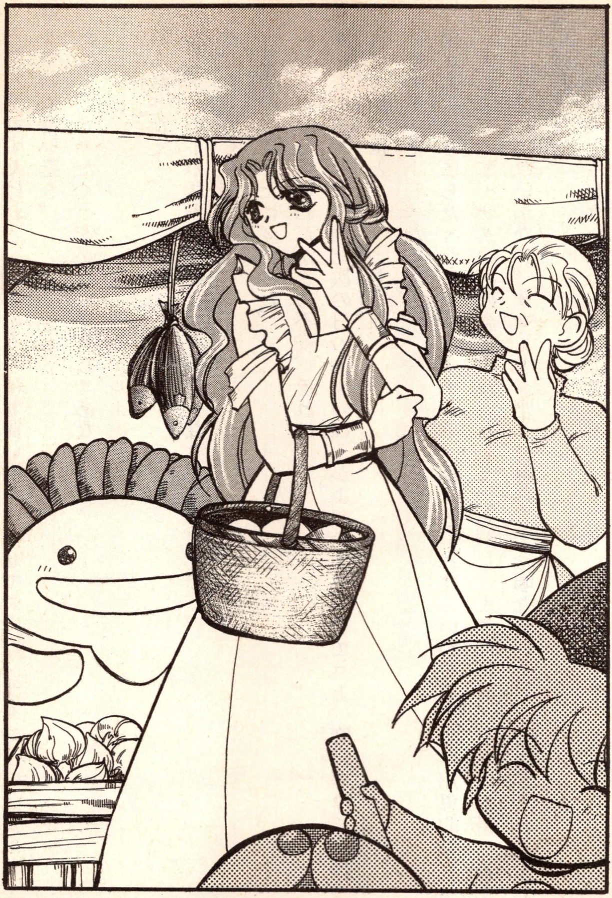
そんな思い出のいっぱいつまったシチュエーションがまた味わえるなんて……★

これで心がウキウキしなかったら、人間じゃあない。

「るんるんるん★」

カレーの材料を求めて、スキップ、スキップ、ランランラン★

朝っぱらに起きた事件をなんとか収拾をつけることができたのも、ルルーの心をハレバレとさせている。呪いのベッドで身体がちっちゃくなったときはどうなるかと思ったけれど、なんとかもとに戻ったし、送り主の吸血伯爵に〝お礼参り〟もできた。はぁ〜やれやれ、なんとかスッキリサッパリってカンジ。日に日に眠る時間がだんだん早くなってくるお陽サマが、もう



そろそろ沈む頃だけれど、いまのうちにお買い物をすませておけば、サタンとの会食にはギリギリで間に合いそう。
だけど、まったく不安がないワケじゃあない。
「………」
るんたった……。
ふと、ルルーのスキップにゲンキがなくなり、そして、
てくてくてく……。
と普通の歩きかたに変わった。
ルルーの心の中にわだかまる不安、それは………！
カレーライスは、作った次の日のヤツのほうがよりオイシイってコト。昨日のウチに作っておけばよかったと、ちょっち後悔。
いやいや、そーじゃなくて！
確かに、いちにちたったカレーはオイシイ。だけどそれは、いわゆる生活の知恵的なレベルのハナシであって、サタンとの会食みたいなちょっちかしこまった席に、そんな所帯じみたモノを出すワケにはいかない。サタンとふたりで暮らしてた頃なら、それでもよかったかもしれないけれど……。
とにかく、そんなカレーのハナシはおいといて……。

ルルーの心になぁんとなく引っかかっているのは、昼間の伯爵との会話。
あたくしたちが知ってるサタン様の振る舞いは、あたくしやアルルたち——地上の人間にあわせたポーズだっていうのは、ホントなのかしら……？
その疑問が、まるで五月のハエのように、ルルーの頭の中につきまとって離れない。
仮に、万が一、たとえば——いや、そこまで念を押さなくてもいいんだケド——今朝の夢が正夢になって、サタンがルルーにプロポーズしたとしよう。となると、ルルーはサタンといっしょに魔界に行くことになる。あたりまえだけどルルーは魔界に行ったコトなんてないから、そこがどんなところかなんて想像もつかない。地上の人間みたいにモンスターがうじゃうじゃしてるだろうってコトくらいはわかるケド……。
とはいっても〝魔界の貴公子〟サタンの妃として魔界に行くのだから、待遇やなんかは悪くないだろうし、ルルーが心配してるのはそんなコトじゃあない。
ルルーの心を不安にさせるのは、サタンの態度が変わっちゃうかもしれないってコト。
確かにサタンは「次期魔界の王」といわれるくらいの大物だから、故郷に帰れば、威厳をたもつためにいささか厳しい態度を取るだろうことは予想できる。だけど、それと同時に、これまでにルルーやアルルたちと接してきたサタンが消えてしまうのがとってもコワイ。伯爵のいっていた「ふざけた態度を見せない」サタンを見るのがコワイ。
その美貌や魔界の貴公子という立場だけじゃなく、そんな大物にもかかわらず、とっても優

しくてちょっちドジな、人間味あふれるサタンだからこそ、ルルーは好きになったのに……。
「…………」
てくてくてく……。
なんだか、考えれば考えるほど不安になってくる。真夜中の学校や暗い森の中にひとりでいるときみたいに、えもいわれぬ恐怖がルルーの心を押しつぶそうとしている……。
「ま、いっか！　そのときはそのときよね……！」
ぎゅうぎゅうとおしくらまんじゅうしてくる不安を力いっぱい振り払うかのように、ルルーはひとりごちた。ちょっち声が大きかったようで、まわりの人たちが驚いたようにルルーのほうを見るけれど、ルルーはそんなコトなんて気にしな～い。
そーよ！　伯爵のいってるコトがホントだっていう証拠はないし、たとえサタン様があたくしの知ってるサタン様じゃなくなっても、あたくしはずぅ～っとサタン様を愛し続けるわ！
そう考えなきゃやってられないのも事実だけれど、確かに伯爵のコトバがホントだという証拠がないのも事実。
すくなくとも、いまこの場で思い悩むコトじゃあない。
「ふんふんふん★」
てっくてっくてっく★
ルルーはふたたび、鼻歌まじりのスキップで商店街を進んだ。いちど決めたら、もういちい

ちクヨクヨしたりしないのがルルーのいいところ。

「るんるんるん★」

てっくてっくてっく★

やがて、ルルーは八百屋さんに到着。おいしそうなジャガイモやタマネギ、ニンジンとかが並べられた店の前は、お買い物のママさん連中でごったがえしてる。

「いらっしゃり〜のぉ」

ルルーが店を覗きこむと、ほかのお客さんが買った品物を袋に入れながら、〝パキスタ〞がいった。まんまるのダイコンかカブに手足をつけたような、植物系の商人モンスターだ。

「今日は、ジャガイモとおナスのいいヤツが入ってる〜のぉ」

ほかのママさんたちの相手をしながら、パキスタは新しいお客——ルルーに向かっていう。その辺の手際のよさは、さすが商人モンスター。

「そ〜ねぇ……」

パキスタのコトバに応えるかのようにつぶやいて、ルルーは並べられた野菜たちをながめる。なんだか、お嫁さん気分でいいカンジ。

はたしてパキスタのいうとおり、コロコロとしておいしそうなジャガイモがルルーの眼の前にある。まるで、「買って買って★」といってるみたい。もちろん、カレーライスにはかかせないアイテムだ。

「ん〜と……」

ルルーは、イチバンおいしそうなジャガイモを選んだ。イチバン「買って買って★」の声が大きいヤツ。

それを手に取ると同時に、横から誰かの手がにゅっと現れて、となりのジャガイモを手に取った。そして……、

『ねえねえ、これいくら？』

トツゼン、ルルーの声と女の子の声がハモった。どこかで聞いたような声……。

「え……？」

ビックリしてそっちを見ると、おっきな眼をさらに大きくまんまるにしてルルーを見つめているアルルの顔があった。アルルのほうも、ルルーとハチあわせしたコトに驚いてるみたい。彼女の肩には、これまたビックリ顔のカーバンクルもいる。

「アルル……！」

「ルルー……！」

「ど、どうしてこんなところに……？」

「どうしてって……、夕ゴハンのお買い物に決まってるじゃない。ルルーもこれから夕ゴハンのしたく？」

「そーよ」

「あれ？　そーいえば、いつのまにかおっきくなってる。もとに戻ったの？」
「まあね」
マスク・ド・サタンのおかげだけれど……。
「よかったね★　ボクもルシファー先生も心配してたんだよ」
と、アルルはニッコリ★　まるで自分のコトを喜ぶかのような、純粋な微笑み。
「………」
そんなアルルの汚れのない笑みを見ると、ルルーの心はなんだかフクザツなカンジになって、ドギマギする。いっしょに喜んでもらってうれしいというか、純粋さに心を打たれるというか、なんとなく偽善者的に見えてムカツクというか……。
そんなとき、いつもルルーの口から出るのは、
「まあ、あたくしはあなたと違って、すぐルシファー先生とかに頼ったりしないわ。多少のトラブルくらいなら自分でなんとかできちゃうのよ」
なんて、強がりとヒニクがまじったタカビーなセリフ。
「またぁ、すぐそーやってボクを子供扱いするんだから。確かにルルーはボクよりお姉さんだけど、2歳しか違わないじゃない」
ふたりの年齢差は2歳だけれど、体型の差は2年どころの騒ぎじゃあない。一方のルルーは大人の女性にも負けないナイスバディで、アルルのほうは、小学生顔負け（笑）の幼児体型。

だけどイジワルな神様は、その幼児体型のアルルのほうに、サタンの心を向かせている。ルルーにとっては、それがくやしくてタマラナイ。

「いっとくけど……！」

とくやしさのあまりに、ルルーはアルルの幼児体型をヒニクろうとした。が……、

「あのぉ～」

あくびしたフランス人のような間延びした口調で、パキスタがふたりの会話に割って入る。

「買い物するなら早くしてほし～のぉ。後ろがつかえてる～のぉ」

『あ……』

ルルーとアルルはまたハモって、ようやくオバサンたちの刺すような視線に気がついた。この世の中で、買い物オバサンたちのパワーと恐ろしさにかなうモノはない。

ふたりは慌てて買い物をすませ、八百屋さんの人ゴミから抜け出た。

「ふう、やれやれ……」

ルルーの買い物カゴにはいってるのは、ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、そしてパキスタおススメのナス。どれもカレーライス関係の野菜だ。アルルの買い物カゴの中身もだいたいおなじようなカンジで、どうやら、あちらも今夜のメニューはカレーらしい。

「つぎは……」

と、お肉屋さんへ向かおうとしたところへ……、

『やあルルーくん』
どこかで聞いたような声がした。サタンによく似てるけど、氷のようなサタンの声とは違って、春の日差しみたいにあたたかい。
声のしたほうを見ると、そこには、魔法だけじゃなくていろんなコトを教えてくれた恩師の姿があった。
「ルシファー先生！」
『ひさしぶりだね、ゲンキだったかい？』
いかにも魔導師といった黒いローブに身をつつんで、あいかわらずそのローブのフードに隠れて顔の上半分は見えない。だけど、あらわになっている下半分に浮かべられたその表情は、やっぱりあいかわらず優しい。
フードの向こうには、ツノがなくてちょっち優しめの、サタンと同じ顔があるのをルルーは知っている。魔導学校を卒業するとき、卒業試験をパスしたごほうび代わりに、先生は自分の正体を明かしてくれたのだ。彼がサタンの双子の弟だというコトは、アルルも知ってる。
「おひさしぶりですわ、ルシファー先生」
良家のお嬢サマらしい、礼にかなったしぐさと言葉づかいで、ルルーはあいさつをした。
「先生もお元気そうでなによりですわ」
『ちゃんと魔法の修業をしてるかい？』

「ええ、山にこもったりしてがんばっておりますわ。もう少しで、また新しい必殺技が完成しそうなんですけど……」
『それでは魔法ではなく、格闘技の修業だぞ』
「あ……」
先生にツッコミを入れられて、ルルーは顔を赤くしてうつむいた。もともとが格闘技に精通してるせいか、どんな修業をしていても、いつのまにか格闘技の修業になってるのがルルーのちょっちオマヌケなところ。なぞぷよマスターになるために〝腹いっぱい山〟にのぼったときも、いつのまにやらもう少しで〝対空女王乱舞〟を完成させるところまでいってたし……。
こんなんじゃ、いつまでたってもサタン様に振り向いてもらえるような大魔導師にはなれないわ……！
とは思いつつも、やっぱり思わず格闘技の修業をしてしまう。不思議フシギ。
『ところで……』
不意にマジメな口調になって、ルシファーはいった。
『ルルーくん、サタンを見なかったかい？』
「いいえ、見ませんでしたわ」
トツゼンの質問に、ちょっちすっとんきょうな声でルルーは答える。
「マスク・ド・サタンとかいうサタン様のコスプレをした変態オトコなら見ましたケド……」

『そうか』
「サタン様がどうかしたんですの？」
『たいしたコトではないが……。私の書庫から〝解呪の巻物〟を、どうやらサタンが持ち出したようなのだ』
「まあ……！」
『あれは呪いを解くためだけのものだから、たとえ悪事に使ったとしても大きな事件にはならないとは思うが……』
「サタン様はお優しいから、きっと誰か困ってる方の呪いを解くために使おうとしているのですわ」
『まあ……、そうだな』
本心からの「サタン様は優しい」というルルーのセリフに、ほんの少しあきれたカンジをまじえつつ、ルシファーはふふっと笑った。
『サタンに会ったら伝えておいてくれ。巻物を持ち出すのはかまわんが、なんのために使ったのかをあとで報告するようにとな』
「わかりましたわ」
「せんせ――――っ!!」
ルルーがうなずいたところで、遠くのほうからアルルの声が聞こえた。見ると、お肉屋さん

のほうから、買い物カゴをかかえたアルルが走ってくる。いつのまにやら、アルルはひと足先にお肉屋さんに行っていたらしい。

「お野菜とお肉を買ってきたよ！」

軽く息をはずませながら、アルルは戦利品でいっぱいになった買い物カゴをルシファーに見せる。

『ご苦労様、アルルくん』

「ねえねえ、ルルー」

ルシファーのねぎらいのコトバも終わらないうちに、アルルはいった。

「なあに？　アルル」

「お肉屋さん、今日は特売日なんだって。カレー用のバラ肉とかもものすごく安いから、早く行ったほうがいいよ」

「え？　ホント？」

「うん、早くしないとなくなっちゃうよ」

「わかったわ。教えてくれてありがと」

「どういたしまして」

「ではルシファー先生、これにて失礼させていただきますわ」

『うむ。しばらくは別荘(べっそう)にいるから、気軽に遊びにくるといい』

「はい！」
『ああ、それから……』
いいながら、ルシファーは長身をぐぐっと折り曲げて、ルルーの耳に顔を近づける。
『今夜はキミのところにサタンがお邪魔するらしいが、よろしく頼むぞ。そして、キミの想いがヤツに伝わるといいな』
「はい、ありがとうございます！」
「じゃ――ね――っ！」
ルルーがぺこりとおじぎをすると、アルルがゲンキよく手を振った。肩のカーバンクルも、マネをしてちっちゃな手を振っている。
それに応えるように軽く手をゆらして、ルルーはアルルたちとわかれた。そして、大安売りには眼がないオバサンたちがむらがるお肉屋さんに向かって、レッツ・ゴー！
なんだか、勇気百倍、ゲンキ百万倍ってカンジ。天下無敵のオバサンパワーにも、いまなら負ける気がしない。いつもなら、オバサンたちに圧倒されてうまく買い物ができないんだけれど……。
そのパワーのもとは、ルシファーの応援のコトバ。
先生のコトバは、なんでかわからないけれど、聞くとスタミナドリンクを飲んだときみたいにゲンキが出る。それは、まるでサタン自身が応援してくれてるように聞こえるから？　それ

とも、ルシファー自身がサタンとはまた違う優しいカリスマを持ってるから……？　いや、たぶん両方。

まあもっとも、ルシファーがルルーの恋路を応援してくれる背景には、ルシファーとサタンが、ともにアルルを追いかける恋敵同士だからなんだけれど……。でも、ルルーがゲンキづいたのは事実。もはや、サタンの態度が実はポーズなんじゃないかっていう悩みなんて、星のかなたに消え去っている。

そのゲンキを最大限に発揮して、ルルーはお肉屋さんの人だかりの中に突っ込んだ。そして、横に大きなオバサンの海をかきわけかきわけ、なんとか安くておいしそうなバラ肉をゲット！

これで、今日のカレーの材料はほぼパーフェクト。カレーのルーやなんかは、まだ屋敷にストックがあるはず。

「サタン様……、ルルーは愛のたっぷりつまったカレーを作って、あなたをお待ちしておりますわ★」

なぁんてコトを口走りながら、ルルーはさっきよりもウキウキした気分で、屋敷に向かってスキップスキップ。すると……、

「てぇへんだてぇへんだぁ〜〜〜〜〜〜いっ!!」

どたどたどたどたどたどたどたどた……！

魚に手足のついたモンスター〝すけとうだら〞が、なにやら大騒ぎをしながら村の通りを走っているのを発見。もっとも、すけとうだらはいつも騒がしいけれど……。

「ケンカだケンカだぁ〜〜〜っ!! 広場でケンカだぁ〜〜〜〜〜いっ!!」

どたどたどたどたどたどた……!

「てぇへんだてぇへんだぁ〜〜〜〜〜〜いっ!!」

すけとうだらはやがて、けたたましい声をあげながら通りを駆け抜けていった。

「ケンカ……?」

ぴくくっ。

そのキーワードに、ルルーの格闘家としての——というよりは体育会系の——ナニかが反応。

〝格闘女王様〞のルルーといえば、テイカテイカ村でその名を知らない者はいない。どんなケンカも、ルルーがあいだにはいればスグにおさまった。もちろん、ケンカ両成敗の双方とも病院送り、というカタチで……。

とはいっても、ルルーはケンカが好きだというワケじゃない。むしろ大嫌いで、だからこそ、ケンカをしてる連中を見ると殴りたくなってしまう。それと同時に、ルルーはケンカを格闘技の実践の場だとも思ってる。

そしてルルーは、数々のケンカを〝仲裁〞しつつ、格闘技の腕を磨いてきたのだった。もちろん、〝格闘女王様〞のあだ名はそのおこないのおかげ。

そんなルルーが、ケンカと聞いて顔を出さないワケにはいかない。
だけど……、
「………」
ルルーは、ふと空を見た。もうだいぶお陽(ひ)サマも暮(く)れてきていて、西のほうは真(ま)っ赤(か)に染(そ)まっている。はっきりいって、ケンカの仲裁なんかしてるバアイじゃあない。
ちょっと見るだけよ、見るだけ。ほらほら、広場も通り道だし……。
ゼッタイに見るだけではすまないとは思いつつも、ルルーは自分にそういい聞かせて、屋敷(やしき)へのコースからちょっち外(はず)れて広場のほうに足を向けた。
広場に到着(とうちゃく)すると、そこはお肉屋さん以上(いじょう)の人だかり。すけとうだらの伝令のおかげで、村中の人々がケンカ見物に出てきたようなカンジ。
「ちょっとゴメンなさい……！　ちょっと通して……！」
と人の波をかきわけていくと、やがてケンカの現場——広場の噴水(ふんすい)前に出た。そこでは、多数のモンスターたちが、ふた手に別れてニラみあっている。もう、いまにも飛び掛からんばかりの勢い。
両陣営(じんえい)のトップに立っているのは、ドラコケンタウロスと、もう一方は……、
「ミノタウロス！」
従者の姿を見て、ルルーは思わず声をあげた。

「ぶも!?」

ミノタウロスのほうも、主人の姿を見てビックリ。

「あなた、こんなところでいったいナニをしてるの!?」

ルルーは、ツカツカとミノタウロスのほうに歩いていく。その途中で、ヨロイを着たもぐらのモンスター〝サムライモール〟が持っている、旗が眼に入った。それには、デフォルメされたルルーの顔と、「ルルー様ファンクラブ」の文字が刺繍されている。

「あたくしのファンクラブの集まりかなにかなの?」

「え、ええ、まあ……」

ミノタウロスは、ルルーのしつもんにしどろもどろになりながら答える。

ルルーは、ミノタウロスがルルーのファンクラブを組織していることは知っていた。どうやら、その会合がこの広場で行われようとしているらしい。よくよく見ると、ミノタウロスの側についているのは、旗手のサムライモールのほかに、インキュバスやウィザード、さそりまんやぞう大魔王などの男性モンスターばかり。ゾンビのテイカテイカ伯爵の姿まである。

「これがあるから、今日は朝からなんだかソワソワしてたのね」

「は、はあ……」

「ちょっとちょっと……!」

ルルーとミノタウロスの会話に、龍のツノと翼とシッポをはやした、ルルー並みに気の強そ

うな女のコが割って入った。さっきまでミノタウロスとニラみあっていた、ドラコケンタウロスだ。

「ふたりで勝手にハナシを進めないでくれる？」

「なんなの？　ドラコ、あなたもあたくしのファンクラブに入ってるの？」

「じょ――――だんじゃないわ！　この旗をよく見なさい！」

ビシィッ！

とドラコケンタウロスの後ろに控える三人娘、〝トリオ・ザ・バンシー〟がちっちゃな身体で一生懸命支えている旗には、デフォルメされたサタンと「サタン様ファンクラブ」の文字が刻まれている。

「サタン様ファンクラブ？」

「そーよ！　あたしたちはサタン様を陰で支える忠実なしもべ、親衛隊といってもいいわ！」

びっ！　とキメるドラコケンタウロスの後ろには、トリオ・ザ・バンシーのほかには、ドライアード、ウォーターエレメンタル、スキュラ、ハーピーといった女性モンスターがたくさん。なぜか、ウィッチの姿まである。

「で？　サタン様のファンクラブと、あたくしのファンクラブが集まって、どうしようというの？　親睦会でも開くの？」

とてもそんなフンイキじゃないとは思いつつ、ヒニクまじりでルルーはいった。

「じょ——だん！　その逆よ！」
「ミノタウロス、どういうコト？」
「はあ……。実は町役場のミスで、オレたちの会合とあっちの会合がぶつかったんス」
「なるほど、それでどっちが先にこの広場を使うかでモメてたワケね」
「そーいうこと！」
　とドラコケンタウロス。
「そんなの、先に予約してたほうに優先権があるんじゃない？　役場に行けばそれくらい教えてくれるでしょ？」
「夕方だから、もう役場は閉まってるっス」
「役場に聞く必要なんかないわ！　先にココを予約したのはあたしたちよ！」
「いや、オレたちが先っス！」
「なにお——っ！」
「ぶも——っ！」
　ケンカ腰のドラコケンタウロスのセリフに、ミノタウロスたちはまたニラみあいを始めた。
　それにつられて、各陣営のメンバーも視線のアツイつばぜり合いを始める。ケンカ開始まであと5秒ってカンジ。

「まちなさい!!」

そんな殺伐としたフンイキを吹き飛ばすかのように、ルルーは一喝。

「あたくしがいる以上、ケンカは許さないわ！　もっと平和的な方法で解決なさい！」

「たとえば？」

まだケンカ腰のドラコケンタウロスがいう。

「ん〜〜〜……。すぐには思いつかないけど、ナニかあるでしょう？　ミノタウロス、なんかないの？」

「ルルー様が来る前にいろいろ試したんスけど、どれもダメっス」

「多数決――というか、人数の多いほうが勝ちっていうのは？」

「あっちもこっちも、はかったように同じ人数なんス」

「じゃあ……」

「そうだ！　ルルーが決めてよ！」

トツゼン、ドラコケンタウロスがいった。

「は？」

「ルルーがどっちに味方するのかを決めてくれれば、あたしたちはモンクはいわないわ」

「ドラコがそれでいいっていうんなら、あたくしはかまわないけど……。ミノタウロスはどう

なの？」
「オレたちもそれでオーケーっス！」
ミノタウロスのコトバにあわせるかのように、男性モンスターたちはうんうんとうなずく。
「も――ちろん、ルルーはあたしたちの味方よねぇ？　だって、キミの愛するサタン様のファンクラブなんだもの」
勝ち誇ったような余裕の表情で、ドラコケンタウロスがいう。
なるほど、そーいうコトね……。
ドラコケンタウロスの考えを読んで、ルルーは心の中でうなずいた。ドラコケンタウロスは、ルルーが自分のほうに味方すると予測して、ルルーに決定権をゆだねたのだった。
「さあルルー、どうするの？　早くしないと夜になっちゃうわよ！」
「ルルー様……！」
余裕のサタン様ファンクラブの面々とは対照的に、ルルー様ファンクラブのメンバーは、すがるようにルルーを見つめる。
「そーねぇ……」
とルルーは考えたフリ。考えるまでもなく、答えは決まってる。
「そりゃあもちろん……」
「そりゃあもちろん……？」

ぐぐっ、とドラコケンタウロス側の期待がイッキにふくらむ。

「ミノタウロスのほうよ！」

「え――――――――――っ!?」

いまにも火を吹き出さんばかりの勢いで、ドラコケンタウロスは驚いた。9回ウラのツーアウトで逆転満塁ホームランをくらったかのようなカンジ。予測は大外れ！

「な――んでよ！　キミ、サタン様を裏切る気？」

「そんなコトないわ、あたくしのサタン様への愛はゼッタイよ！」

「じゃあどうして……！」

「いっとくけど、サタン様はあたくしだけのもの。誰にも渡さないし、百歩ゆずっても、あたくしが会長じゃないサタン様ファンクラブなんて認めないわ！」

「じゃ、じゃあ、いますぐ会長にしてあげるよ。だから……！」

「いまさらそんなコトいったって遅いわよ。カタチだけの会長の座なんていらないし、その気があったら、自分でファンクラブを作るわ。まあそのときは、あなたのために使いっパシリのイスを空けておくから、楽しみにしてて。お――――っほほほほほほほほ……！」

いつものタカビーな女王様笑いで、ルルーはセリフを締めくくった。

「う――――――――っ……!!　もう怒ったぞぉ……!!」

ドラコケンタウロスの顔は、怒りのあまりに完熟トマトみたいに真っ赤に染まった。

「もう怒ったぞって、あなたさっきから怒ってたじゃない」

「うるさ――――いっ！　こうなったら力ずくよ!!」

すぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ……！

と、ドラコケンタウロスは大きく息を吸った。

「ファイヤーブレス!!」

ゴォォォォォォォォォォォォォォォッ!!

掛け声とともに、モノスゴイ勢いの炎がドラコケンタウロスの口から吐き出される！

「はっ!!」

気合い一閃！

ルルーはファイヤーブレスをジャンプでよけた。そして、そのままドラコケンタウロスの背後に着地。

「さっきいったわよね、ここでのケンカはあたくしが許さないって……」

「う……！」

背後からのルルーの闘気に圧倒されて、ドラコケンタウロスは、背中に刃をつきつけられたかのように動けない。

「あなたには、ちょっとオシオキが必要なようね……」

ガシッ！

いうが早いか、ルルーは、ドラコケンタウロスのひじ、ひざ、手首足首をからめとった。

そして……！

「はああああああああっ……！」

気合いをこめてイッキに力をいれ、からめとった関節を逆方向に折り曲げる！

「烈・四肢咆哮っ!!」

ボキボキボキボキボキボキッ……！

「イタ――――――――――――ッ!!」

関節という関節がイヤな音を立て、ドラコケンタウロスは激痛のあまりに割れんばかりの叫び声をあげた。

しばらくしてルルーが関節技をとくと、

「ほえほえほえ……」

どさっ。

ドラコケンタウロスはタコのようにふにゃふにゃになって、その場にくずれた。

「あああっ、会長！」

トリオ・ザ・バンシーたちサタン様ファンクラブのメンバーが、あわててドラコケンタウロスのもとに駆け寄る。
「あなたたち！」
そんなメンバーたちに向かって、ルルーはいい放った。
「あなたたちがどんな活動をしようと、それを止める権利はあたくしにはないわ。だけど覚えておきなさい、サタン様はあたくしのものよ！　今後、あたくしの眼につくところでファンクラブ活動をしたら、全員に〝四肢咆哮〟ですからね！」
「く、くそっ……！」
文字どおり腰くだけになってしまったけど、まだ意識のあるドラコケンタウロスが、スキュラたちに抱えられながらいった。
「きょ、今日のところはこれくらいにしといたげるわ……！　みんな、退却よ！」
「おとといおいでなさい。お――っほほほほほほほほほ……！」
スゴスゴと引き下がるドラコケンタウロスたちを、ルルーは女王様高笑いで見送った。
「る、ルルー様……！」
彼女たちの姿が完全に消えた頃、残ったミノタウロスたちルルー様ファンクラブの面々は、いっせいにルルーをとりかこんだ。
「ルルー様、ありがとうございまス」

「さすがは我(われ)らの女神様でござる」

ミノタウロスやサムライモールを始め、メンバーが口々にルルーをたたえる。その様子は、まさに女神の降臨(こうりん)のよう。

ぱちぱちぱち……！

ギャラリーの村人たちも、そんな様子とルルーの威勢(いせい)のいい名裁(めいさば)きに、思わず拍手(はくしゅ)。

「ヒトコトいっとくけど……」

お祭り的なフンイキに水をさすように、ルルーはいった。

「あたくしは、あなたたちの味方になったわけじゃないからね。あなたたちがファンクラブ活動をするのは勝手だけど、あたくしはサタン様のものだというコトを覚えておいてよね」

「は、はあ……」

女神といってもいい存在にクギを刺(さ)されて、ファンクラブのメンバーはなんとなくガックリ。

だけど、長いつきあいのミノタウロスだけはわかっている。口では「味方じゃない」とかいっていても、心ではファンクラブを悪く思っていないコトを……。そして、ドラコケンタウロスたちにあんなにキツく当たっていても、実は、ある意味の恋敵(こいがたき)として彼女たちを認めているコトを……。

ルルーは不器用だから、ついつい他人にキツく接したりしてしまうけれど、実は実は、とっても純粋(じゅんすい)で優(やさ)しい女のコ。ミノタウロスはそれを充分(じゅうぶん)にわかっているからこそ、ルルーにずっ

とつき従っているワケだし、ファンクラブを作ろうと声をかければ、両手じゃ足りないくらいのメンバーが集まるのだ。

「と、とにかくルルー様……」

ミノタウロスはいった。

「なあに？」

「オレたちがココで会合をやるのは、オーケーってコトっスよね？」

「まあ、いいんじゃない？　相手もいなくなったことだし」

照れ隠しのような気だるいカンジで、ルルーは応える。

「あたくしは忙しいから、もう帰るわよ。ミノタウロスも、あんまり遅くならないうちに帰ってきなさいよね、仕事はいくらでもあるんだから」

いうが早いか、ルルーは屋敷のほうに向かってスタスタと歩き出す。

かなりつっけんどんで冷たい態度だけれど、ルルーの心の中はとっても穏やかで、優しくて、ウキウキしてる。

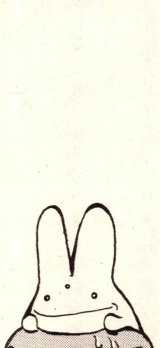
ライバル、っていうのとはちょっと違うかもしれないけれど、ドラコケンタウロスのサタン様ファンクラブはけっこういいカンジ。

やっぱり、恋っていうのはそれくらいの障害がなくっちゃね。いままでは、それ以上の障害ばっかりだったけど……。でも、ドラコなんかにはサタン様はゼッタイに渡さないわ！　サタ

ン様の心がアルルからそっちに向かないように、もっともっとあたくしも努力しなきゃ……！
そして、ルルーの心をウキウキさせる要素がもうひとつ。
いつのまにか、あたくしのファンクラブの人数がずいぶん増えてたわね……。
これで嬉しく思わないほうがおかしい。ファンクラブの中にサタンがいてくれたら……なぁんて思っちゃったりもするけれど、とにかく自分を慕ってくれるヒトたちがいるっていうのは、なんとなく安心して、気が落ち着く。
ミノタウロスもなんだかんだいって、いろいろ考えてくれてるのね……。
「……！」
テイカテイカ村を出たところで、ふと、ルルーはあるコトに気がついた。
ルルーを慕うミノタウロスの様子は、サタンを慕うルルーのそれによく似てるコトに……。
相手ややり方なんかはだいぶ違うけれど、想い人にいっしょうけんめいつくそうと努力してるところは、どちらもいっしょ。
昼間に聞いたシェゾのセリフが、不意にルルーの頭をよぎる。
「お前はいいように使われているだけだ。サタンは、お前のことを便利な小間使い程度にしか思っていないかもしれんぞ。お前がミノタウロスを使っているようにな」
あたくしは、ミノタウロスの想いに応えてあげられてるのかしら……？　ただ単に、便利な従者としてしか接していないかしら……？

いまは時間がないケド、このコトはいちどジックリと考える必要があるかもしれない。
あたくしはサタン様にいいように使われてもかまわないわ。だけど、ミノタウロスは……。とは思いつつも、サタンもきっと自分の想いに応えてくれる日がきっと来る、と信じる自分もすぐそばにいる。今晩は、そのあたりを問う絶好の機会かもしれない。
「…………」
昇りかけのお月サマを、問いかけるように見つめながら、ルルーは屋敷へと続く小道を歩いた。後ろのほうでは、会合をしてるらしいミノタウロスたちの声が聞こえる。
「…………」
初秋の静かで涼やかな風と、後ろの騒ぎとのギャップが、なんとなくルルーの心をセンチメンタルにさせる。いつのまにか、ウキウキしてる自分はいない。
サタン様……。あなたのお心はどちらに向いているの……？　やっぱり、アルルじゃないとダメなの……？　あたくしじゃ役不足なの……？
サタン様……。

〝超・女王乱舞〟な夜の章



「ん〜……」
とカガミを覗きこんで、ルルーは自室でお化粧タイム。
窓から見える風景は、もはや陽もとっぷりと暮れて、まんまるのお月サマが夜の世界を見守っている。
もちろん、カレーの準備はばっちりのオーケー。あとは、ルルー自身がおめかしをしてサタンの来襲にそなえるのみ！
「……………」
というワケでルルーは、いつにない真剣な表情で、カガミにうつった自分とニラめっこしてるのであった。
こんなに一生懸命になってお化粧するなんて、何年ぶりくらいかしら……？
マツ毛を整えながら、ルルーは記憶の糸をたどってみる。おそらく、これほどマジメになったのは、10歳くらいに初めてお化粧をしたとき以来。パパの友人の貴族が開いたパーティーに

連れてってもらえるコトになったルルーは、「社交界に華々しいデビュー！」みたいに思いこんで、生まれて初めて自分でお化粧をしたのだった。
その結果は最悪も最悪。ファンデーションはパテみたいに塗りすぎだし、つけマツ毛はサイズがあってないしアイシャドウも濃すぎ。オマケに頬紅はぐりぐりのウズマキで、ルージュは思いっきりはみ出してガマガエルみたいになってしまった。
そんなルルーの姿を見て、パパや親戚のオジサンなんかは大爆笑してたケド、ただひとり、ママだけは別。優しいママは、とてもサイケデリックなルルーの顔を直しながら、お化粧のしかたを教えてくれた……。このときからルルーは、ママのようにキレイで優しいレディになるぞと心に誓ったのだった。
もちろんいまは、ママの手ほどきや本とかで勉強したおかげで、お化粧のウデもだいぶレベルアップ。毎日毎朝、レディのさりげない身だしなみ程度のお化粧を、ものの数分ですませてしまえるほどになった。といって、ルルーがママのようなレディになれたかどうかは、また別のハナシ。
「ん～……」
マツ毛を整え終えたルルーは、顔の角度をあちこちに変えて、髪のウェーヴの具合やTゾーンのテカりなどを最終チェック。
いつもより一生懸命といっても、いつもより濃いお化粧をしてるってワケじゃあない。いつ

もよりもほんのちょっぴり濃いめのお化粧を、いつもよりもていねいにやってるだけ。もう厚化粧はコリゴリだし、「ルルーはもともとがキレイだから、お化粧は薄いほうがいいのよ」というママのアドバイスもあるし……。

「よしっ！」

最終チェック完了！　ドコから見てもカンペキ！

キリッとした顔の自分を見つめて、ルルーは気合いをいれた。

「さてと……」

ルルーは心を躍らせて、カガミの前に置かれたルージュを手に取った。お化粧の最後の仕上げをつとめるのは、こういうときのタメにとっておいた、真新しいルージュ。カラーは、まるでいちごミルクのように、ほんのりと甘くてあたたかいカンジのピンク。

「…………」

カガミを見つめて、ルルーはていねいにていねいにルージュを引いた。すると、とろけそうなサクラ色が、ルルーのやわらかなくちびるをおおっていく。

やがてルルーのくちびるは、キラキラとしてみずみずしいピンク色に染まった。

「…………」

じっ……。

ルージュをコトリと置いて、ルルーはカガミの世界の自分を見つめる。

お化粧の度合いそのものは、いつもとそんなに大差はない。だけど、見る者に「おっ、いつもとはなんか違うぞ」と思わせるナニかがある。そのナニかが、いつもよりていねいにお化粧したところであり、その証し。

我ながらパーフェクトな仕上がりだわ。うん、イケてるイケてる。

なぁんて自画自賛しながら、ドレスのほうも念入りにチェック。

水晶色の超お気に入りのドレスは、明かりをキラキラと反射して輝いている。それがくちびるのキラキラと、いいカンジにマッチング。

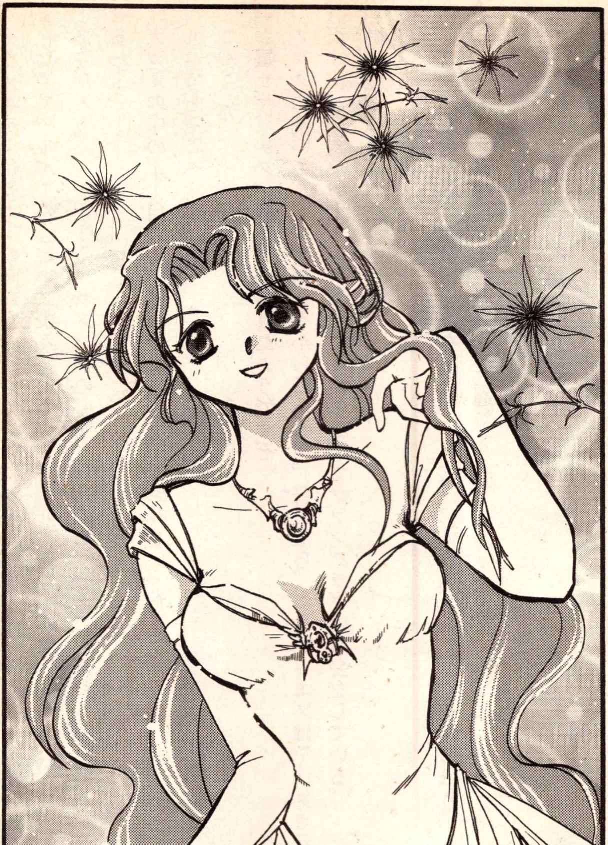
このドレスも、こういうときのためのとっておきだ。キラキラしているのは最高級のシルクがふんだんに使われてるからで、それをさらに、ママからもらった金のブローチやネックレスがキラキラ感を効果的に演出。そして、大きく開いた肩口や胸元、動きやすさも考慮されたスカートのスリットが、ナイスなルルーのバディをさりげなぁ〜く露出している。

こんな〝とっておき〟のルルーを見て、クラッとこないほうがおかしい。ミノタウロスや、ファンクラブのメンバーならイチコロだ。

サタンとて、美的感覚そのものは普通のヒトたちと大差はない……はず。たとえ一瞬でも、〝とっておき〟のルルーの姿に眼を奪われるに違いない。

「………」

がんばってね、ルルー……！　あなたの想いがサタン様に伝わるように祈ってる……。



そう、ルルーはカガミの向こうの自分にいい聞かせた。すると、それがカガミの自分のセリフとなって、ルルーの心の中に染みこんでいく。

ありがとう、ルルー……。サタン様の心を、ほんのちょっとでもあたくしに振り向かせてみせるわ……！

カガミの中の——自分の中の自分に、ルルーはお礼をいった。

ちょうどそこへ……、

こんこん。

「お嬢サマ、サタン様がまいられたようですぞ」

ノックに続いて、ドアの向こうからじいの声。普段なら、こういうモノはミノタウロスの役目だけれど、彼はいま、テイカテイカ村の広場でファンクラブの集会をしている。

「御支度のほうはお済みですぞ？」

「ん、いま行くわ」

ルルーは鏡台からはなれ、自室を出た。そして、じいのエスコートで玄関のほうへと向かう。

それとタイミングをピッタリあわせたかのように、

ゴン、ゴン……！

玄関のノッカーがおごそかに鳴り響いた。

「お嬢サマ、心の準備はよろしいですぞ？」

いいながら、じいはすばやく玄関のドアへと向かう。
「……………」
ごっくし。
ドアの正面に立ち、ルルーは軽く息をのむ。ちょっちキンチョーの一瞬。はたして、どんな顔でサタンを迎えたら……？
なんて悩む間もなく、
「どうぞお入りくだされ」
ガチャリ。
と、じいは玄関を開けた。その途端……！
バァッ!!
トツゼン、おっきな花束が飛びこんできた！
「きゃっ!?」
てっきりサタンが現れると思っていたルルーはビックリ！　そして、その驚きがまだ消えないところに……！
『ハロ――っ！』

バァッ！

今度は花束の中から、サタンの顔が出現した。

「きゃぁっ!!」

ルルーはダブルのビックリ!!

『はははははははははは……！　ルルー、ビックリしたか？』

と、ホールといってもいいくらいに広い玄関に、サタンの笑い声がこだまする。

「………」

落ち着いてよく見ると、ひと抱えもあるような花束を持ったサタンが、ルルーの眼の前に立っていた。サタンは玄関が開くと同時に花束を前にして飛びこみ、そしてその花束に顔を突っ込んで、ルルーの前に現れたのだった。

「も〜、サタン様ったら……。イキナリおどかさないでほしいですわ……！」

『はははは……、すまんすまん。余興だと思って許してくれ』

「しょうがないですわねぇ……」

くすくすくす……。

サタンの笑いにつられたかのように、ルルーもおしとやかに笑った。

脇に控えているじいは、互いに笑う美男美女のツーショットに、いつものうなずき。そして、ふたりの笑いがおさまる頃を見計らって、

「ささ、こちらへどうぞ」
じいはふたりをうながした。
『うむ。その前に……』
サタンは、手にした花束をルルーに差し出す。
『今晩の礼だ、受け取るがいい』
「まあ★　そんなにお気づかいをなさらなくても……」
いいながら、ルルーはおっきなおっきな花束を受け取った。
「でも、とっても嬉しいですわ」
『まあ、オレのほんの気持ちだ。こっちから勝手にお邪魔しておいて、手ぶらというのもナンだしな……』
不意に、サタンはコトバをのんだ。
「サタン様、どうしたんですの？」
『い、いや……』
首をかしげて問いかけるルルーに、サタンは急にドギマギしながら答える。
『る、ルルーって……』
とっても珍しい、サタンのはにかみ。
「あたくしって……？」

『こんなにキレイだったのかと思ってな……』
「まあ……★」
と驚きの表情を見せつつも、ルルーは心の中でガッツポーズをした。
お化粧作戦は大成功！　ツカミはオーケー！　ってカンジ。
「ありがとうございます。お世辞でも嬉しいですわ」
『いや、お世辞なんかじゃないぞ……。うん、キレイだよ、うん……』
「おふたりとも、食堂のほうにまいりましょうぞ」
ミョーに照れまくるサタンに、じいが絶妙のタイミングで助け船をだした。
『そ、そうだな……。オレは腹が減った。それが目的でココにお邪魔してるワケだしな』
そして3人は、屋敷の奥の大食堂へと歩き出した。
ルルーの屋敷は、ちょっとした貴族のお城並みに広い。玄関から食堂に行くだけでも、ちょっとした運動になる。ルルーがちっちゃい頃、屋敷の中だけで充分なジョギングができたほど。
そんな屋敷に使われている石材、ドアの木材、じゅうたんや燭台とかの調度品などなど、屋敷のものすべてが、ひとめで最高級の品だとわかるものばかり。それを、いちいちていねいに使って、屋敷が構成されている。これほどまでに豪華な屋敷は、ちょっと見ない。
『ふ〜む……』
さっきの照れまくりをようやく消したサタンが、タメ息をつくようにいった。

『なかなかにスゴイ屋敷だな』
「お褒めいただいて、とっても光栄ですわ」
『親御さんもいっしょに住んでるのか？』
「基本的にはそうなんですけど、パパとママは仕事がいそがしくて、滅多に帰ってこないんですの」
『それではさみしかろう』
「ちっちゃい頃からそうでしたから、もう慣れっこですわ。それに、ミノタウロスや執事のじいもおりますし」
『ふむ……』
　サタンは、ふと考えこむ。
「どうかなさいました？」
『いや……。ルルーには世話になりっぱなしだからな、ついでに親御さんにもアイサツをと思っていたのだが……。ま、それは次の機会にしよう。親御さんが仕事から帰ってきたら、すぐに知らせてくれ』
「は、はい……！」
　イキナリのサタンの申し出に、ルルーは驚きを隠せない。でもその一方で、心の中の期待が大きくふくらんでいく。

サタン様が、あたくしのパパとママにアイサツなんて……。これは、ひょっとするとひょっとするかも……★

アイサツと同時に婚礼の申し出をして、晴れてルルーとサタンはゴールイン！　みたいな★

ルルーは、夢への手がかりをガッチリとつかんだような気がした。

「ところでサタン様……」

そういうおっきな期待はあとに取っておくことにして、ルルーは話題を変えた。

「どうして、イキナリあたくしのお屋敷に……？」

『手紙にも書いたが、ルシファーの料理に飽きたのが主な理由だ。それに、以前に味わったお前の手料理を、また食いたくなってな』

「そういっていただけるなんて、ルルーは幸せですわ」

『まあそれから、しばらくはアルルやルシファーたちとこの島に住むことになってな』

「ルシファー先生からお聞きしましたわ」

『そうか。……で、この島にはお前の家もあることだし、アイサツのひとつもしておくのもよかろうと思ったのだ』

「そうでしたの……。もしよろしければ、いつでも遊びに来てくださいね」

『うむ、そうさせてもらおう』

「あ……、ルシファー先生といえば……」

『どうした？』
「先生から伝言をあずかってますわ。〝解呪の巻物〟をなにに使ったのかを、あとで報告してくれと」
『わかった。それはオレが責任を持って処理しよう』
「……？」
なんだか、いつものサタン様と違うみたい……。
ふと、ルルーはいぶかしんだ。今夜のルルーはひと味違うケド、サタンのほうもいつもと違うってカンジ。
いつものおちゃらけたカンジはあんまりないし、口調と物腰は、まさに貴族といったふうの礼にかなっている。そしてなによりもルルーを不思議がらせるのは、ルシファーの伝言を素直に受け取ったコト。いつもなら『ルシファーのコトなんぞほっとけほっとけ』みたいに、ヤケに意固地になってるところなのに……。
とにかく、いまのサタンには悪魔的な荒っぽいカンジが消えている。まるで、双子の弟のルシファーがサタンの真似をしてるカンジ。あるいは、ルルーの夢によく出てくる、優しくてカッコイイ理想のサタンのよう。
も、もしかして……、ホントのホントに夢がかなうの……？
ずん、ずん、ず〜ん……！

ってカンジで、心の中の期待が、どんどんどん大きく成長していく。

『どうした？』

「え……？」

純粋で繊細な心に、まるで天使の矢のように突き刺さるサタンの視線に射抜かれて、ルルーは我にかえった。

『オレがココに来るのが、そんなにフシギか？』

「そ、そんな、とんでもない……！　わざわざおいでくださるなんて、もったいないくて、とっても嬉しいコトですわ」

いつものサタンらしくない行動だから、フシギといえばフシギだけれど……。

「ささ、こちらですぞ」

ガチャリ。

今度はルルーへの助け船のようなタイミングで、じいがふたりを導くようにドアを開けた。

その向こうにあるのは、いつもルルーたちが食事をしてる大食堂。

『おおっ！』

大食堂の光景を見て、サタンは純粋な歓喜の声をあげた。

とにかく、中央の大きなテーブルにかけられた、純白のテーブルクロスがまぶしい。もちろん、カレー皿やサイドディッシュの料理など、夕食の準備がバッチリされている。そして、そ

れらを効果的に演出している、燭台や花ビンなどの調度品や食器類、生けられた花々たち。

王侯貴族の食事というほど豪華ではないけれど、〝心づくし〟というあたたかい感覚が、じんじんと伝わってくる。

『これはすばらしい……！』

「サタン様にお褒めいただくなんて、がんばって飾ったかいがありますわ」

『しかし、まんざら知らない仲ではないのだから、わざわざこれほど豪華にする必要はなかったと思うぞ。豪華すぎて、オレにはもったいないくらいだ』

「でも、せっかくサタン様が来てくださるんですもの。みっともないところはお見せできませんし、これくらいしないとバチが当たりますわ」

『ふむ……。毎日コレだったら、毎日遊びに来てもいいな』

「まぁ、サタン様ったら……★」

ルルーとサタンは、また笑いあった。花束をはさんで微笑むふたりの様子はまるで、王子とお姫様が出てくる、おとぎばなしのラストシーン。

「さあどうぞ。サタン様、おすわりになって」

笑いがおさまったところで、ルルーはサタンにイスをすすめた。

『うむ、ありがとう』

サタンが主賓席についたところで、ルルーは用意しておいたエプロンをかける。眼にイタイ

ほど真っ白なエプロンは、まるで純白のウエディングドレスのよう。そんなルルーのかたわらには、いつのまにか、カレー鍋とゴハンのおひつを乗せた台車がある。もちろん、じいがすばやく用意したものだ。

『ほう、うまそうだな』

テーブルに並べられたサイドディッシュの品々をひとながめして、サタンはいった。

カリフラワーとトマト、ポテトやなんかを使って、バロメッツのカタチに仕上げた、名づけて〝生バロメッツ〟。ダイコンをくりぬき、中にサラダっぽく仕上げたキュウリやツナをつめてパキスタの姿に似せた〝パキスタの活け造り〟。おナスの中に、それの実とヒキ肉やタマネギの炒めものをつめて、メガネのカタチにギョーザの皮をはりつけた〝ゆうことなーす〟。

それらがメインディッシュのスペースを囲むようにして並べられ、おいしそうな香りをただよわせている。それが、メインのカレーの香りとうまくマッチングして、いいカンジ。

『ぜんぶルルーが作ったのか？』

「ええ。サタン様のために、ウデによりをかけましたわ」

ぺたぺたとカレー皿にライスを盛りながら、ルルーは応える。そして、いいニオイのカレーを、ライスの上に景気よくかける。さらに、半分に切ったうずらのタマゴをふたつ、キミが上になるようにして乗せればできあがり！

「さあどうぞ、サタン様」

『おお、なつかしの〝ぷよカレー〟か』

それはまさに、皿に乗ったカレー色の〝ぷよぷよ〟そのもの。山盛りのライスとカレーが身体で、うずらのタマゴが眼をあらわしている。ルルーがサタンといっしょに暮らしてたころ、よく作っていたメニューだ。

そしてルルーは、自分のぶんとじいのぶんを盛りつけ、エプロンを外してサタンの向かいの席にすわる。いつのまにか3人分のグラスには、ほどよく冷えたミネラルウォーターが注がれていて、水差しを置いたじいがイチバン最後に席につく。

「では、いただきましょう、サタン様」

『うむ……。いっただっきま——っす！』

アルルのような声とともに、サタンはぷよカレーをスプーンですくった。

「…………」

その様子を、ルルーはじっとみつめる。キンチョーの一瞬。

カレーを食べたサタンの口から、いったいどんなコトバが出てくるか……！

『ぱくっ！』

ギ音を口に出して、サタンはカレーをほおばった。

「サタン様、お味のほうは……？」

とルルーが問いかけた次の瞬間……！

『————————————————っ!!』

じたばたじたばたじたばた……!

スプーンを口にふくんだまま、サタンはイキナリ声にならない声をあげてもがきはじめた。

「さ、サタン様……、どうなさいましたの……?」

大騒ぎするほどオイシイ……というワケではなさそう。明らかに様子がおかしい。

『————————————————っ!!』

じたばたじたばたじたばたじたばたじたばたじたばたじたばた……!

サタンのバタつきは、しばらく続いた。だんだん、温度計のようにサタンの顔が下のほうから真っ赤に染まっていく。

そののち、

ピタッ!

とトツゼンに止まった。

「さ、サタン様……?」

ルルーは問いかける。しかしサタンは動かない。

やがて……、

くら〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜……っ。

サタンの身体は、イスごと後ろに大きくゆらぎ、

バッタ――――――ンッ！

そのまま床にブッ倒れる！

「きゃああっ！　サタン様!!」

ルルーは、あわててサタンのもとに駆け寄った。サタンは、まるで踏みつぶされたカエルみたいに床に転がって、眼をまわしている。まさに〝ばたんきゅ～〟状態。

「サタン様！　しっかりして！　サタン様ぁっ……!!」

すがるように、ルルーはサタンをゆさゆさする。

『う～ん……』

だけど、サタンが眼をさます様子はいっこうに現れない。

「お嬢サマ、動かさないほうがよろしいですぞ」

頼りがいのある毅然とした口調で、じいはいった。

「お部屋の用意はすでにしてありますゆえ、まずはそちらに運んだほうがよろしいですぞ」

「う、うん……」

とルルーがうなずくと同時に、

がちゃり。

「ただいまっス」

集会から帰ってきたミノタウロスが、食堂に入ってくる。まさに絶妙のタイミング！

「いいところに帰ってきたわ、ミノタウロス！」

「ぶも？」

「サタン様を別室にお運びしてちょうだい！」

「ど、どうしたんスか？　ルルー様」

「いいから早く!!」

「わ、わかりました！」

ミノタウロスは、力なく眼を回しているサタンを、即座に軽々と持ち上げた。そして、じいが支度をととのえておいた、お客さん用の寝室に運ぶ。

そのあいだにルルーは、洗面器に氷水、それからタオルを用意。それをサタンのいる部屋に持ちこんで、氷水にひたしたタオルをサタンのおデコにそっと乗せた。その間、約20秒。倒れた相手がサタンでなければ出せないタイムだ。

『う〜ん……、う〜ん……』

サタンの眼からは、もうグルグルのうずまきは取れているけれど、うめき声をあげるばかりで、いっこうに目覚める様子はない。

「サタン様……」

『う〜ん……、う〜ん……』

冷やしタオルでルルーがぬぐってあげても、サタンの顔には次から次へとアブラ汗がにじんでくる。まるで、重い熱病にかかってしまったというカンジ。

「サタン様に、いったいなにが起こったというの……？」

「お嬢サマ、じいが考えますに……」

コホン、と咳払いをして、ミノタウロスといっしょに後ろで控えていたじいがいった。

「サタン様の急変は、お嬢サマのカレーをお食べなさったと同時に起こりました。となると、まず、お嬢サマのカレーの中に、サタン様の毒となるものが入っていた可能性がありますぞ」

「そ、そんな……!!」

ときどき、じいは冷たい事実をいう。ニンジャとして、感情を殺して活動してた頃のなごりのように。

「あ、あたくしは普通にカレーを作っただけよ……！　それに、あたくしがサタン様に毒をもるワケないじゃない……！」

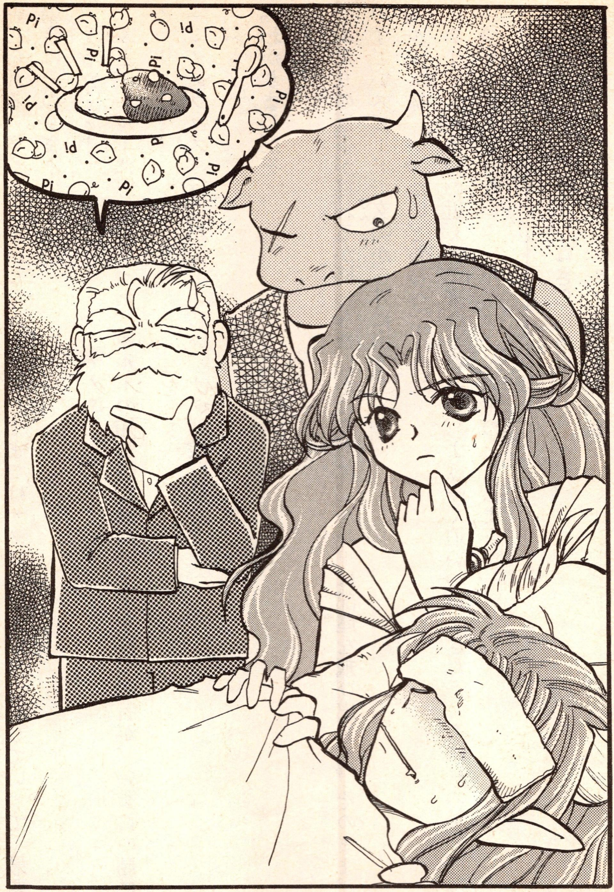
「そうっスよ！　じい殿、ルルー様になんてコトをいうんスか!?」

ルルーの反論に、ミノタウロスも同調。

それに対して、じいはうんうんとうなずいて続ける。

「このじいも、それはよくわかっておりますぞ。お嬢サマのカレーが原因でないとなると、サ

タン様の急変は、あのとき偶然(ぐうぜん)に起きたということになりますぞ」
「…………」
偶然にしては、あまりにもタイミングがよすぎる。だけど、カレーを作ったルルー本人に身に覚えがないのだから、やはりトツゼンの出来事なのか……？　だいいち、ルルーにとっては身に覚えがないどころか、サタンに毒をもるなんて考えられないコトだ。
「いったい、サタン様にナニがあったんスかねぇ……」
「このじいにも、皆目(かいもく)見当がつきませんぞ」
ミノタウロスとじいが、口々にいう。
「そんなコトより、いまはサタン様の具合を治(なお)すのが先決よ！」
「そうっスね」
「じいが思いますに、やはりお医者様に診(み)てもらうのが最良ですぞ」
「お医者様……」
といっても、魔界(まかい)の者であるサタンを治せる医者が、この島にいるかどうか……。だいたい、ルルーを始めとして、この島に住んでる人間たちは、健康しまくりでカゼひとつひいたコトのない連中ばかり。
『う〜ん……、う〜ん……』
心なしか、うめき声をあげるたびにサタンの気がどんどん弱くなっていくようにルルーには


Pi
Pi
Pi
Pi
Pi
Pi
Pi
Pi
Pi
Pi

感じられる。早くなんとかしないと、このままではサタンはどんどん衰弱していって、最悪の場合はそのまま……！
「そうだ……！」
ふと、ルルーは思い当たった。ルルーの知る限り最高のウデを持つ医者が、いまこの島にいるコトに……！
「ミノタウロス、行くわよ！　じい、サタン様を見てて！」
「ぶも？」
「わかりましたぞ」
ダッ!!
ふたりの返事が終わるか終わらないかのうちに、ルルーは部屋を飛び出した。そのまま、ものすごいスピードで玄関から外に出る。
「ルルー様、いったいどちらへ……？」
テイカテイカ村の近くまで来たところで、ようやく追いついてきたミノタウロスがいった。
「決まってるじゃない！　ルシファー先生のところよ！」
ダ――――――――ッ!!
いうが早いか、ルルーはさらにスピードアップ。
ルシファー先生なら、サタン様をきっと治してくれる……！

そんなゼッタイの確信が、いま、ルルーの頭の中を駆け巡っていた。なにしろ以前は、魔導学校の講師と保健医をいっしょにやっていたくらいだから、ウデ前のほうはオリガミつき。ただひとつモンダイがあるとすれば、サタンとルシファーのふたりは、兄弟仲があんまりよくないってコト。最悪の場合、ルシファーはサタンの治療をイヤがるかもしれない。

でも、血を分けたお兄さんが倒れたっていうのにそれを治療しないなんて、ルシファー先生はそんな冷たいヒトじゃないわ……！

ときとしてルシファーもサタンに似た冷たい側面を見せるけれど、ルルーはそう信じていた。

待っててくださいね、サタン様……！　ルシファー先生にお願いして、そのお身体を治していただきますわ……！　そして、またゲンキな笑顔をルルーに見せてください……！

ダ――――ッ!!

サタンへの想いを胸に、そしてミノタウロスとともに、ルルーは満月の見守るなかをひたすら走り続けた。ふだんから鍛えてるおかげもあって、疲れなんかゼンゼン感じない。

ダ――――ッ!!

夜のテイカテイカ村を抜け、水面にお月サマをうつす〝落天湖〟のそばを駆け抜け、ルルーはイル・シュ・アの塔方面に向かってイッキに走る！

やがて、塔付近の森に到着。この森のどこかに、ルシファーの別荘があるはず。

ガサガサガサ……！

走る速度を落として森の中に入っていくと、もう枯れて落ちた木の葉が、ルルーの足元で音を立てる。

ガサガサガサ……！

ほどなくして、奥のほうで光る、民家のものらしい明かりを発見。

「あれね……！」

ザァッ！

ルルーとミノタウロスは、その光めがけてダッシュ。やがて、ロッジ風の質素な家が見えてくる。

「ルシファーせんせ――っ！」

この家がルシファーの別荘だと、ルルーは信じて疑っていない。ルルーはダッシュの速度を落さず、

バァンッ！

木のドアをノックもせずに勢いよく開けた。

「わぁっ!?」

果たしてルルーの信じる心は神様に通じ、ドアの向こうにあったのは、トツゼンの闖入者に驚くアルルとカーバンクル、そしてルシファーの顔。

「ルルー！」
『どうしたのだ？　そんなにあわてて』
ルシファーとアルルのふたりは、テーブルをはさんで夕食をとっているところだった。もちろん、メニューはカレーライス。
「お食事中にゴメンなさい……！」
アイサツするのももどかしく、ルルーはミノタウロスをしたがえて、ルシファーの前につかつかと歩み寄る。
「ルシファー先生、サタン様がタイヘンなんです！　スグ来てください！」
『サタンが？　ヤツになにかあったのか？』
「とにかくタイヘンなんです！」
『それはわかったが……、こっちも見てのとおり食事中だ。終わるまで待てないか？』
「そんな悠長(ゆうちょう)なバアイではありませんわ！　早くしないとサタン様が……」
ルルーの脳裏に、屋敷(やしき)でうなされているサタンの姿がよぎる。
「サタン様が死んじゃう……！」
「ええっ!?　そりゃタイヘン！」
すがるような、いまにも泣きそうなルルーのコトバに、ルシファーではなくアルルが驚いた。
「ルシファー先生、なんとかしてあげて！」

『うむ』

すっく、とルシファーはカレー皿を置いて立ち上がる。

『ルルーくん、サタンはキミの屋敷にいるのだな？』

「は、はい！」

『よしわかった。ルルーくん、ミノタウロス、私につかまりたまえ』

「え……？」

『ワープの呪文を使う。そのほうが、走るよりもはるかに早い』

「わかりました」

ルルーとミノタウロスは、指示にしたがってルシファーのローブをつかんだ。

『行くぞ！　ワープ！』

ビュオンッ！

イキナリ、ルルーは投げ飛ばされたような感覚に襲われた。しかし、すぐにもとの感覚が戻ってくる。

そして気がつくと、ルルーたち3人は屋敷の玄関前に立っていた。

『ルルーくん、さっそくサタンのところに案内してくれ』

「はい！」

3人は屋敷の中に入り、駆け足でサタンの部屋へ向かう。

『う〜ん……、う〜ん……』

そこには、ずっとうなされっぱなしの哀れなサタンと、じっと見守るじいの姿があった。

『むう……、確かにこれはタイヘンだ』

兄の容体をひとまずながめたルシファーがいう。

『ルルーくん、いったいどういう状況でサタンは倒れたのだ？』

「あたくしのカレーを口に入れたとたんに、サタン様は苦しみだして……、それから、そのまま倒れてしまったんです……」

『そうか……』

ルルーの説明を聞きながら、ルシファーは、サタンの脈をはかったり、まぶたを開けて瞳の様子を見たりした。

『すまんが、部屋の外に出ていてくれないか？』

「わ、わかりました……」

一抹の不安とともに、ルルーはミノタウロスたちとともに部屋の外に出た。バタンというドアの音が、なんだか棺桶を閉めた音に聞こえる。

「………」

ルルーはかたずをのんでじっと待った。ルシファーが良い知らせをもってドアを開けるのを。

『ふ〜む……』

ガチャリ。

しばらくして、ルシファーが腕を組んで考えこみながら出てきた。ヤケに神妙な表情をしているのが、ルルーの不安をさらにかきたてる。

「先生、サタン様は……？」

『これは、私の手には負えないかもしれん……』

「ええっ!? ど、どうしてですの!?」

『魔界の者も病気にかかることがあるのだが、人間の場合とは症状が違う』

「そ、それで……？」

『残念ながら、私がこれまで診てきた患者の中で、こんな症状をしている者はいなかった。したがって、どのように治療したらいいのかが見当がつかん』

「そ、それじゃあ、サタン様はこのまま……!?」

ルシファーほどの名医がサジを投げたということは、棺桶の中に入ったのに等しい。だけどルルーは、サタンと永遠に別れるのはイヤだという想いだけで、必死にくいさがった。

「もう、あたくしたちにはサタン様を助けることはできないんですの……!?」

『いや待て、古い書物でこれと似たような症状のコトを読んだ記憶がある……』

ルルーの眼にも、ルシファーがいっしょうけんめい記憶の糸をたどっているのがわかる。ルルーも愛するサタンのために必死なら、ルシファーも兄のために必死なのだ。

『そうだ！　思い出したぞ！』

やがてルシファーは、パシン！　と手を打った。

『雲樹の実だ！』

「雲樹の実……？」

『そうだ。魔界の者が雲樹の実を食べたときの様子に似ている』

「で、でも、雲樹の実って、食べるとゲンキが出るって……」

昼間の出来事を思い出しながら、ルルーはいった。シェゾが、料理にでも使えといって雲樹の実をくれたときのコトを……。

『それは、人間が食べたときのハナシだ。魔界の者が食べると、効果が逆に作用する。つまり、雲樹の実がエネルギーをどんどん吸収し、食べた者はやがて死にいたってしまうのだ』

「そ、そんな……!!」

ガガ――――――ン!!

ルルーの身体を、落雷のような大ショックが駆け巡った。

はからずも、じいの最初の予想が大当たり。ルルーにその気はなかったけれど、シェゾのコトバを真に受けてしまい、その結果としてサタンに毒をもってしまっていたのだ！　しかも、致命的な猛毒を……！

『まさかルルーくん、サタンに雲樹の実を食わせたのか？』
「先生!!」
ルシファーの問いに答えるかのように、ルルーは恩師にすがりついた。
「あたくしにできることならなんでもします！　どんな罰でも受けます！　だから……！」
もう少しで、ルルーの眼から涙があふれ出そう。だけど、強気な格闘家であるもうひとりの自分が、まだそれをなんとか止めている。
「だから、サタン様を助けて……!!」
『雲樹の実を食べさせるとはうかつだったな、……とルルーくんを責めるのは酷か。もうこの地上に雲樹はほとんど残っていないし、文献もごくわずかだからな』
「そんなことより先生、早くサタン様を……！」
『わかっている。原因がわかれば、おのずと解決方法も導き出される。だが、そこで新たな問題が生じるのだ』
「え……？」
『雲樹の実によって失われたエネルギーを回復させるには、〝ルベル・クラク〟の力がどうしても必要なのだ』
「ルベル・クラク……？」
『キミも知っているだろう？　カーバンクルの額にうめこまれている宝石だ』

「ってコトは、カーバンクルを連れてくればいいんですね？」
　とルルーは走りだそうとするが……、
『待つんだルルーくん』
　ルシファーがルルーの手をつかんで引きとめた。
『ルベル・クラクの力を解放するには、カーバンクルの身体（からだ）からそれを外（はず）さなければならない。だが、ルベル・クラクはカーバンクルの命の源（みなもと）。心臓といっても過言ではない。つまり、カーバンクルから宝石を外すと、今度はカーバンクルが死んでしまうのだ』
「じゃ、じゃあ、どうすれば……！」
『もちろん、カーバンクルの死を止める方法がないわけではない。ルベル・クラクを外しているあいだ、誰（だれ）かがカーバンクルに気のエネルギーを与（あた）え続けていればいいのだ』
「だったら、あたくしがそれをやりますわ！　気のパワーなら誰にも負けない自信がありますし、あたくしのせいでこんなコトになってしまったんですもの……！」
『いや、そんな安請（やすう）け合いをしないほうがいい』
「どうしてですの!?」
『キミがカーバンクルに気を与えるということは、今度はキミのエネルギーが失われるということだ。治療（ちりょう）にはどれくらい時間がかかるかわからないし、たとえ短時間でも相当量のエネルギーを消失することになる。おそらくキミは——いや、確実にキミは……、死ぬぞ』

「ええっ!?」

ルシファーの最後のコトバで、ルルーの身体は凍りついた。このまま手をこまねいているだけで、確実にサタンと永遠の別れをすることになる。サタンを助けようとしても、ルルーがこの地上からいなくなるだけで、結果は同じ。まさに八方ふさがりの状態。

だけどルルーは、すぐに答えをはじき出した。

どうせ結果が同じなら……!

「………」

ダッ!!

自分の出した答えにしたがって、ルルーはイキナリ駆け出した。

「ああっ、ルルー様!」

「お嬢サマ!」

背後でミノタウロスやじいの声がするけれど、それを無視してルルーはふたたび外に出、ルシファーの別荘へ一直線!

サタン様をゼッタイに死なせやしないわ……! 伯爵じゃないけれど、それでこの身が滅んでもかまわない……! サタン様のいない世の中なんて、生きてる価値がないもの……! あたくしは、サタン様への愛の深さなら誰にも負けないわ……! それを、いま証明してみせるわ……! パパ、ママ、親不孝のルルーを許して……。じい、ミノタウロス、いままでありが

とう……。
そんな想いで走るルルーを見つめるのは、空にぽっかりと浮かんだお月サマだけ……。
やがてルルーは、ふたたびルシファーの別荘に到着した。

バタ――――ンッ！

とドアを開けると、アルルがまんまるの大きな眼を見開いていた。夕食の片づけをしてるような体勢を凍りつかせたままで。
「ど、どうしたのルルー!?」
ほんの数瞬ほど眼をパチクリさせたのち、アルルはいった。
「またなんかあったの？」
「アルル、カーバンクルはどこ!?」
「ここで寝てるよ」
アルルが指差したほうを見ると、確かにカーバンクルがテーブルの上で気持ちよさそうに眠っている。お腹はパンパンにふくらんで、満足そうな笑みを浮かべている口のまわりはカレーだらけ。
「今度はナニ？　カーくんに用事なの？」
「そーよ！」

がしっ！
いうが早いか、ルルーはカーバンクルをひっつかんだ。そして、そのまま別荘を出ようとするけれど、
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
あわててアルルがルルーの腕(うで)をつかむ。
「カーくんをどうする気？」
「うっさいわね！　あなたには関係のないコトよ！」
「なんでぇ!?　そんないい方はないいんじゃない？」
「いいからその手を放(はな)しなさい！」
「イヤ！　どうしてカーくんを連れてくのか話してくんなきゃヤダもんね！」
「あ――っ、もう！　あたくしは忙(いそが)しいのよ！　いいこと？　1回しかいわないから、よく聞いてなさい！」
ルルーは、コトの顚末(てんまつ)を手短(てみじか)に話した。このままではサタンが死んでしまうコト、サタンを助けるためにはカーバンクルを犠牲(ぎせい)にしなければならないコト、そのカーバンクルを助けるためには、誰か――ルルーが犠牲にならなければいけないコトを……。
「そ、そんな……!!」
ルルーの予想通り、アルルはまるで自分のコトのように驚(おどろ)いた。そのショックで、ルルーの

手がするりと抜ける。
「理由は話したわ！　じゃあ、あたくしは行くからね！」
「ちょちょちょ、ちょっと待ってってば！」
がしっ！
アルルは、今度は両手でルルーの手をつかみ、綱引きのときみたいにふんばった。
「なんなのよ！　いーかげんにしないと、さすがのあたくしもホンキで怒るわよ！」
「怒られてもいーもん！　この手はゼッタイにゼッタイに放さないもんね！」
「じゃあ、サタン様が死んでもいいっていうの!?」
「それもイヤだけど、ルルーだって死んじゃうかもしれないんでしょ!?　友達がそんなコトになってるのにそれを傍観してるなんて、ボクにはできないよ！」
「あたくしはいいっていいってるの！　だいたい、あたくしはあなたの友達になった覚えなんてないわ！　だから放しなさい！」
「イヤ！」
「放して!!」
「ヤダ！」
「放しなさい!!」
ふたりは、しばらくそのセリフを繰り返しながら綱引きをした。その拍子に、ルルーの手か

らカーバンクルが離(はな)れて、床(ゆか)に落っこちてしまう。だけどカーバンクルは、それにもめげずに眠(ねむ)りまくり。

「じゃじゃじゃ、こうしようよ！」

やがて、アルルはいった。

「なによ!?」

「ボクとふたりで、カーくんにパワーをわけてあげるの。そうすればこっちのエネルギーが減(へ)るのを半分ずつにできるから、みんな無事にすむかもしれないよ」

「………」

ブゥンッ！

ルルーはイキナリ無言になって、アルルにつかまれた腕(うで)を思いっきり払った。

その勢いで、アルルの手があっさりと離れる。格闘技(かくとうぎ)で鍛(きた)え上げたルルーがホンキでかかれば、こんなコトは雑作(ぞうさ)もない。

「わぁっ！」

どてっ。

勢いあまってアルルはバランスをくずし、その場にしりもちをついてしまう。

「いったぁ～～～……！　そんなに力いれなくたっていいじゃない！」

「……………」

だけど、転んだり文句をいったりするアルルの姿は、いまのルルーには見えない。音と声が耳に入ってくるだけ。

「ど、どうしたの？　ルルー？」

「……………」

つつ――――っ……。

アルルの姿が見えない代わりに、ルルーのほほを、なんだかあたたかい液体がつたっていくのを感じる。

「どうして……」

ぱたたっ……！

ルルーが口を動かすと、あたたかい液体が次々と床に落ちていく。

「どうして、あなたはそんなにお人好しなの……？」

ぱたっ……、ぱたたっ……！

さしものルルーも、もう次々とあふれ出てくる涙を止められない。

伯爵にサタンをあきらめろといわれたときも、サタンが死にそうだと聞いたときも、ずっとガマンしつづけてきたのに……！　だけどそのガマンも、もう限界。

「ふたりでカーバンクルにパワーをあげればいいなんて、誰だってスグわかるわよ……！　そ

うすれば無事ですむかもしれないけど、失敗したらどうするの……？　あなたも死んじゃうかもしれないのよ……!?　無事なのは、あたくしだけかもしれないし……」
アルルも、それくらいは理解しているはず。だけどアルルは、それをわかっていても、自分が犠牲になるコトを平気で「やろう」とかいってしまう。そんなアルルの純粋さが、ルルーのガマンを打ち砕いたのだった。
アルルの優しさがとっても嬉しくて、優しさを素直に表現できるアルルがうらやましくて、アルルみたいに素直になれない自分がくやしくて、悲しくて、せつなくて……。
心の中でうずまくいろんな感情が、あとからあとからルルーの涙をあふれさせていく……。
「あなたはあたくしのライバルなのよ……!?　もっとライバルらしくしてくれなくちゃ、困るのよ……！　あたくしがいなくなってせいせいするとか、それくらいの皮肉なセリフをいったらどうなの……？」
「ルルー……」
「たとえサタン様とあたくしが無事でも、ライバルのあなたがいなくちゃ、なんの意味もないのよ……！　だって……、ライバルみたいな、妹みたいなあなたが好きなんだから……！」
「……………」
心の底から出たルルーの素直なセリフに、アルルは発するコトバもない。
しばし、ルルーのすすり泣く声と、カーバンクルの寝息だけがその場を支配する。

と、そこへ……！

「どうしたのだ？　ルルーくん、なにがそんなに悲しいのだ？」

トッゼン、聞き覚えのある男のヒトの声が、ルルーの耳に飛びこんだ。

「あ……!!」

アルルが短い叫び声をあげる。ルルーは涙をぬぐって、アルルの視線を追った。

その先にあったのは、なんと……！

「ああっ……！」

闇夜をバックに入り口に立っている、シェゾと吸血伯爵の姿!!

「その様子だと、とても悲しいコトが起こったようだな……」

まったく悪びれもせずに、キザにキメて伯爵がいう。

「しかし安心したまえ、ルルーくん。キミのその悲しみ、私がきれいサッパリ忘れさせてあげよう」

「大きなお世話よ！」

まだ涙のアトが残っているけれど、いつもの強気を発揮してルルーはいった。

「なにもかも、みんなあなたたちの陰謀だったのね!!」

「陰謀とはヒトぎきの悪い」

今度は、シェゾがキザに口を開いた。

「これは偉大(いだい)なる実験さ。雲樹の実で、本当に魔界(まかい)の者が倒(たお)せるかどうかのな。どうやら、お前のその様子だと、結果は良好(りょうこう)と判断してよさそうだな」

「そんなに実験したいんなら、伯爵に食べてもらえばよかったじゃない！」

「それは困る」

　と伯爵。

「雲樹の伝説がもし本当ならば、私が死んでしまうではないか。それでは、キミを手に入れることができん」

「オレは雲樹の実の実験がしたかった、そして伯爵はお前さんが欲しかった。昼間は、それのための作戦会議をしてたのさ。いかにしてお前に雲樹の実を渡し、サタンに食わせるかのな」

「私としては、あの時点でキミをモノにしたかったんだがな……。そうすればキミも、こんなに悲しいめにあわなくてもすんだのに」

「ま、そういうコトだ。悪く思うな、ルルー」

「思うわよ！」

「で、なにしにココに来たワケ？」

　アルルが口をはさんだ。

「それは決まってる」

　ビッ！　とシェゾはアルルを指差した。

「アルル、お前の魔力をいただくためさ」
「もちろん私は……」
　そして伯爵が続く。
「ルルーくん、キミを手に入れるためだ。いっておくが、キミを愛しているという気持ちに、ウソ偽りはない。必ずキミをモノにしてみせるぞ。そのためには、多少の手荒いマネも辞さないつもりだ」
「やれるものなら、やってみなさい……！」
　ザッ！
　ルルーは、いつでも必殺技が繰り出せるように身構えた。このまま戦いに突入することになると、せっかくのドレスがだいなしになってしまう。だけど、いまはそんなコトを気にしてるバアイじゃない。ふと見ると、アルルも戦闘態勢を取っている。
「まあ待て、ルルー」
　なだめるようにシェゾがいった。
「お前たちと戦う前に、やらなければならんコトがある」
「なによ？」
「それは、お前たちの望みを完全に断ってコトさ」
　いいながらシェゾは、腰の〝闇の剣〟をスラリと抜いた。

「そいつを使ってな」

チャキッ！

と剣で指した方向には、まだぐうぐうと眠（ねむ）っているカーバンクルの姿が！

『ま、まさか……！』

ルルーとアルルは、思わずハモった。

「察しがいいな……。そう、ルベル・クラクを破壊（はかい）するさ、カーバンクルごとな……！」

シェゾは闇（やみ）の剣（けん）を大きく振（ふ）りかぶる。

「闇の剣よ……」

「カーバンクル！」

ダッ！

ルルーはとっさにダッシュし、すべりこむようにカーバンクルをかばう。それと同時に、闇の剣が振り下ろされた！

「切り裂けっ!!」

ブォォォォォンッ！

剣の軌跡（きせき）が生み出した真っ黒なカマイタチが、猛（もう）スピードでルルーに襲（おそ）いかかる！

「……!!」

避けられないと瞬時にさとったルルーは、カーバンクルをぎゅっと抱きしめて身をこわばらせた。次の瞬間には、黒いカマイタチがやってくる！

が……！

「ルルー！　あぶないっ!!」

ドン！

アルルの叫び声が聞こえたかと思うと、ルルーは突き飛ばされて床に転がった。そして……、

ドゴォンッ!!

ついさっきまでルルーがいたところで、黒いカマイタチが爆発!!

「ちっ！　よけいなマネを……！」

思わずシェゾは舌打ち。それもそのはず、爆発の中心には、なんとアルルがいた！　しかも全身キズだらけで、うつぶせに倒れている。アルルは、とっさにルルーに体当たりして、その身代わりに闇の剣の一撃をマトモに受けたのだった。

「アルル！」

悲痛な叫びとともに、ルルーはアルルのもとに駆け寄った。

「アルル！　しっかりしなさい!!　アルル!!」

「だ、大丈夫……」

なんとか、まだアルルの意識はある。だけどダメージは大きく自力で起き上がれそうにない。

「ちょっち、イタイかも……」
「あなたってコは……！」
カーバンクルといっしょに、ルルーはアルルをやさしく抱きかかえた。思わず、また涙があふれそうになる。
「ホントにおバカなんだから……！」
「まったくだ」
ルルーの感情を逆なでするように、シェゾが冷たくいい放つ。
「アルル、お前が死んでしまったら、オレの魔力はいったいどうなるんだ？」
キッ!!
アルルとカーバンクルを抱いたままの姿勢で、ルルーはシェゾと伯爵をニラみつけた。
「許せないわ、あなたたち……!!」
これほどまでにヒトを憎く思ったコトは、ルルーにはない。
「サタン様だけでなく、アルルまでこんなにして……！」
「おいおい、それは逆恨みってものだぞ。アルルは自分で飛びこんできたんじゃないか」
「うるさ――――いっ!!」
ゴォッ!!

ルルーの怒りが、ついに闘気となって全身から吹き出した。そして、その闘気はトルネードのようにルルーを中心にしてうずをまき、髪やドレスをはためかせる。
「あなたたちにも、サタン様やアルルと同じ痛みを味わってもらうわ……！」
カーバンクルと、いつのまにか気を失ったアルルをそっと床に寝かせて、ルルーはすっくと立ち上がった。
「おやおや、キミひとりで私たちを相手にするつもりかね？」
まだ余裕シャクシャクの表情で、伯爵がいう。昼間の穏やかなフンイキはどこへやら、完全に、邪悪な吸血伯爵に戻ってしまっている。
「サタンに手助けしてもらって、ようやく私に勝ったキミが……？」
「いまのあたくしを、あのときのあたくしと同じだと思ってもらっては困るわ」
そしてルルーは、さらに気合いをこめた。
「はあああああああああああああああああああああ……っ!!」
ゴォォォォォォォォォォォッ!!
闘気の竜巻が、さらに激しさを増す。
「超・女王乱舞!!」
掛け声と同時に、ルルーは光の速さでふたりに突進！

「ナニィッ!?」

「げぇっ!?」

と驚くまもなく、シェゾと伯爵はルルーの闘気に巻き込まれた。

次の瞬間、

カァ…………ッ!!

ルルーを中心に真っ白な光が広がり、そして……!

ズドォォォォンッ!!

光は大爆発となって、島全体を大きく揺るがす!!

『のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……っ!!』

シェゾと伯爵は、ハモりながら吹き飛び、やがて夜空を彩るふたつの星となった……。

「はぁっ、はぁっ……! おとといおいでなさい……!」

ふたりが飛んでいった空をみつめて、ルルーは肩で大きく息をしながらつぶやいた。それと同時に、心の中でルシファーにゴメンなさいをする。それは、超がつくほどの渾身のパワーで放った女王乱舞の大爆発が、シェゾたちもろとも、ルシファーの別荘の半分を吹き飛ばしてしまったからだ。いまでは、見上げれば満月とカンタンに対面できる。

『おーーい!』

ふと、どこかで聞いたような声。見ると、何者かが夜空に羽ばたいている。

2本のリッパなツノを頭にはやし、コウモリのような大きな翼で空に浮かぶそのシルエットは……!

「サタン様!!」

『ブーーーッ! 残念でした。困ったときのあなたの味方、人呼んで〝仮面の貴公子〟マスク・ド・サタンでーす!』

いいながら、声の主はルルーの眼の前に降りてくる。確かに、その人物は今朝にも会ったサタンのコスプレ仮面だった。

「なぁ〜んだ」

『なんだとはごアイサツだな、せっかくキミの友達を救出してあげたのに』

「へ?」

よく見るとマスク・ド・サタンは、まだ眠ったままのカーバンクルと、ぐったりと気絶しているアルルを抱きかかえていた。

『最大パワーで必殺技を繰り出すのも結構だが、まわりのコトも考えねばな。あやうくこのコたちも爆発に巻き込むところだったぞ。ちなみに、こっちの少女には〝犬顎菊〟を飲ませてお

いた。じきに体力も回復して眼が覚めるだろう』
「あ、ありがとう……」
『おやおや？　今朝にくらべて今夜は素直だな』
アルルとカーバンクルを床にそっと寝かせながら、ちょっちイジワルにいった。
「まあ、2回も助けてもらったのは事実だし……、いくらあなたがサタン様のコスプレをした変態仮面でも、やっぱりお礼はいっておかないとね」
『いい方に少々引っかかるモノがあるが、まあいい。その素直さを持ち続けていれば、きっとキミの想い人も大丈夫だろう』
「え……？」
なんでそんなコトまで知ってるの？　と聞こうとした瞬間、
『むっ！　また誰かが私を呼んでいる！　ではまた会おう。アディオス・アミーゴ！』
ばびゅ――――ん!!
まるでつむじ風のように、マスク・ド・サタンは飛び去っていった……。
「…………」
ルルーはというと、呆然とその姿を見送るばかり。
「う、う～ん……」
しばらくしてアルルのうめき声が聞こえ、それでルルーは我にかえった。

「アルル！　大丈夫!?」
「うん、なんだかしらないケド、ものすごくチョーシいいよ」
「よかった――っ!!」
ぎゅううっ！
ルルーは喜びのあまり、アルルを思いっきり抱きしめた。アルルの小さな頭が、ルルーの豊満な胸に力いっぱいおしつけられる。
「む~~~~~っ!!　く、くるひぃよ、ルルー！」
「あ、ゴメンなさい」
プハァッ！　と息つぎしたところで、アルルがたずねた。
「ところで、シェゾたちは？」
「あたくしの女王乱舞で、今ごろはお星サマになってるわ」
「へぇ～、スゴイじゃない！」
「ま――ね」
ルルーはちょっち鼻たーかだか。といっても、いつものタカビーさからのモノではなく、ほめてもらって嬉しいと感じる素直なキモチ。
「あ、そうだ！　だったら、早くカーくんをサタンのところに連れて行かないと！」

「そうね！」

いつものルルーなら、ここで「そんなコトわかってるわよ」ってカンジのセリフが出てくるところ。だけど、あの涙を見せたあとで、いつもみたいにツッパってもしょうがない。それ以前に、ヒニクな態度を取る気にすらならない。

ルルーは、まだお腹を大きくふくらませて眠っているカーバンクルを抱きかかえようとした。

そのとき……、

『お——い！　ルルーくん、アルルくん、無事か!?』

「あれ？　ルシファー先生だよ？」

聞きなれた声を耳にして、アルルがいった。

「どうしたのかしら……？」

しばしふたりで待っていると、森の中からルシファーを始めとした人影がぞろぞろと現れた。

その数は４人。ルシファーと、じいと、ミノタウロスと、そして……！

「サタン様!!」

『おおっ！』

ルルーが歓喜の叫びをあげると、サタンはそれに応えるかのように両手を大きく広げた。

「サタン様、ご無事だったんですね！」

『おおっ！』

ルルーがサタンに駆け寄ると、サタンもルルー方面に駆け寄る。
「サタン様ぁ――――っ！」
『おお――――っ!!』
やがて交わされるアッキ抱擁。……と思いきや、

すかっ。

「え……？」
サタンを抱きしめようとしたルルーの両手は、思いっきり空を切った。
『あああっ！　カーバンクルちゃん、会いたかったよぉぉぉぉっ！』
トッゼンに消えたサタンの声は、これまたトッゼンにルルーの背後から聞こえる。
『また生きてキミに会えるなんて、ボクちんは幸せモノだぁっ！』
ふりかえって見ると、ネボケまなこのカーバンクルにほおずりしてる〝魔界の貴公子〞の姿があった。
「…………」
あまりに予想外の出来事に、ルルーの眼は点。てっきり、サタンは自分を抱きしめてくれると思っていたのに……。
「…………」

サタンがカーバンクルを溺愛しているのは知っているけれど、なーんとなく釈然としない。

『と、カーバンクルちゃんとの再会はこれくらいにしておいて……』

不意にサタンはキリッとしたマジメ顔になり、

『ルルー、オレに対するお前の愛、しかと見届けさせてもらったぞ』

じっとルルーを見つめていった。

「え……？　ど、どういうコトですの？」

『サタンは、ひと芝居うったのだ』

と、ルシファーが補足する。

『キミが、どれほどサタンを愛しているのかを確かめるためにな』

「そ、そんな……！　じゃあ、雲樹の実の毒っていうのは……？」

『あれは本当のコトだ。だが、私やサタンのような高位の者には、より上等な雲樹の実でなければ死ぬことはない』

『まあ、雲樹の実が出てきたのは計算外だったがな』

とサタン。

『伯爵やシェゾがお前にちょっかいを出してくれたおかげで、このテストもうまく運んだといえるだろう。お前がアルルと同じくらい純粋で優しい心や、相当な潜在能力を持っていることまで再確認できたしな』

「そ、そうだったんですの……？」

ちょっと裏切られたようなキモチになって、ルルーはいった。

「あたくしのサタン様への愛は、誰にも負けないと常々いっておりますのに……！」

『すまん。その誰にも負けないという愛が、いったいどれほどのものかを知りたくてな……。許してくれ』

ぺこり、とサタンは頭をさげた。

「許す許さないは、テストの結果しだいですわ」

『そりゃあもちろん合格だ。というより、お前がこれほどまでにオレのことを想っていると知って、感激すら覚えている』

「じゃあ、許してあげます」

といっても、もともと許さないつもりはルルーにはない。

『ルルー……』

ぐいっ。

「あ……」

サタンは、荒っぽくも優しくルルーの手を引き、腰をそっと抱いた。それにあわせて、サタンの顔がぐぐっとルルーに近づく。

これはまさに、今朝の夢とまったく同じシチュエーション！

「………」

ドッキンドッキンドッキン……!

イキナリ、ルルーの胸は大きく高鳴った。このまま、夢のキスシーンに突入か……!?

『ルルー……』

「は、はい……!」

『お前は雲樹の実の毒で苦しむオレを、その命をかけてまで救おうとしてくれた。それだけで、オレを愛するに値する——いや、オレの妃となるにふさわしい』

「ええっ……!?」

『しかし、アルルとルルー、どちらを愛すべきかはオレにはまだわからない』

「は、はあ……」

ルルーはちょっち拍子抜け。夢はこのままプロポーズだったのに……。やっぱり、世の中はそんなにあまくない。

『どうした、不服か……?』

「い、いえ……」

ホントはちょっち不服だけれど。

「でもサタン様、どうしてそれほどまでにアルルに固執なさるんですの?」

『それは、今日のと同じテストをしてみればわかる。きっと同じ結果になるはずだ。だがお前

と違ってアルルの原動力は、その愚かなまでの純粋な優しさにある。それはお前にもわかるだろう？』

「ええ……」

『やがて愛に変わるかもしれない純潔な心と、いまここにある大いなる愛、そのどちらを取るべきかは、やがて時間が、カーバンクルちゃんが解決してくれるだろう』

「………」

正夢にはちょっち遠いけれど、サタンの妃になれる資格があるとわかっただけでも、これは大きな収穫かもしれない。なにしろ、ずっとサタンに振り向いてもらえないのかと思い悩んだり、サタンをあきらめる方向に考えなくてもよいのだから。とにかく、あとはサタン好みの女性になれるように、いま以上の努力をするのみ！

「ねえ、サタン様……」

『なんだ？』

「もしあたくしが、アルルみたいな純粋な心の持ち主になったらどうなさいます？」

『おそらく、まずカーバンクルちゃんがお前のところに行くだろう。そうしたら、オレもきっとお前を迎えに来るさ』

「ホントですの？」

『ホントだとも』

「では、これからまたあなたを追いかけて、いっそうの努力をいたしますわ」
『うむ、期待しているぞ。……では、眼をつぶれ』
「え？」
『いいから眼を閉じろ、お前に褒美をやる。きっとよろこぶはずだ』
「は、はい……！」
ルルーは、いわれるままに眼を閉じた。すると、当然のごとくサタンの姿が見えなくなる。もちろんサタンの気配はバッチリ感じるけれど、ルシファーやアルルたちの気配はまったく感じられない。まるで今朝の夢のように、ふたりっきりの空間にいるよう……。
ぎゅっ……。
ふと、ルルーを抱くサタンの腕に、ほんの少しの力が加わるのを感じた。
そして、サタンの顔がどんどん近づいてくる気配がする。ゆっくり、ゆっくりと、どんどんどんどん、ルルーを包みこむかのように大きくなっていく……。
サタンからのプロポーズはなかったけれど、とにかく〝コレ〟だけはどうやら正夢らしい。
あと数センチ、いや数ミリで夢がルルーのもとに……！
ぐぐっと、
ぐぐぐっと、

ぐぐ――――――っと……!!

エピローグ

「……さま……」

ゆさゆさ。

「……ルー様……！」

ゆさゆさ。

「……ルルー様……！」

ゆさゆさ。

誰（だれ）かが、一生懸命に起こしている。だけどベッドの上のルルーは、いっこうに夢（ゆめ）の世界から戻（もど）ってこようとする気配はない。

「ルルー様ってば……！」

ゆさゆさ。

「う……うん……。むにゃむにゃ……」

「ルルー様、起きてください！」



ゆっさゆっさ。

「うぅ～～～～～～～～ん……」

ゆさゆさのあまりのシツコさに、ルルーはそれを払いのけるように毛布をかぶりなおした。

なによぉ、ジャマしないでよ。せぇっかく、もう少しでサタン様と誓いのくちづけを交わすところだったのにぃ。夢くらいゆっくり見させてほしいわ、まったく……。

って……。

「……!?」

夢——!?

ルルーははたと気がつき、パチッと眼を開けた。すると眼の中に飛びこんでくるのは、横だおしになってるケド、いつもと変わらない自分の部屋の風景。

——ってコトはまさか……!

がばっ!

イッキに眼が覚めて、ルルーは跳ね起きた。そして、とりあえず自分の身体の様子を入念にチェック。

「………」

胸、腰、手足、それから顔、どうやらすべてオーケー。ルルーの眼に飛びこんでくる風景も、

いつもより大きくなったりしていない。

「よかったぁ〜……」

とりあえず、身体がちっちゃくなってないので、ひとまずは安心。まあ、呪いのベッドなんか受け取った覚えがないから、あたりまえといえばあたりまえだけど。

でも、というコトは、その呪いのベッド事件も、伯爵やシェゾとの大騒ぎも、サタンとの会食や愛の試験なんかも、みぃんなみんな夢だったってコト……。

「………」

それにしても……。

とルルーは夢の内容を思い返した。

ものすごくスケールが大きくて、ものすごくリアリティのある夢だったわ……。サタン様に抱かれてた感触なんか、はっきりとあったもの……。

そういった、超大作の夢を見たあとっていうのは、たいていはミョーに疲れてたりするものだけれど、今朝はまったくそんなコトはない。むしろ逆で、たっぷりと熟睡したあとみたいにスッキリしてる。それは、夢の内容が大きくかかわっているからだろうか……？

「………」

とにもかくにも、ルルーはこの夢の中で、なんだかたくさんのコトを学んだような気がする。

まず、サタンの妃になるっていうコトが、自分にいったいどういう影響を及ぼすのかをキチ

ンと考えておく必要がある、っていうコト。サタンは仮にも〝魔界の貴公子〟。普通の人間とはまったく違うのだから、「好き」っていう感情だけで追い続けていたら、ホントにいっしょになったときに破滅を招くかもしれない。魔界の者と人間とがいっしょになることはどういうコトなのかを、理解しておかないとあとできっとタイヘンなめにあう。むかしむかしに、ルシファーと時の女神様が恋をしたけれど、やっぱり神様と魔族ではうまくいかなかったという前例もあることだし……。

それから、もっと素直になれ、というコト。いままでのルルーは、ちょっちプライドが高すぎてカッコつけすぎ。もっと素直になったほうがいいかもしれない。素直じゃないから、喜びたいときにうまく喜べないし、他人のキモチだってうまく伝わってこないし、他人に優しく接することだってできない。それに、アルルのように純粋な素直さを持つ相手にヒケめを感じてしまう。……まあ、アルルほど正直なお人好しにまでならなくてはイイだろうケド。

そして、ナニよりも大事なのは、夢や目標は、達成されるまでゼッタイにあきらめちゃダメだっていうコト。サタンがダメだったら、ほかのヒトでもいいかなぁって考えてるから、伯爵やシェゾなんかの情にほだされてしまうのだ。やっぱり、たとえ一生かかってもサタン様ひと筋でいかないと！　その信念のもとで努力していけば、きっとサタンに想いは通じるはず。もちろん、命と引き換えにサタンにつくすカクゴで……！

「…………」

でもでも、ひとつだけ惜しかったコトがある。それは、たとえ夢の中ででも、サタンとくちびるを重ねることができなかったコト。これはちょっち口惜しい。ミノタウロスが、あともうちょっと遅く起こしてくれればよかったのに……！

「あ、あの～……」

そのミノタウロスが、おずおずと声をかけてきた。

「ルルー様、お身体の具合でも悪いんスか？」

イキナリがばっと起きたかと思えば、身体のあちこちをさわって、それからはじっと考えこんだりすれば、誰だってフシギがるに違いない。

「なんでもないわ」

ルルーは、できるだけミノタウロスを安心させるようにいった。

「おはよう、ミノタウロス」

「お、おはようございまス」

「どうしたの？　なんか、あわてて起こしてたみたいだけど」

「ええ、ももも通販の配送が来てるんで、ルルー様のサインがほしいんス」

「わかったわ。すぐに着替えていくから、ちょっと待っててもらって」

「了解しました」

ミノタウロスは、やがてどたどたと出ていった。

「ん〰〰〰〰〰〰……っ！」

完全にひとりになったところで、ルルーはベッドから降りて大きくのびをした。そして、サイドテーブルに置かれた手紙にちらりと眼をやる。

これは、サタンから昨日とどいたもので、内容はこうだった。

〃ルシファーの作るカレーはもうあきた。たまにはルルーの料理が食べたいな。

というワケで、3日後の夜にそちらにお邪魔させてもらうので、なにか用意して待っていてくれたまえ。

――サタン〃

つまり、サタンがルルーの屋敷に来るのは、いよいよ明日。いい意味での緊張感がだんだん大きくなってきて、ワクワクドキドキしてくる。今晩なんか、メニューはどうしようとか、どんなドレスにしようかとか考えて、きっと眠れないに違いない。

そんな中で、今朝みたいなキモチいい目覚めは、幸先がイイかもしれない。結局は最後までいかなかったけれど、エンギのよさそうな夢も見たし……。

「今朝のが正夢になるといいな……★」

なぁんて、口に出していってみる。

あれ……？　でもこういうのって、正夢になっていいのかしら……？　正夢ってコトはやっぱり、サタン様とくちづけが交わせないってコト……？　それだったら、ちょっとイヤかも。欲求不満になっちゃうわ。でも、逆夢っていうのとは違うし……。

なんだか、頭の中がこんがらがってきた。とりあえず考えるのをやめよう、とルルーは心に決める。

「〜〜〜〜〜？」

とにもかくにも、ハッキリしてることがひとつだけある。いまはそれで充分（じゅうぶん）。世の中はなるようにしかならないし、なにもしなければなんにもならない。というのは恩師（おんし）ルシファーのコトバ。

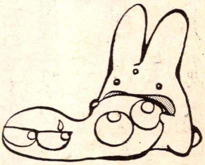
その、たったひとつのハッキリしてるコトとは、もちろんコレ。

サタン様、ルルーはあなたを世界中の誰よりも愛しておりますわ……★

おしまい

あとがき

魔導物語はとぉっても楽し、
みんなでぺらぺらしゃべりますぅ〜。
あ、ちょいなちょいな〜っと。
というワケで、『新★魔導物語2　ルルーと愛の日々』のお目見えでございます。
いや〜、よーやく終わったってカンジ。今回はかなり難産でした。おかげで前作とはちょっちあいだが開いちゃったけど、そのぶん、デキのほうは自分では満足しております。
サブタイトルですでにおわかりだと思いますが、今回はアルル・ナジャではなく、そのライバルのルルーが主人公です。勝ち気でタカビーでワガママだけど、実はとっても優しい女のコの冒険はいかがだったでしょうか？　ちなみに、読んでいただければわかりますが、『魔導物語3　ぷよぷよ大司教の陰謀っ！』とSFC『す〜ぱ〜なぞぷよ通　ルルーの鉄腕繁盛記』の後のエピソードというカンジになってます。実は、『魔導物語3』でサタン様やルシファー先生は魔界に帰っちゃってるんだけど、まあ、いろいろあって戻ってきたというコトで（笑）。できればそのうちに、そのへんのエピソードも小説化したいと思っています。



ところで、前作の『新★魔導物語1　アルルとおとぎの国』について、たくさんのお手紙をいただきました。「ちっちゃいアルルがかわいい」という意見が多くて、書き手としての冥利（みょうり）につきるところです。あと、「初めて小説というものを読んで、好きになった」とか「小説はキライだったけどこれのおかげで好きになった」という意見もあって、書き手としては天国にのぼるようなキモチです。

もちろん『新★魔導物語1』だけじゃなくて、旧作についてのお手紙も、もちろんすべて読ませていただいてます。多謝多謝、サンクフルなカンジです。なかなかお返事できませんが、ボクの眼の黒いうちにかならずしますんで、いましばらくお待ちください。

作家冥利につきるといえば、『ばよえ〜んすぺしゃる』！　これは、ラポートというところから出版されている魔導&ぷよ関係のコミックアンソロジーなんですが、なんと！　これに載っているコミックの中に、ルシファー先生が出ているのです。ルシファー先生は小説のオリジナルキャラなので、あんまりコミックとかには出てこないだろうなと思っていたのですが……。いや〜、うれしい限りです。ちなみに現在、『ばよえ〜んすぺしゃる通』まで出版されていて、どちらも壱先生がイラストやコミックを描かれているので、要チェックですよ。

それからそれから、ソフトバンクという出版社からは『魔導大全一九九六年版』という本が出てまして、これの魔導&ぷよ作品の全リストに、もちろんボクの小説も載っています。この本は、これまでの魔導&ぷよ関係の作品に登場したキャラクターやアイテムなどの事典で、執

筆のときにとても参考になっています。でもさすがに、ルシファー先生の項目はなかった……。ちょっち悲しい。

あと、みなさんはプレイステーション『ぷよぷよ通決定版』のCMをご覧になりましたか？女のコが駅のホームで電車を待っているというシチュエーションのヤツ。そのCMの中で、よく見ると女のコは『新★魔導物語1』を読んでいます。かなり芸が細かくて、いいカンジ。なんとなくうれしくなってしまいます。

これらをはげみにして、『新★魔導物語3』にとりかかりたいと思います。今回のシリーズは『魔導物語ARS』をモチーフにしているので、3巻の主人公は〝彼〟です。ファンの方はたのしみにしててくださいね★

まあ、そーいったワケで最後に一言……。

テーブルトークRPG『創聖記エルジェネシス』絶賛発売中！　ボードゲームやカードゲームを売っているホビーショップで買ってくださいね★

一九九七年一月吉日　ＦＥＡＲ事務所にて

新★魔導物語 2

ルルーと愛の日々

山本 剛

角川文庫　10317

平成九年三月一日　初版発行

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　編集部（〇三）三二三八―八四五一
　　　営業部（〇三）三二三八―八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

印刷所――旭印刷　製本所――多摩文庫

装幀者――杉浦康平

S 56-5　ISBN4-04-415605-0　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

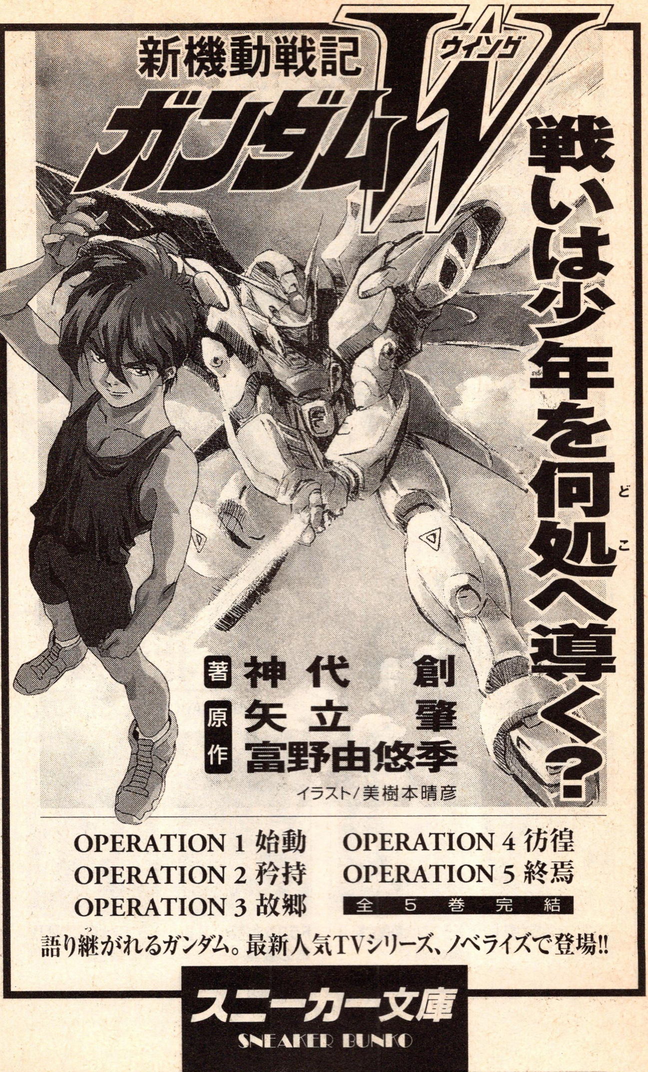
第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

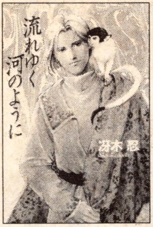
一九四九年五月三日

いつも「スニーカー文庫」を
ご愛読いただきありがとうございます。
今回の作品はいかがでしたか？
ぜひ、ご感想をお送りください。

〈ファンレターのあて先〉
〒102 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店 書籍第一編集部気付
「山本　剛先生」係


新機動戦記
ガンダムW
ウイング
戦いは少年を何処へ導く？
著 神代 創
原作 矢立 肇
富野由悠季
イラスト／美樹本晴彦
OPERATION 1 始動
OPERATION 2 矜持
OPERATION 3 故郷
OPERATION 4 彷徨
OPERATION 5 終焉
全5巻完結
語り継がれるガンダム。最新人気TVシリーズ、ノベライズで登場!!
スニーカー文庫
SNEAKER BUNKO

角川書店の新書判ハードカバー



流れゆく河のように

冴木 忍



O・P・ハンター

神坂 一



王の心 全3巻

富野由悠季



ゴッド・クライシス
―天来鬼神伝―

スニーカー大賞 金賞受賞作

七尾あきら



八の弓、死鳥の矢

花田一三六



風と共に去るぜよ

吉岡 平



黒い季節

スニーカー大賞 金賞受賞作

冲方(うぶかた) 丁(とう)



堕神綺譚 全2巻

前田珠子



戦国餓狼伝

藤 水名子(みなこ)